

石川県埋蔵文化財情報

第 11 号

巻頭写真（太田 A 遺跡、矢田野遺跡）

平成15年度上半期の発掘調査から……………調査部長 小嶋 芳孝…(1)

発掘調査略報

館開テラアト遺跡・仏木新林遺跡・館開城跡・得田氏館跡……………(3)

太田 A 遺跡……………(5)

今浜墓田山遺跡……………(7)

畝田・寺中遺跡他2遺跡……………(8)

大川遺跡……………(10)

矢田野遺跡・矢田借屋古墳群……………(11)

平成15（2003）年度上半期の遺物整理作業……………企画部整理課…(13)

環日本海交流史研究集会の記録「縄文晩期の低湿地集落」

はじめに……………所長 谷内尾晋司…(17)

発表概要 縄文後晩期の北部九州における低湿地遺跡と生業……………水ノ江和同…(18)

山陰地方・縄文時代の低湿地遺跡と後・晩期の生業……………柳浦 俊一…(21)

福井県における縄文時代の低地性集落の概要―越前地方を中心として―…山本 孝一…(24)

石川県における縄文後晩期集落の特質……………伊藤 雅文…(27)

中屋サワ遺跡における縄文時代の川跡について……………谷口 宗治…(30)

真脇遺跡―晩期の環状木柱列と調査の取り組み―……………高田 秀樹…(33)

富山県における縄文後晩期の低湿地集落……………大野 淳也…(36)

新潟県における縄文時代後晩期の低湿地集落と生業……………荒川 隆史…(39)

東北地方における縄文後・晩期の低湿地遺跡……………小久保拓也…(42)

北海道における縄文後晩期の低湿地集落―農耕の視点で考える―……………倉橋 直孝…(45)

討論と展望……………久田 正弘…(48)

報 告

第5回いしかわの発掘展「この世とあの世をつなぐもの」の記録……………田村 昌宏…(50)

調査研究

南加賀地方における弥生時代の一様相……………久田 正弘…(52)

加茂遺跡の祭祀遺構に関する覚書……………松尾 実…(66)

調査報告

御館遺跡……………安 英樹…(74)

2004年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター



太田 A 遺跡空中写真



矢田野遺跡 竪穴建物内のオンドル状遺構

平成15年度上半期の発掘調査から

調査部長 小嶋 芳孝

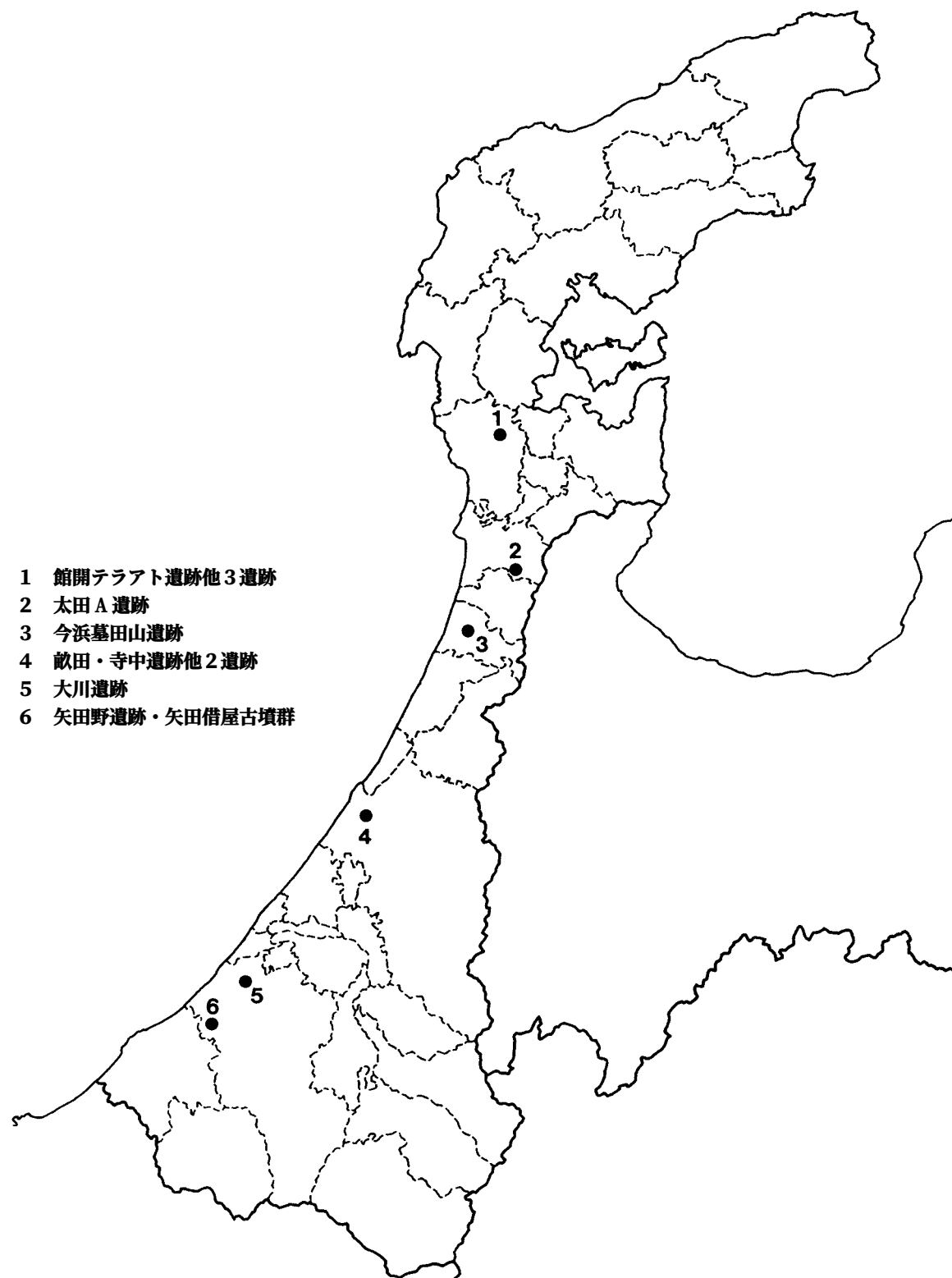
平成15(2003)年度は、県教委から23遺跡の調査を受託した。当初計画の調査面積総計は、65,350㎡である。内訳は、国土交通省事業に伴う調査が3件、県農林水産部関係が10件、県土木部関係が9件、総務部と企画開発部関係が各1件である。

本書では4～8月の調査を主に紹介する。志賀町館開、徳田地内の県営ほ場整備事業に伴う調査で、館開テラアト遺跡、仏木新林遺跡、館開城跡、得田氏館跡を調査した。用水路工事に伴う幅2mのトレンチ調査が中心で、弥生から中世の遺構・遺物を検出している。

羽咋市太田地内の太田A遺跡では、一般国道415号改良工事に伴う調査を実施した。近世の遺構と遺物を検出している。詳細は次号で掲載予定だが、隣接する地区で行われた県営ほ場整備にともなう調査では、中世の方形居館にともなう堀跡を検出している。

金沢市畝田・寺中遺跡では、金沢西部第二土地区画整理事業に伴う調査を実施した。古墳時代から中世の遺構と遺物を検出している。

小松市大川遺跡では、梯川改修事業にともなう調査を実施した。中世から近世の遺構・遺物を検出し、小松市内の中世の様子を考える上で興味深い調査となった。小松市月津町、扇原町地内では、県営ほ場整備事業に伴って矢田野遺跡・矢田借屋古墳群の調査を実施した。この遺跡では県営ほ場整備に伴う調査を三次にわたって実施しており、小松市教育委員会も住宅建設などで調査を行っている。今回の調査では、15号墳の周溝等を検出している。また、7世紀前半の竪穴建物を1棟検出し、内部にオンドル状遺構が敷設されているのを確認している。この遺跡では、オンドル状遺構を伴う竪穴建物の検出は二例目である。これまでの調査によって、額見台地から月津台地の一帯に7世紀代のオンドル状遺構を伴う竪穴建物が造営されていることが明らかになった。渡来系住居がこのような集中して造営されている地域は全国的に見ても事例が少なく、古代江沼地域と渡来人の関係が重要な検討課題となってきた。



調査遺跡位置図

たち びらき

館開テラアト遺跡・仏木新林遺跡・館開城跡・得田氏館跡

ほと ぎり しんばやし

たち びらき

とく だし

所在地 羽咋郡志賀町館開、徳田地内

調査期間 平成15年5月9日～同年7月18日（館開テラアト遺跡、仏木新林遺跡、得田氏館跡）

平成15年11月4日～同年12月19日（館開テラアト遺跡、館開城跡）

調査面積 1,490㎡（館開テラアト遺跡915㎡、仏木新林遺跡80㎡、館開城跡50㎡、得田氏館跡445㎡）

調査担当 本田秀生 谷内明央



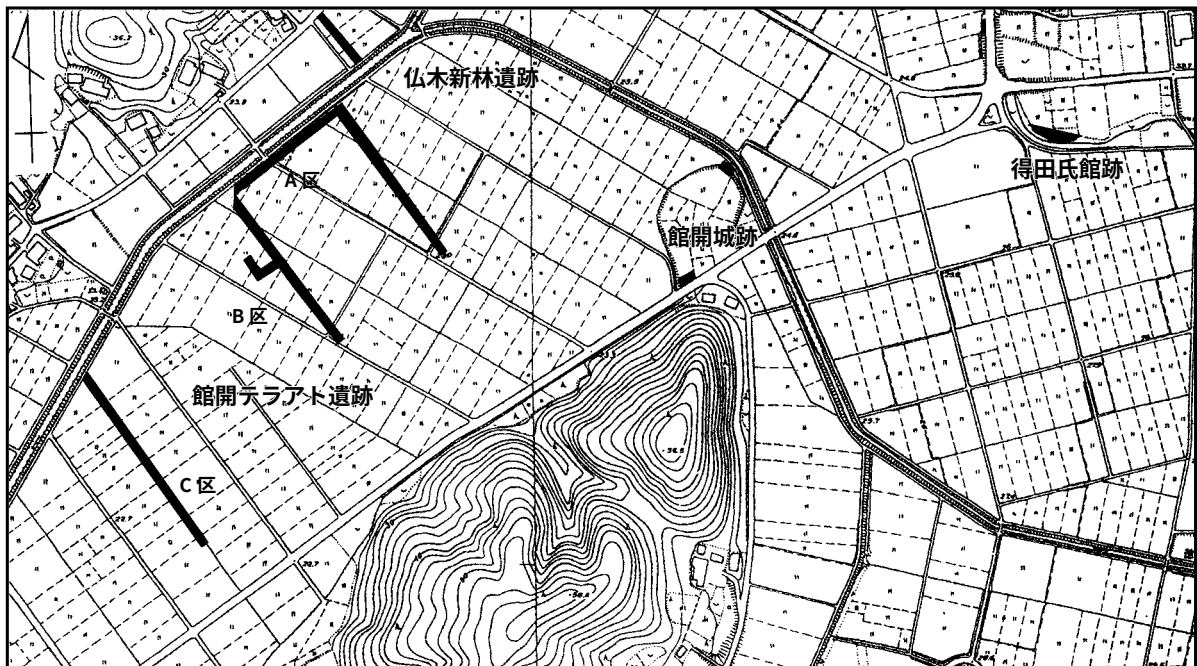
遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

本調査は県営ほ場整備事業土田地区に係る発掘調査である。

館開テラアト遺跡 現館開集落が広がる丘陵東側裾部に立地する。当遺跡は前年度調査によって、旧仏木川を挟んで現集落に展開する地点と現仏木川を中心とする地点の2つのまとまりが確認されている。A区は遺構密度が薄く遺跡縁辺部と考える。旧仏木川と思われる流路を検出した。B区では中世の掘立柱建物・土坑・溝等を検出した。掘立柱建物の柱穴は3基確認している。そのうち1基の掘方埋土から13世紀代と思われる土師器皿がほぼ

完形で出土した。土坑は埋土中位に炭化物を多く含み、その層から多量の土器や木製品が出土している。溝からは杓文字状の木製品が出土した。C区では土坑を検出し、30cm大の平たい安山岩が底面から少し浮いた状態で出土している。

仏木新林遺跡 低丘陵上に立地する。丘陵東側裾部を調査した。古代の土坑を検出し、底面近くから栗の皮が十数点散発的に出土している。



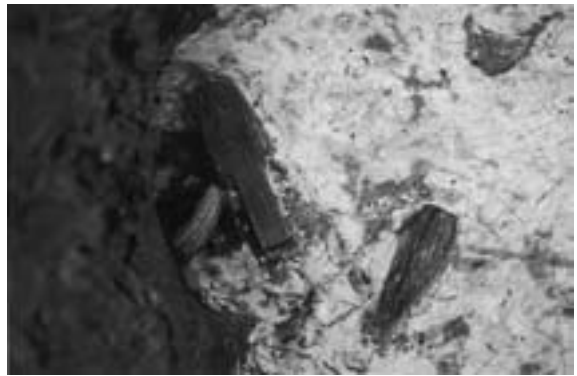
調査区位置図 (S = 1 / 6,000)

館開城跡 舌状にのびる低丘陵上に立地する。この丘陵を地元では城山と呼んでおり、その北側裾部を調査した。縄文時代の土坑を検出し、安山岩製の削器が出土している。底面中央に杭の痕跡が認められることから落とし穴の可能性が高い。古墳時代の溝を検出し、甕・壺・高坏等が多量に出土した。上層から中期の、中・下層から主に前期の土器が出土している。今回の調査では城跡に関連する遺構・遺物は確認できなかった。

得田氏館跡 頂部が平坦な低丘陵上に立地する。丘陵頂部南西端を調査した。弥生時代の竪穴住居を4棟検出した。そのうち3棟は近い場所で2度建替えられており、貼床上面・周溝及び柱穴から甕・高坏等が出土した。出土遺物の主時期は後期である。古墳時代と古代の溝を検出した。古墳時代の溝から甕・壺・高坏等が多量に出土した。出土遺物の主時期は中期である。古代の溝は古墳時代の溝の上から切込んでおり、須恵器の坏や蓋が出土している。他に時期不明だが、礫や炭化物を多量に含んだ土坑を検出した。今回の調査では館跡に関連する遺構・遺物は確認できなかった。 (谷内)



館開テラアト遺跡・掘立柱建物



館開テラアト遺跡・木製品出土状況



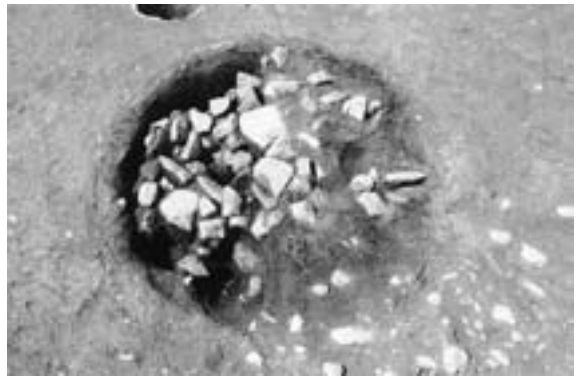
館開城跡・削器出土状況



館開城跡・土器出土状況



得田氏館跡・竪穴住居



得田氏館跡・土坑

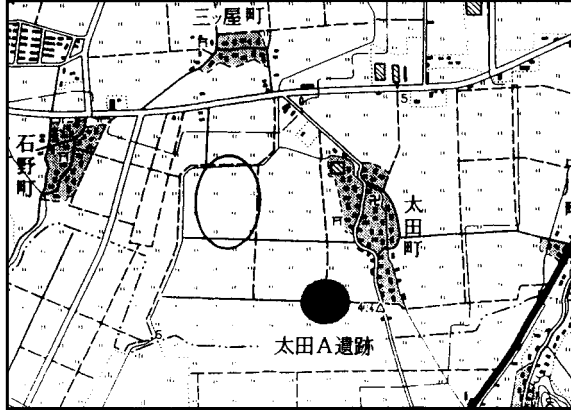
太田A遺跡

所在地 羽咋市太田町地内

調査面積 4,800m²

調査期間 平成15年4月22日～同年9月17日

調査担当 岡本恭一 澤辺利明



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

太田A遺跡は能登半島の基部にあたる羽咋市に所在し、かつて県内第2の規模を誇った邑知潟南縁に位置する。

発掘調査は一般国道415号改良工事にともなうもので、A～Cの調査区に分割して行なった。

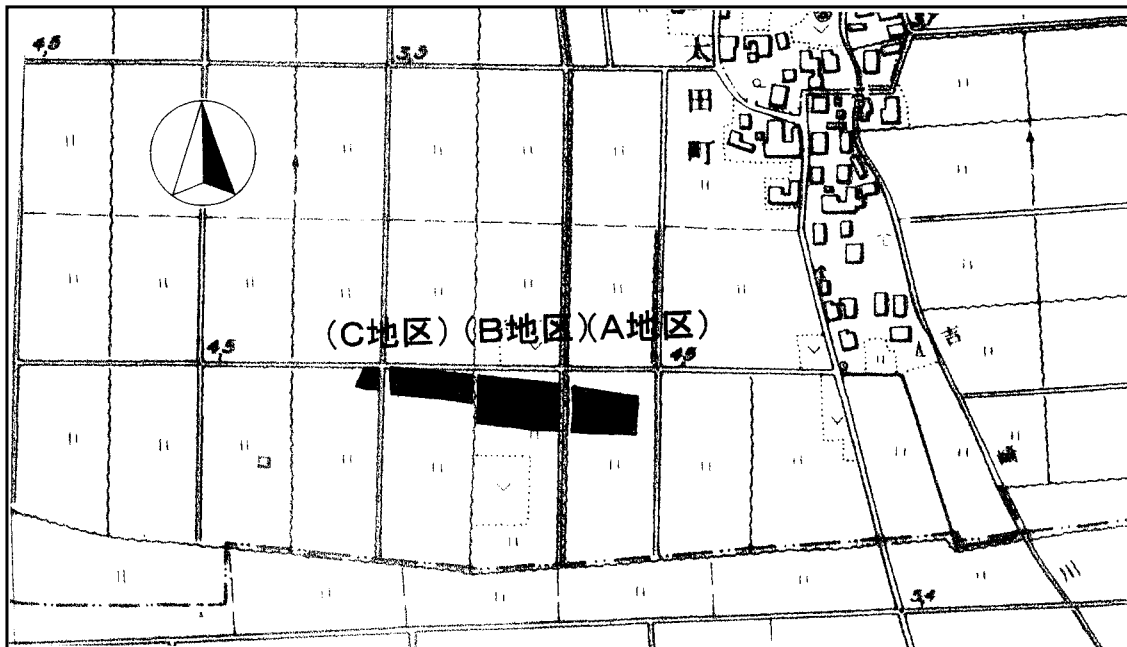
A地区は中世を中心とした掘立柱建物やこれを囲む溝を検出したほか弥生時代終末期の溝1条を確認した。

B地区は江戸時代の遺構が中心で、掘立柱建物や井戸、溝、土坑、旧河道を検出したほか、調査区中央部で弥生時代後期の平地式建物1棟を確認

した。

C地区では遺構、遺物の密度は希薄で、B地区から延びる溝1条のほか、小規模な柱穴等を検出した。

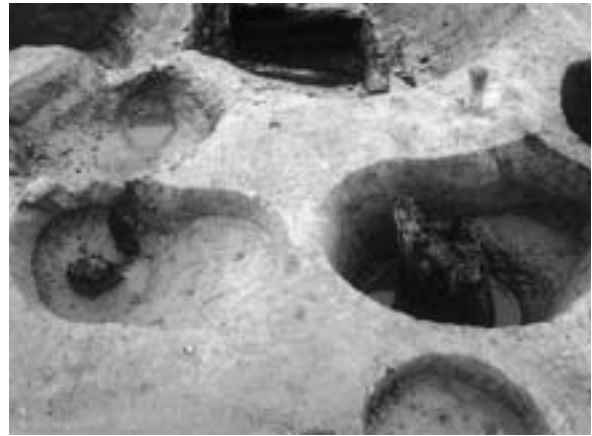
以上の調査結果から現在吉崎川に沿って延びる太田の集落が江戸時代以前にはその西側の水田中にも営まれていたことが判明し、集落の変遷を考える上で貴重な資料が得られたと言えよう。(岡本)



調査区位置図 (S = 1/5,000)



B 地区井戸掘削状況



B 地区柱根検出状況



A 地区完掘状況（北西から）



B 地区完掘状況（北西から）



A・B 地区遠景（北から）

いま はま はか だ やま
今 浜 墓 田 山 遺 跡

所在地 羽咋郡押水町字今浜地内

調査期間 平成15年9月4日～同年10月6日

調査面積 560㎡

調査担当 松山和彦 白田義彦

今浜墓田山遺跡は押水町字今浜地内に所在し、道路を挟んだ西側に宝達高校がある。この道路から西側は小高くなっており、集落が展開している。調査区とその道路の高低差は約2～3mぐらいであった。周辺の地形は宝達高校から北側へ緩やかに下っていくものであった。丘陵の裾部の調査となり、丁度この丘陵の裾をなぞるような調査区範囲である。調査区は長さ約280m、幅約2mの細長いものである。

主な遺構を挙げると溝と鞍部である。溝は調査区北側で比較的多く検出された。北側の調査区壁断面で遺構面が耕地整理時に切られているのが確認できたので、比較的深い遺構のみが残ったものであろう。古代の集落が調査区北側に展開していた可能性は高い。また、調査区内に鞍部が数ヶ所検出され、古代の須恵器が多く出土した。この鞍部は旧宝達川の流路の可能性がある。旧宝達川がこの小高い丘陵の裾を流れていたのではなかろうか。この丘陵の裾を回って日本海に注ぐ時期もあったと思われる。鞍部の落ち際にまとまった数の古代の須恵器が出土していることから、古代の景観を復元すると、旧宝達川沿いに古代の集落が展開していたのかもしれない。(白田)



遺跡位置図 (S = 1/25,000)



鞍部土器出土状況



調査区北側完掘状況 (南から)



調査区南側完掘状況 (北から)

うねだ・じちゅう 畝田・寺中遺跡他2遺跡

所在地 金沢市畝田西3丁目地内

調査期間 平成15年7月7日～同年9月3日

調査面積 1,120m²

調査担当 浜崎 悟司 渡邊 大輔



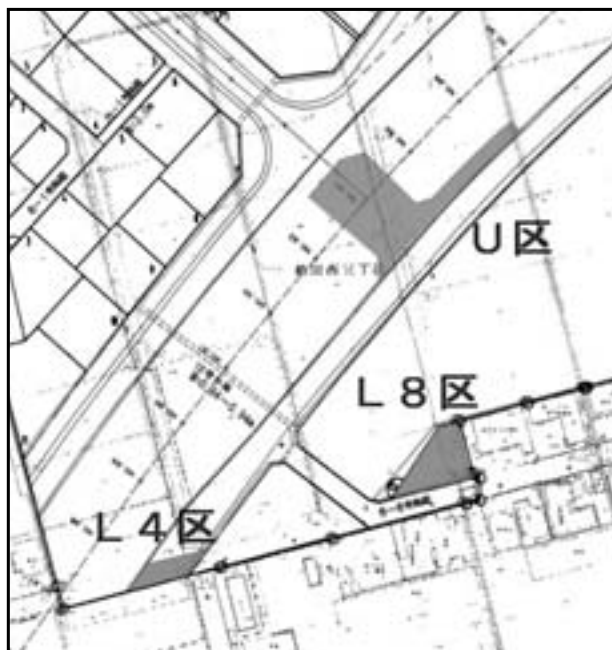
遺跡位置図 (S = 1/20,000)

金沢市西部の沖積平野に展開する長期にわたる集落跡で、縄文時代後・晩期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉～室町時代の遺構・遺物を確認した。本遺跡の調査は平成11年度からの継続であり、今回の平成15年度調査をもって畝田・寺中遺跡を含む金沢西部第2土地区画整理事業に係る発掘調査の現地作業は終了する。これまでの調査に関しては、当誌第3号、第4号、第6号、第8号及び第10号に略報が掲載されている。今年度はU区、L4区、L8区を調査した。なお、調査区域には畝田遺跡、畝田大徳川遺跡を包括する。以下、調査区

ごとの概略を記す。

U区 古墳時代の集落跡が中心で、掘立柱建物5棟〔布掘り2、側柱3（うち中世1、奈良1）〕、周溝を持つ平地式建物1棟を確認した。中世の大溝が調査区の西を南―北方向に通り、古墳時代の大溝が調査区の北東を南東―北西方向に通る。古墳時代の遺構は主に古墳時代の大溝より西に展開する。一方、調査区北東端では鎌倉時代の井戸を検出した。井戸枠下段は残存しており、おもな遺物としては掘方から珠洲焼の甕片が出土した。

L4区 南東―北東方向の古墳時代の溝3条のみ検出。遺構密度は薄く、遺物も少ない。



調査区位置図 (S = 1/2,000)

L8区 調査区西側で小河川（過年度調査で検出したものの延長部）を検出した。古墳時代を中心とする土器が大量に中層～下層より出土した。特に下層での大量の土器の取り上げは、激しい湧水のため両手ですくうような状態での作業となった。その他、弓などの木製品のほか、中層～下層の土壌の水洗選別により30点ちかくの白玉と数点の管玉が出土した。調査区東側では土器片を多く含む縄文時代晩期の包含層を確認し、それ以外に古墳時代から中世にかかる柱穴を検出した。

今年度の調査結果を周辺における過去の調査結果と考えあわせると、隣接する古墳時代前期の有力な集落と考えられる畝田遺跡が、中期～後期にかけて中心をこの地に移し、古墳時代の大溝（U区でも検出）から西側で集落を形成し

たものと考えられる。畝田遺跡での儀杖・弧文板・卜骨の出土、畝田・寺中遺跡での祭祀土坑の検出、祭祀具(石製・木製)や玉類の出土は、古墳時代において祭祀や卜占を主宰する有力な首長の存在の可能性を示し、これらの集落群が周辺地域にかなりの影響力を及ぼす中核的集落であったと考えられる。

この地における奈良時代の集落群には過年度調査において大型建物跡や倉庫群の検出、郡符木簡・出拳木簡・「津司」墨書土器の出土などから、古墳時代の地盤を引き継いだ本遺跡の至近に、港の機能をもつ、加賀郡衙関連施設が存在した可能性が考えられる。

今回、奈良時代の遺構はさほど多くなかったが、本遺跡の性格について、従来、指摘されてきた事柄と、特に矛盾するものではなく、遺跡の南部域の状況をより明らかにするものであろう。

集落の営みは時間の経過とともに、その性格を大きく変えるが、中世に入っても、この地における海路・水路の水上交通の役割は陸路に劣らず大きく、水運という地の利を生かして、その規模を大きくしていったと思われる。

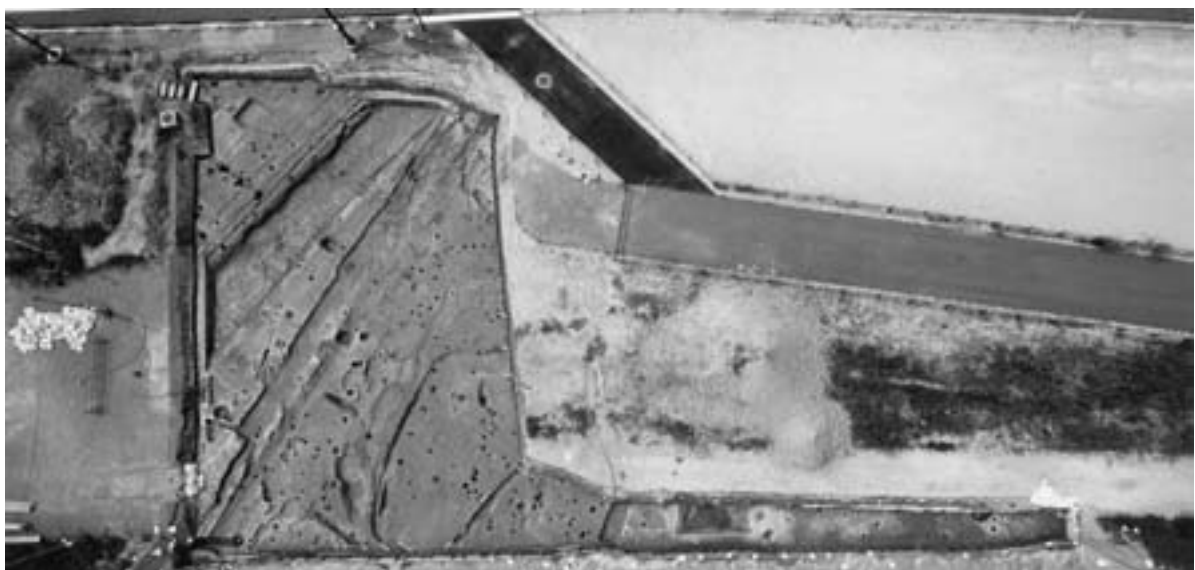
(渡邊)



U区 SD11土器出土状況(北から)



L8区調査区全景(北から)



U区調査区全景(写真上が北西)

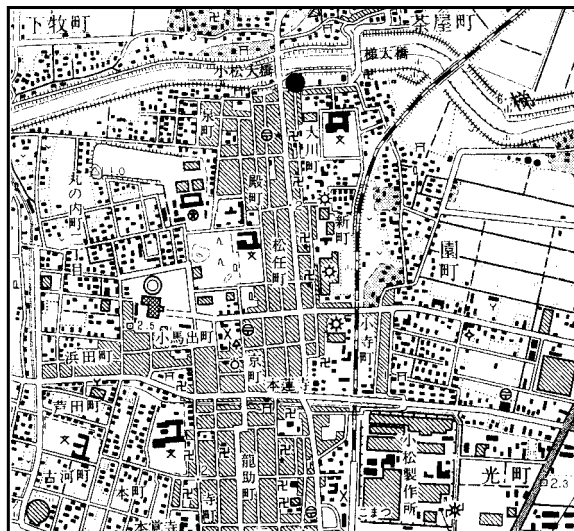
おお かわ
大 川 遺 跡

所 在 地 小松市大川町地内

調査面積 1,300㎡

調査期間 平成15年5月26日～同年8月19日

調査担当 久田正弘 竹田麻里子



遺跡位置図 (S = 1/25,000)



東半完掘状況 (北西から)



SE04 (南から)

大川遺跡は小松市大川町地内にある遺跡で、梯川下流域に架かる小松大橋の左岸に位置する。発掘調査は梯川河川改修工事に伴うものである。大川町の標高は海拔3m、調査区は上流の東側より西へ低くなっており海拔0.9～1.5mである。このためたびたび水害に遭い泥に埋まっていたようで、近世で大川町は泥町という町名で呼ばれていた。

本遺跡からは中世の井戸、土坑、溝等、近世の井戸、川跡を確認している。遺構・遺物のほとんどは調査区の東半に集中して検出された。中世の井戸は4基検出され、うち3基には井戸枠が残存する。SE02で曲物の水溜が検出されている。SE04からは縦板を組んだ井戸枠が検出され、東西南北にそれぞれ約5cm幅の細く薄い縦板が各30枚程組まれていた。SE06は縦板と曲物の井戸枠である。SE06の縦板もSE04と同様に数多くの細く薄い板であった。SE01、SE02、SE04は東半で近接して検出された。これらSE01、02、04の西側に建物と思われるピットを検出したが、断定には至らなかった。近世の井戸SE05には4段から成る桶が残っていた。

遺物は土師質皿が出土しており、特に土坑等に一括廃棄されたものが多い。わずかに越前焼や珠洲焼もあり、凝灰岩の切石がSE01に廃棄されていた。また、東半部北側を占めるSD01からは江戸時代の下駄、漆器、陶器、磁器等が数多く検出された。SD01はすぐそばにある近世の北陸道と平行に走っている。調査区外西側にこれに直交する用水があり、近世には梯川の水運を利用した水路として機能していたようでSD01も運河のような要素を含んでいた可能性が考えられる。

(竹田)

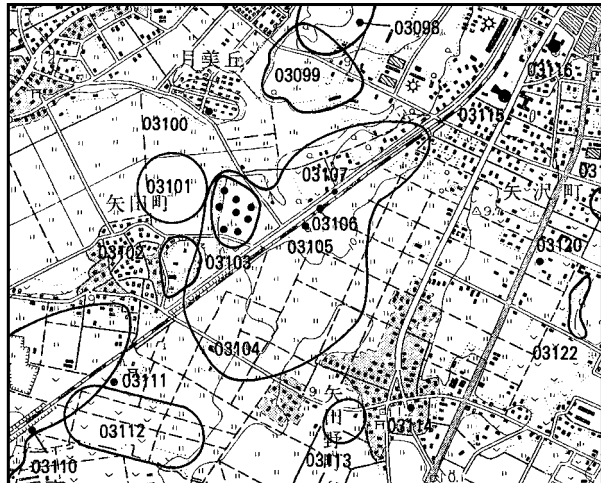
や た の 矢 田 野 遺 跡 ・ や た か り や 矢 田 借 屋 古 墳 群

所在地 小松市月津町、扇原町地内

調査期間 平成15年7月7日～同年9月25日

調査面積 870m²

調査担当 和田龍介 林 大智



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

矢田野遺跡・矢田借屋古墳群は、小松市南部に位置する月津台地上に立地している。この台地の東西には、現在干拓により消滅・縮小しているが、加賀三湖と総称される今江潟、柴山潟、木場潟が存在しており、かつては梯川と合流して日本海に注ぎ込んでいたものと考えられる。また、台地のほぼ中央には、柴山潟に注ぎ込む馬渡川によって形成された開析谷が入り込んでおり、遺跡はこの谷を取り囲むように展開している。

月津台地周辺には遺跡が数多く分布しており、特に矢田野エジリ古墳や御幸塚古墳などの

古墳、額見町遺跡や念仏林南遺跡など古墳時代から古代にかけて営まれた大規模集落、北陸有数の規模を誇る南加賀製陶・製鉄遺跡群が特筆できる。

発掘調査は県営ほ場整備事業を原因としている。(財)石川県埋蔵文化財センターではこれまで3次にわたる調査を行っており、古墳時代後期から奈良時代の遺構・遺物を確認している。なお、周辺の発掘調査・確認調査は、小松市教育委員会でも複数年次にわたって実施している。

平成15年度は、北陸本線より北側4地点(A～D区)の調査を実施し、古墳2基と竪穴建物1棟などの遺構を検出した。以下、地区ごとに概要を述べる。

A区では古墳1基を確認した。古墳は直径11.5mの円墳で、平成13年度に小松市教育委員会が調査を行った15号墳に該当する。上部の削平が著しいため周溝のみの検出に留まった。古墳の北東側には、周溝が埋没した後、墳丘に隣接して新たな周溝を掘削している。周溝で囲まれた範囲は、長軸6.8mを測り、平面形態は不整形を呈する。この周溝は15号墳墳丘側には認められない。また、15号墳の周溝上部では、新たな周溝に伴うものと考えられる埋葬施設を確認した。埋葬主体は木棺直葬である可能性が高い。土坑は長さ3.5m、最大幅1.3mを測り、木棺痕跡は長さは2.1m以上、幅59cmを測る。木棺内からは、ほぼ完形の須恵器壺が正位で出土した。時期は6世紀後半頃に位置づけられる。

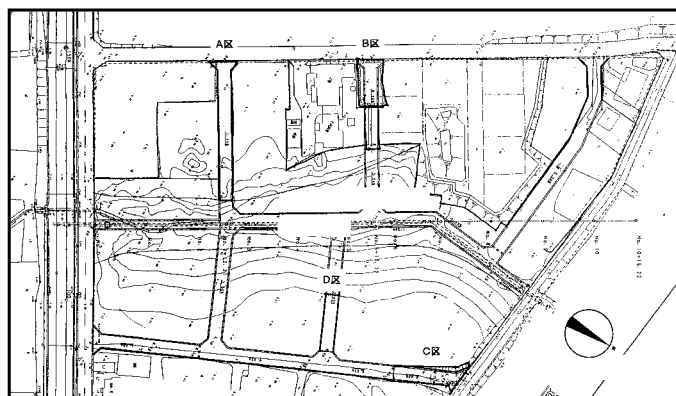


A区 古墳完掘状況



A区 埋葬施設須恵器壺出土状況

B区では古墳1基を確認した。北西側および南西側の道路部分は既に削平されている。調査範囲が狭いため全形を窺うことは困難であるが、径10m前後の円墳である可能性が高い。周溝からは定量の須恵器が出土しており、時期は7世紀前半に位置づけられる。



調査区配置図 (S=1/3,000)

C区では竪穴建物1棟などの遺構を確認した。竪穴建物は1辺約7.5mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。支柱穴は4本で構成されていた可能性が高く、調査区内では柱穴3基を確認している。北西側の壁際には粘土でオンドル状遺構が構築されており、焚口には凝灰岩製の支脚も認められた。床面には支柱穴の内側を中心に貼床が行われており、貼床内からは錆化した鉄片が定量認められた。また、南側の支柱穴内からは鍛冶滓も出土しており、竪穴建物内部もしくは周辺で鍛冶作業が行われていた可能性が高い。この建物の時期は7世紀前半に位置づけられる。また、調査区南東隅では竪穴状遺構も確認されたが、大部分が調査区外に延びているため、竪穴建物として認定することは困難であった。

D区では柱穴、土坑などの遺構を確認した。遺構の密度は北東側へ向かうに従って増加する傾向が認められることから、集落の中心部は、現在の扇原町住宅地周辺に存在していた可能性が高い。土坑のなかには、覆土に多量の焼土を含むものも認められる。これはカマドを取り壊した際に生じた焼土を廃棄した土坑である可能性が高く、周辺に建物が存在していた可能性が高い。

これまでの調査成果をまとめると、矢田借屋古墳群は、矢田野古墳や百人塚古墳を含めて、6世紀前半から7世紀前半に造営された前方後円墳3基、円墳21基以上で構成される大きな古墳群として捉えられることが明らかになった。一方、矢田野遺跡は、6世紀前半から奈良時代まで集落が営まれており、存続時期の重複や位置関係から、この遺跡に居住した人々が古墳群の造営基盤であったことを推定できる。また、矢田野遺跡では掘立柱建物33棟以上、竪穴建物17棟以上の建物が確認されており、周辺に所在する額見町遺跡や念仏林南遺跡と同様に大規模な集落であったことが推測できる。さらに、オンドル状遺構を備えた竪穴建物2棟が認められることや、フイゴの羽口や鉄滓などの鍛冶関連資料が多くみられることから、渡来系の人々が集落内に居住していたことを推定できる。

これらの成果により、今後両遺跡は、月津台地周辺の古代史像を考えるうえで欠くことのできない遺跡となるものと思われる。なお、発掘調査は来年度も継続して行われる予定である。 (林)



C区 竪穴建物完掘状況



C区 竪穴建物内のオンドル状遺構

平成15（2003）年度上半期の遺物整理作業

企画部整理課

1 班

四柳白山下遺跡（羽咋市）は、断続的ながら、縄文時代中期から江戸時代にかけての非常に長期間にわたる人々の活動の跡が同一遺跡内で確認できる貴重な遺跡である。今回1班の担当した整理作業は、第3次調査にあたる平成8年度に発掘調査されたもので、昨年度すでに記名・分類・接合作業を終了した遺物の実測等を実施した。

土器に関しては、私たちの班は須恵器が主で、縄文土器や中世陶磁器などが少し含まれていた。須恵器には墨書を施したものが数十点ある中、墨の残りが良くて字の見やすいものと、赤外線を照射してもよく見えないものがあり、なかなか実測にも苦労した。しかし、この遺跡はどの墨書も書がきれいで、字の見えるものはとても書きやすかった。文字は、「田地」、「大家」、「家」、「梗女」、「菅女」、「酒女」、「大町」など、その内容にも興味をもたれた。

また、フイゴの羽口があるのに伴って鉄滓も数点あり、さらに金環、銅銭、帯金具などの金属製品、砥石や硯、石鏃といった幅広い時代の石製品を実測した。なお、木製品は柱根をはじめ漆器皿・碗の他、中世の木簡もあり、字が途中読みづらく実測はかなり難航した。（大西洋恵）

2 班

上半期は、四柳白山下遺跡の第3次調査、寺社今社遺跡・高照寺墓地（珠洲市）の整理作業を完了し、現在は、千代・能美遺跡（小松市）の記名・分類・接合作業を行っている。四柳白山下遺跡からは、縄文土器から近世陶磁器まで幅広く出土していた。

その中では須恵器が約半数を占めているのだが、一番印象に残っている土器は、7種類のスタンプ文が、1種類1段ずつ押されていた土師器の脚部である。7段のうち真ん中の段のスタンプ文は、何かの動物のようであった。このようなスタンプ文を見たのは初めてであった為、興味深く何度も手にとって見ていた。

また、寺社今社遺跡からは、「右万呂」と書かれた墨書土器や須恵器坏の高台内に漆が付着した墨書土器も出土していた。（河崎真帆）

3 班

白江 梯 川遺跡（小松市）の平成5～7年度調査の記名・分類・接合、実測・トレース作業を行った。遺跡の時代範囲が広く（古墳、平安、鎌倉、室町、江戸、明治時代）、出土遺物は多種多様で、金属器では筭や簪、煙管の吸口と鍔がセットになったもの、石器では行火や火鉢、石帯、宝篋印塔等、また、木器では模様の美しい漆器、大量の箸、下駄、折敷、木さじ、重箱、櫛等に昔の人の生活を垣間見るようで興味深かった。

続いて吉田南側B遺跡（田鶴浜町）の平成14年度調査の記名・分類・接合、実測・トレース作業を、そして、金沢城跡北ノ丸1次（金沢市）の平成12年度調査の土器実測、瓦・石瓦の分類・接合作業を行った。（朝倉佳子）

4 班

梅田B遺跡（金沢市）の平成9年度・第5次調査の整理作業を行った。縄文時代～江戸時代とい

う時代範囲の広い遺跡であるために、出土遺物も様々で、整理作業時は毎日が時の旅だった。

その長きにわたる時代の流れに対して、ある一日の出来事に触れる瞬間があった。

『今日水をと須へからず』

と書かれた木簡の、たった10文字と花押からなる墨書札。いったい何の水なのか？当日、何故に水を落としてはいけなかったのか？幾年もの時を越えた現代に生きる私が、まるで、過去に生きた人からのメッセージを受け取ったかのような、不思議な感覚を体験した。そして現在、“今日”という1日と真剣に向き合うきっかけを、与えてもらったように思える。

(本保早苗)

5 班

私達の班は、小松城跡（小松市）の平成11・13年度調査、南塚遺跡（金沢市）の平成14年度調査、たちびらき館開テラアト遺跡（志賀町）の平成14年度調査、大町ゴンジョガリ遺跡（羽咋市）の平成12年度調査の整理作業を担当した。

大町ゴンジョガリ遺跡以外はパンケース数の少ない小規模の遺跡だった。作業期間の短い遺跡は事務的な事柄に煩わされて、肝心の遺物の印象が薄くなってしまいがちであるが、この上半期に、小松城の瓦や陶磁器類、館開テラアト遺跡の独菜、大町ゴンジョガリ遺跡の収蔵庫の棚に入るかどうか心配になるほどの大甕などといった珍しいものも含め、基本的な業務を実地で学び直すような様々な遺物整理に携われたのは、今後仕事をする上で生きてくると思う。

(北 康子)

6 班

上半期の整理作業で特に印象に残っているのは、畝田ナベタ遺跡（金沢市）の平成14年度調査の整理作業である。木器の実測を行ったのであるが、井戸関係の大型木器が数多くあり、丸木舟を転用した井戸枠や組み立てていく横板・縦板、井戸枠に転用した曲物などがあった。

これらを実測後、復元する作業を行ったのであるが（写真①～⑧）、丸木舟を転用した井戸枠は4つに割れていたため、円になるように接合。横板に関しては、まず、横板1本1本の厚さや木目をよく観察し、同一の木から作られたかどうか、上下・左右につながるかを確認後、組み立てていった。方角や何本目なのか気をつけつつ作業を進め、真夏の暑さとの戦いの中、やっと組み上がった時は班員全員で喜んだ。

実測時、これらの木器に寄生する虫との格闘も含め、大変貴重な体験をしたのではないだろうか。

(角間律子)

7 班

うねだ畝田・寺中遺跡（金沢市）の平成14年度調査の記名・分類・接合作業及び木製品の実測・トレース作業を行った。この遺跡では、小型から大型まで様々な種類の木製品が見られた。

中でも特に注目したのは、奈良時代の溝から出土した「畝田・寺中遺跡第11号木簡」である。この郡符木簡は、下半部は欠損しているものの、刃物痕跡やキリオリ痕跡が見られた。また、墨痕も表裏面とも明瞭に残っており、手に取って一字一字見ていると、感慨深いものがあった。

その後、同遺跡平成13年度調査の土器、小玉類の実測に入った。小玉類では、弥生時代中期のものとされるヒスイ製の勾玉や滑石製白玉等があった。

(北 香織)



① 復元前（水槽から引き上げ）



⑤ 組み立て中（要領が分かればこんなもの？）



② 復元準備（組み合わせ順序確認）



⑥ 組み立て中（担当者チェックはいる）



③ 1段目組み立て（最初が肝心）



⑦ もうすぐ完成（もう背がとどきません）



④ 2段目組み立て（図面とあってる？）



⑧ 復元完了（満足。でも、また解体ね）

畝田ナベタ遺跡井戸枠の復元作業

8 班

畝田・寺中遺跡の平成14年度調査の記名・分類・接合及び、実測・トレース作業を行った。接合では、磨耗が激しく接合点が見つけづらく、接合しても壊れやすい物が多かった。

出土品には、縄文、弥生土器を含む数々の壺、甕、高坏、器台、手づくね等の土師器、須恵器類があった。中でも、邪視文風に文様が施されている土器があり、邪気をにらみつけている様をうまく表せず苦勞した。

墨書土器もあり、「男山」、「山田」と書かれた物等があった。木器では、弓の黒漆塗りの物、目盛板、糸巻、木錘、曲柄平鋤、背負子等もあった。その他に金属、石器も実測し、様々な遺物に触れる事ができた。

(池田くみ子)



分類・接合作業（まだまだあります）

洗浄班

上半期は小杉遺跡（山中町）、畝田・寺中遺跡、畝田 C 遺跡（金沢市）、杉野屋専光寺遺跡（志雄町）、小島西遺跡（七尾市）、加茂遺跡（津幡町）の平成14年度調査の洗浄、乾燥作業を行った。その内の小杉遺跡は、記名までを合わせて実施した。

最近では、ジェットマーカーを使つての記名が主だが、小杉遺跡は手書きで行った。縄文土器73箱、石器38箱、特大の石が12個と、大変な数を3人の手書き専門の人たちによって細かい作業が約3ヶ月も続いた。洗浄の方も土器に炭化物が多く付着していたので、それが取れないように気をつけながら慎重に、丁寧に作業を行った。

(末富しげ子)

復元班

大甕や横瓶、双耳瓶等の須恵器が多くあった四柳白山下遺跡。壺、甕、または深鉢、高坏、器台もぞろぞろ出てくる、土師器の畝田・寺中遺跡。小さな皿が多く出て、火鉢、灯明皿があった白江梯川遺跡。

今年度の土器復元・修復作業は、点数が30点以上ある遺跡が多かった。復元の材料である「石膏」も、けっこう大量に消費しただろう。梅田 B 遺跡では、深鉢形の火鉢など特色ある瓦質土器に、いつもより時間を費やした。

積み重ねられたパンケースの中に、未知の土器がいつかでてくるだろうか。

(小間博文)

環日本海交流史研究集会の記録

「縄文晩期の低湿地集落」

所長 谷内尾 晋司

はじめに

石川県はもとより、日本海沿岸地域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次いでおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿岸地域各地の研究者にご参集いただき、年1回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

平成15年度は「縄文晩期の低湿地集落―生業の視点で考える―」をテーマに開催いたしました。

低湿地に立地する遺跡は、豊富な植物質遺物を遺存していることから、その価値については古くから注目されておりましたが、最近では多角的な視点からの居住環境や生業活動研究が盛んとなり、さらに重要性が高まっております。近年特に日本海側を中心に、水場遺構や貯蔵穴などを含む縄文時代の低湿地遺跡の大規模な発掘調査が相次いでおり、石川県内でも、晩期の環状木柱列が発見された金沢市新保チカモリ遺跡、米泉遺跡、能都町真脇遺跡や「ドングリピット」と川跡から「木組み状遺構」が発見され、豊富な植物質遺物を出土した金沢市中屋サワ遺跡などの調査がおこなわれ、縄文文化の豊かな内容が明らかにされつつあります。また、放射性炭素年代測定で北部九州での弥生時代の開始が500年ほど早まることが明らかにされ、稲作を主体とした弥生的社会と縄文的社会が列島内で長期間併存した可能性が高いという見方が支配的になりつつあります。

このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、生業の視点から列島の東北部を含めた日本海沿岸地域の縄文後晩期の低湿地遺跡について焦点を当てました。北部九州地方については福岡県の水ノ江和同氏、山陰地方については島根県の柳浦俊一氏、北陸地方については福井県の山本孝一氏、石川県の伊藤雅文氏、高田秀樹氏、谷口宗治司、富山県の大野淳也氏、新潟県の荒川隆史氏、東北地方については青森県小久保拓也氏、北海道地方については倉橋直孝氏にお願いし、各地域の実態や状況をご報告いただき、研究討議をおこないました。

報告や討議の中で、遺跡の立地や貯蔵穴等の遺構、大型打製石斧等の遺物出土状況から、穀物栽培やトチ、クリ、クルミなどの堅果類の人為的管理を含めた生業活動の在り方が大きな論点となり、縄文後晩期の低湿地集落といっても各地でそれぞれ状況が異なり、生業活動も一律ではないことが明らかにされました。集落立地に応じた狩猟、漁猟に加え植物の栽培と加工技術を発展させ、自然の恩恵を熟知し共生しながら、豊かな精神文化を謳歌した縄文文化がなぜ変容し弥生文化に置き換わっていったのか、この素朴な疑問を解明していくことがこれからの大きな課題であると感じました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。



縄文後晩期の北部九州における低湿地遺跡と生業

水ノ江 和同（福岡県国立博物館対策室）

北部九州は、稲作農耕文化がいち早く取り入れられ根付いた地域として広く知られている。したがって、それに先行する縄文後晩期についても、西日本の中では集落遺跡の調査事例が傑出して多いだけに、低湿地遺跡やそこから復元する生業の実態もかなり明らかな地域として思われがちである。しかし実際には、低湿地遺跡はドングリ貯蔵穴にほぼ限られ、生業の実態もよくわかっていない。

こうした中、山崎純男は、①後期初頭に急増するドングリ貯蔵穴は後期後半以降低調になる、②後期後半から土掘り具としての扁平打製石斧が急増する、③伐採具である磨製石斧は後期後半から急増する、④稲作に関連する打製石鎌・打製石包丁・軋圧痕土器は後期後半から出現する、⑤畑小屋（出作小屋）とされる小規模集落遺跡が後期後半から丘陵上に構築される、といった主に5つの理由により、後期後半を境として、植物質食料の対象が堅果類から焼き畑による根茎類等へと変わっていき、その主体がイネである可能性を提示した。このことは、北部九州の弥生時代を特徴付ける水田稲作の受容と展開が、従来より言われている突発的かつ急激なものではなく、その前段階として丘陵上に展開した焼き畑の存在を通して、比較的スムーズかつ発展段階的にそれが進行したことを想定した見解として大いに注目されよう。

なお、この後晩期における北部九州の集落構造についてふれておきたい。後期集落は低位河岸段丘上に立地し、当初1～2軒の円形住居が次第に増えて3～4軒となった段階で大きく2群に分かれ、その後徐々に衰退していくパターンが一般的である。これに対し晩期の集落は丘陵の縁辺部に立地し、一辺3～4mの方形住居が相当な数で切り合うようになる。したがって、後期集落と晩期集落が同一遺跡で検出されることはほとんどなく、むしろ晩期集落については弥生時代初頭期の集落と連続する傾向にある。このような遺跡立地の変化は、生業内容の変化に直結している可能性が高いだけに、山崎の指摘が大いに参考になるが、山崎の指摘する生業の画期が後期後半であるのに対し、この集落の立地や構造の画期についてはまさに後期と晩期の境界付近に位置づけられるために、この差をどのように見るかが今後の課題となろう。

さて、実際の低湿地遺跡の遺構を見ると、冒頭でも述べたようにほぼドングリピットと呼ばれる低湿地型貯蔵穴に限られる。九州では、縄文前期に出現し、後期初頭に至って量的なピークを迎え、その後減少しながらも弥生時代まで連続と存続する。ここで問題になるのがその内容物で、ドングリといってもイチイガシがその95%以上を占める。イチイガシはアク抜きを必要としないドングリの一つであるだけに、九州の縄文時代遺跡からはいまだ水晒し遺構は検出されていない。しかし、アク抜きを必要とするアカガシが内容物の主体となる弥生時代遺跡からは、九州でも水晒し遺構が検出されており、ドングリの種類による調理方法の違いを見ることができる。

この低湿地型貯蔵穴と集落との関係については、両者がいまだ同一遺跡で確認された例がないだけに、生業についてもこれ以上多くを語れないが、やはり今後は狩猟や漁撈を含めた総合的な生業復元を追究する必要があるだろう。

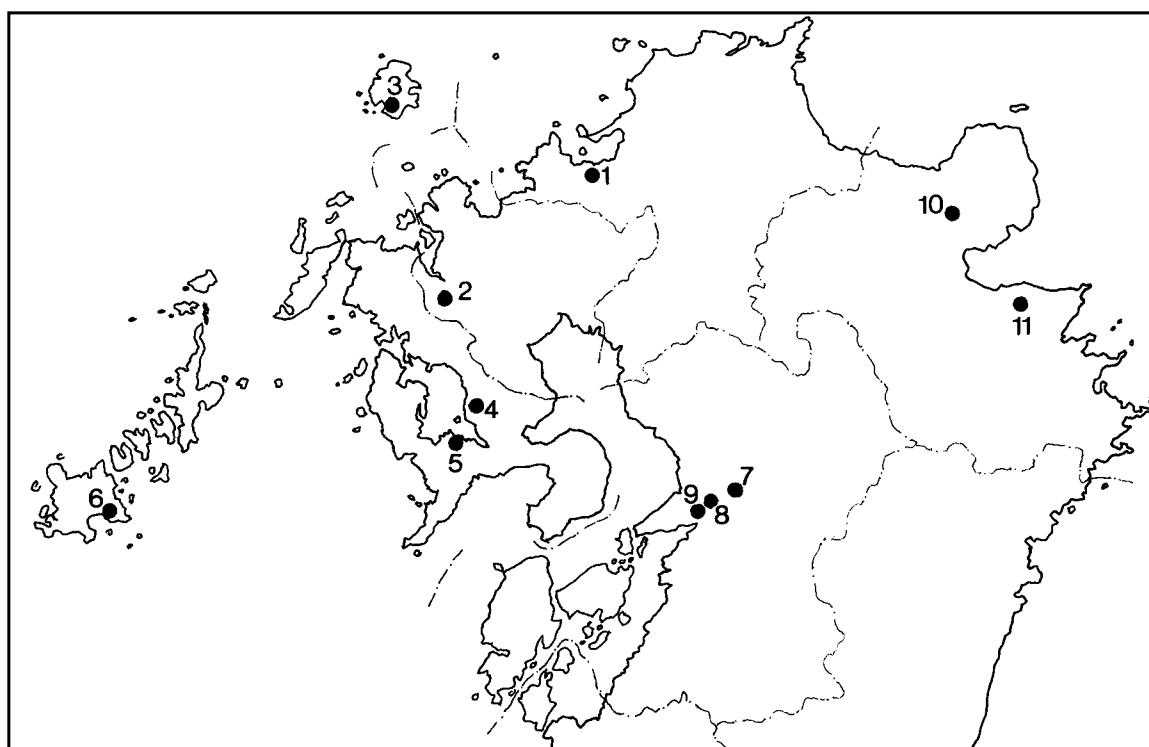
水ノ江和同1999「西日本の縄文時代貯蔵穴—低湿地型貯蔵穴を中心に」『考古学に学ぶ—遺構と遺物』同志社大学考古学シリーズⅦ

水ノ江和同2002「九州の縄文集落—縄文後晩期を中心に」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集

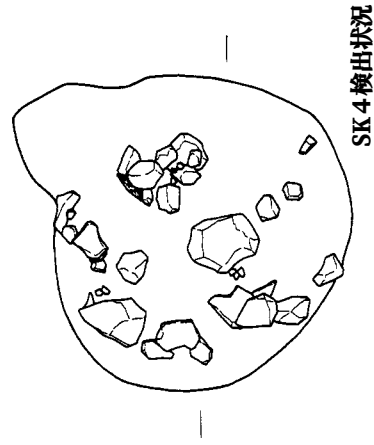
山崎純男 2003「西日本の縄文後晩期の農耕再論」『大阪市学芸員等共同研究—朝鮮半島と日本の相互交流に関する総合学術調査』

番号	遺跡名	所在地	立地・標高	時期	基数	内容物	備考
1	野多目枯渡	福岡県福岡市	河岸段丘・14m	後期初頭	60	イイガシ	柱（杭）
				晩期中葉	4	イイガシ	
2	坂の下	佐賀県西有田町	河岸段丘上・80m	後期初頭	19	イイガシ・アカガシ・ チャンチンモトギ	
3	名切	長崎県郷ノ浦町	旧海浜部・1m	中期末～ 後期初頭	22	イイガシ	現在は満潮時海水面下
				晩期中葉	8	イイガシ	
4	黒丸	長崎県大村市	後背湿地・1.5m	晩期前葉～ 中葉	62	イイガシ	刈は1基だけ単独で
5	伊木力	長崎県多良見町	旧海浜部・0m	前期前葉	22	イイガシ	
				後期初頭	3	イイガシ・チャンチンモトギ	
6	中島	長崎県福江市	旧海浜部・2m	後期中葉～ 後葉	12	イイガシ・アラカン	
7	黒橋	熊本県城南町	旧河川後背湿地？・3.5m	中期末	6	イイガシ・チャンチンモトギ	貝塚の下
8	曾畑	熊本県宇土市	旧ラグーン・2.5m	前期中葉	58	イイガシ・クヌギ	クヌギは1基だけ単独で
				後・晩期	4	イイガシ	貝塚の横
9	西岡台	熊本県宇土市	丘陵先端部・2m	前・中期	5	イイガシ・アラカン・シラカン	貝塚の下
10	龍頭	大分県山香町	河岸段丘上・99m	後期前葉	55	イイガシ	
11	横尾	大分県大分市	後背湿地・4m	後期初頭～ 前葉	6	イイガシ	

表1 北部九州における縄文時代低湿地型貯蔵穴一覧



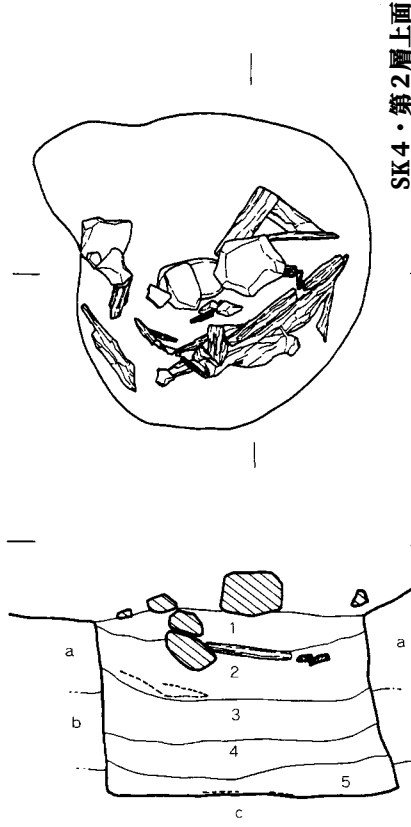
第1図 北部九州の主要低湿地型貯蔵穴分布図



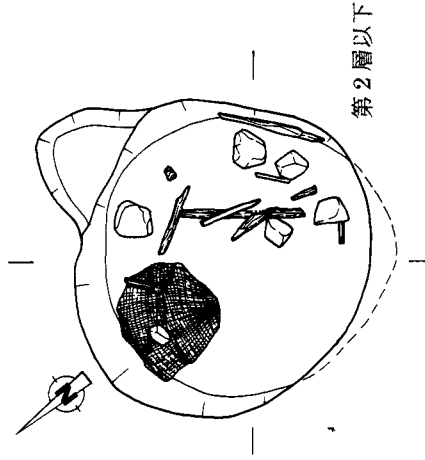
SK4 検出状況

1. 明青灰色砂質土
2. 暗褐色粘質土
3. 暗緑色砂質土
4. 褐色粘質土
5. 黄褐色粘質土

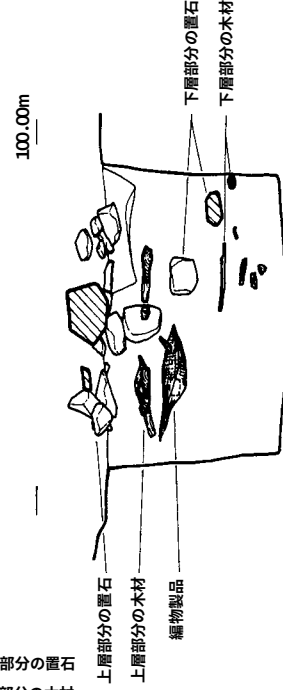
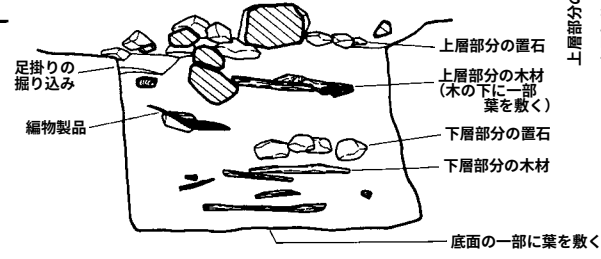
- a. 暗緑灰色砂質シルト
- b. 茶褐色粘質土
- c. 緑灰色砂質土



SK4・第2層上面



第2層以下



100.00m



第2図 大分県山香町龍頭遺跡 SK4 号貯蔵穴実測図
(1/30 大分県教委1999『龍頭遺跡』より転載)



山陰地方・縄文時代の低湿地遺跡と後・晩期の生業

柳浦 俊一（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

1. 遺跡の立地（表1）

山陰地方の地形は、大山山麓が台地状に広がる鳥取県と、平野の狭い山がちな島根県とに大きく分けられ、両県の景観は大きく違う。鳥取県では中・西部に大山の山麓が広く広がり、沖積平野は鳥取市湖山池周辺・東郷町東郷池周辺・米子市周辺で発達している。島根県では、鞍部の狭い丘陵が日本海・宍道湖中海沿岸までせまり、平地は沿岸部にへばりつく沖積平野か河川沿いの河岸段丘である。

山陰地方、とりわけ島根県の縄文時代遺跡を見渡した場合、縄文時代の低湿地遺跡は遅くとも早期末から出現しており、とくに後・晩期に低湿地遺跡が増加するという感触はない。遺跡数は、後・晩期に増加する傾向は窺えるが、立地という点では低湿地遺跡は前期以降一定の比率を持って存在し続けている。ただし、出雲平野南部・西端部の益田平野など、それまで縄文遺跡が存在しなかった地域で、後期・晩期に遺跡が進出することは注意すべきかもしれない。

2. 植物遺体

植物遺体は37種の可食植物が確認され、そのうち8種が栽培植物である。とくにアカガシ亜属のドンダリの出土が多く、花粉分析の結果とも符合する。出土した種子類で栽培種とされるのは、アブラナ類（前期～晩期）、ヒョウタン（前期・後期）、リョクトウ（中期末）、モモ（後期・晩期）、ウメ（晩期）、ヒエ（あるいはアワ）、ムギ、イネ、シソ（以上晩期）の8種である。鳥取県米子市目久美遺跡の分析では、晩期に栽培種が増加する。ここでは、晩期に水田雑草（水中植物）・田畑共通雑草（畦畔雑草）・畑雑草（人里植物）が急増し、晩期のある時期に人為的な作用が大きく働いたことが考えられる（笠原ほか1986）。

3. ネと雑穀栽培種の痕跡（表6・7）

イネや雑穀栽培種が縄文時代に存在した痕跡は、土器についたイネの圧痕と、プラントオパールである。

イネの圧痕土器は、板屋Ⅲ遺跡・石台遺跡・講武氏元遺跡で出土している。いずれも晩期後半の突帯文土器で、講武氏元遺跡は弥生土器と共伴する時期、板屋Ⅲ遺跡は突帯文初期の段階の土器である。岡山県では後期後葉土器にイネ圧痕がつく土器が出土しているが、山陰ではいまのところ晩期前半や後期にさかのぼるものはない。

プラントオパール分析は、島根県山間部の志津見ダム建設予定地内の遺跡で行われ、イネのプラントオパールは3遺跡で、その他の栽培植物は8種が5遺跡で検出されている（高橋2003）。検出されたプラントオパールのうち、長沢宏昌・山本直人・長崎元廣が集約した縄文時代出土栽培植物（長沢・山本1999 長崎1999）で挙げられていないのは、キビ・モロコシ・ハトムギ・シコクビエの4種で、逆に縄文時代の栽培植物でよく引き合いに出される、エゴマ・ソバは検出されていない。

イネはプラントオパール分析では草創期の層から検出されるというが、イネの存在が肉眼で確認できるのは晩期後半のイネ圧痕の土器である。

4. 石器

後期後半から土掘り具とされる打製石斧が卓越する遺跡が見られるようになり、晩期後半以降では

顕著である。それに対し、穂摘み具とされる石包丁状のスクレーパーは出土数が少ない。両者は農耕具としてとらえられることがあるが、石器組成からは少なくとも晩期後半以前は全面的な農耕の証拠は認めにくいように思われる。

5. まとめ

縄文時代後・晩期に沖積地への進出があったという概説的説明は、山陰地方、とくに島根県では適用しがたい。また、山陰地方の栽培植物は縄文時代前期まで遡ることができるが、これらの栽培植物が生活を支える主体であったとするにはあまりに不安定な検出状況である。

参考・引用文献

笠原安夫・武田満子・藤沢浅1986「米子市目久美遺跡の種実の分析」『目久美遺跡』米子市教育委員会

山陰考古学研究集会2000『山陰の縄文時代遺跡』

高橋護2003「板屋Ⅲ遺跡におけるプラントオパール分析による栽培植物の検出結果とその考察」『板屋Ⅲ遺跡（2）』島根県教育委員会

長沢宏昌・山本直人1999「生業研究 総論」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会

長崎元廣1999「生業研究 縄文時代農耕論」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会

山田康弘・河合章行・稲田陽介2003「山陰地方における縄文時代石器の実相」『中四国地域における縄文時代石器の実相』第14回中四国縄文研究会

表1 山陰地方・縄文時代遺跡の立地

島根県

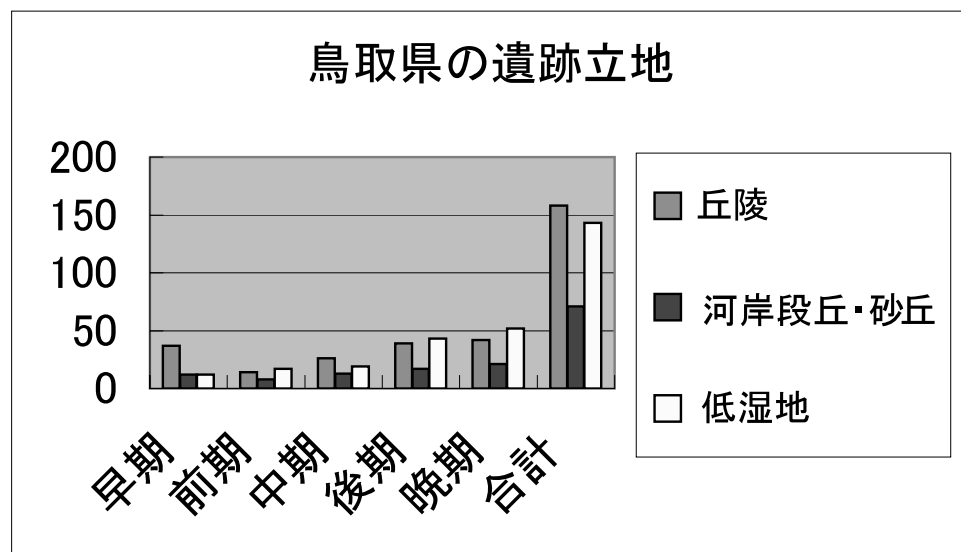
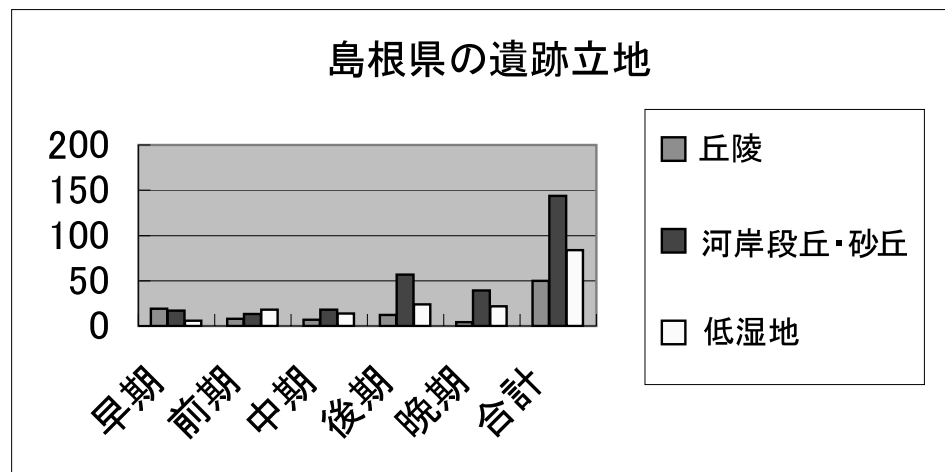
立地／時期	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	合 計
丘陵	19	8	7	12	4	50
河岸段丘・砂丘	17	13	18	57	39	144
低湿地	6	18	14	24	22	84

鳥取県

立地／時期	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	合 計
丘陵	37	14	26	39	42	158
河岸段丘・砂丘	12	8	13	17	21	71
低湿地	12	17	19	43	52	143

1遺跡で複数時期存在する場合は、各時期毎に1遺跡と数えた（例；同一遺跡でも「早期～前期」にわたるなら、「早期1・前期1」とカウント）。

山陰考古学研究集会2000『山陰の縄文時代遺跡』より作成





福井県における縄文時代の低地性集落の概要 —越前地方を中心として—

山本 孝一（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

はじめに

福井県では、近年、圃場整備事業などに伴い、沖積平野における発掘調査例が増加し、縄文時代の資料が蓄積しつつある。これら沖積平野内の自然堤防に立地する低地遺跡については、木下（1980）の類型化に従い、以下「低地性集落」と呼称する。なお、今回扱う遺跡の大半は、現在整理途中であることから、遺跡の詳細については、報告書に委ねたい。

低地性集落の時期別動態

前期後半～後期初頭 集落形態は小規模点在の傾向を示す。各河川上流の扇状地や丘陵地上の該期の大規模集落と比較すれば、季節移住ないし漁労キャンプサイトのなあり方を示す可能性もある。

後期前葉～中葉 遺跡数が増加し、遺跡の大規模化が認められる。西鯉地区遺跡群においては、環状集落内に掘立柱建物（クリ半裁材の径約10mの大型円形建物を含む）・配石墓・埋甕などが検出されると共に、製品・未製品・加工具の出土からヒスイ加工も窺え、所謂拠点集落と考えられる。

後期後葉～晩期前半 遺構・遺物共に、ほとんど検出されておらず、様相は不明である。

晩期後半～末 遺跡数は増えるものの、自然河川の覆土からの遺物出土に限られ、明確な遺構は検出されていない。集落形態は、遺物出土量からも短期間存続の小規模点在傾向が窺える。同様な立地で、後続すると考えられる弥生時代中期（主に後半）の集落形態と比較して明確な差が認められる。

以上、時期別動態の特徴として、後期前葉からの遺跡の増加・大規模化が挙げられる。県内において、縄文時代の調査例は依然少なく検討を要すが、最も確認例の多い、丘陵や段丘上に立地する中期後葉を主体とする遺跡の大半が、後期前葉から衰退・断絶する傾向と対照的であると言えよう。

低地性集落における生業的視点

遺跡数や資料の希少さと併せて、自然科学分析などが積極的に行われていない点もあり、他立地の遺跡との石器組成の比較や、動植物遺存体における低地性集落の生業的特徴について、明確に把握し得なかった。しかし、立地的特徴とも考えられる集約的労働による資源の回収・加工、あるいは初期農耕の痕跡は現状では想定できない。

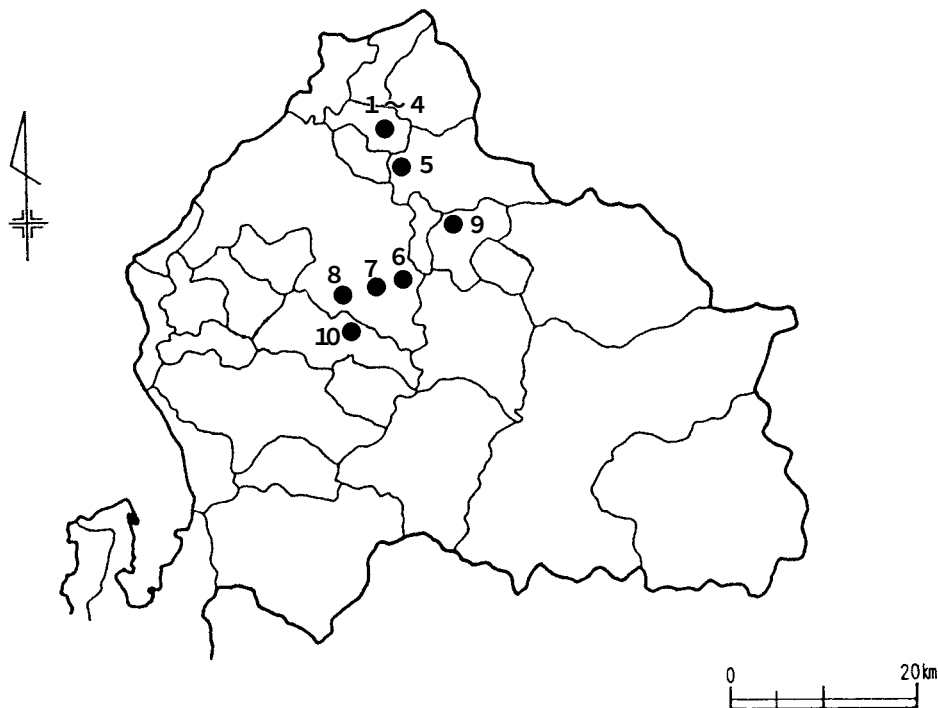
問題点と展望

何故、後期前葉から沖積平野に集落が進出し、あるいは集落の大規模化となったのか、今回の生業的視点からでは、見通しが付けられなかった。しかし、海退などの環境変化のみにとらわれず、集落における内在的要因や、交易・流通といった問題も含め、調査例の増加を待ちつつ、これからも検討して行きたい。また、晩期後半の遺跡において認められる、短期間の小規模点在化の傾向は、環境や生業形態を含め、集落造営の不安定な状態を示すものと考えられる。稲作導入直前・直後にあたるこの時期、生業の変化が集落の動態にどのような影響を与えたのかも併せて考えて行きたい。

参考文献

木下哲夫1980「福井平野及びその周辺における縄文時代後期文化について」『古代探叢』早稲田大学

山本孝一2001「福井県における生業関係遺構の概要と問題点」『関西縄文時代の生業関係遺構』資料集第2分冊 関西縄文研究会



福井県（越前）における低地性集落遺跡位置図

低地性集落遺跡地名表

	遺跡名	所在	主体時期	主な遺構	調査年	整理中
1	大味地区遺跡群	坂井郡坂井町大味	晩期後半	護岸河川	1996	
2	西鯉地区遺跡群	坂井郡坂井町西	後期後葉～中葉	掘立柱建物・配石墓・埋甕・土坑	1998～2000	○
3	兵庫地区遺跡	坂井郡坂井町上兵庫	中期前葉・晩期後半	捨て場・自然河川	1996～2000	○
4	下蔵垣内遺跡	坂井郡坂井町下蔵垣内	中期・晩期	(遺物散布地)		
5	沖布目遺跡	坂井郡丸岡町沖布目	後期前葉～中葉	土坑	1995	
6	高柳遺跡	福井市高柳町	晩期後半	自然河川	1999～	○
7	上筋生田遺跡	福井市上河北町	後期前葉	竪穴住居？	1974・75	
8	曾万布遺跡	福井市曾万布町	後期中葉	埋甕	1972・73	
9	鳴鹿手島遺跡	吉田郡永平寺町鳴鹿山鹿	後期前葉	竪穴住居・土坑・捨て場	1986・87	
10	四方谷岩伏遺跡	鯖江市四方谷町	後期末～晩期前葉	貯蔵穴・木枠状施設・捨て場	1995	○

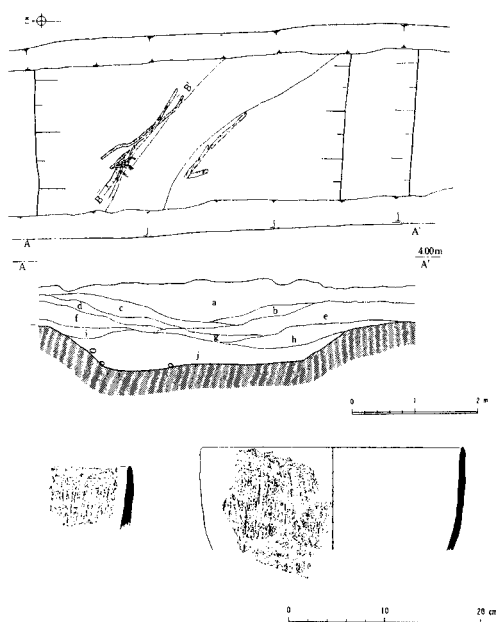
※番号は遺跡位置図に対応する。

※9・10は比較参考遺跡を表す。

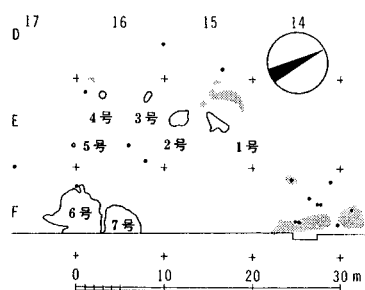
低地性集落における石器組成表

時期	遺跡	打斧	磨斧	石錐		浮子・軽石	石鏃	石槍	石錐	石匙	磨石類	石皿	砥石	石棒・石刀
				切目	打欠									
中期前葉	兵庫地区遺跡群①地区				1									
	兵庫地区遺跡群②地区						1				1	1		
後期前葉～中葉	西鯉地区遺跡群	155	56	6	12	9	65	1	1	2	202	75	15	16
	上筋生田遺跡	23	2	1	1						1			
	沖布目遺跡	27	1	1	11		1				9	1		
	○鳴鹿手島遺跡	398	2	47	179		4	1	1		365	116		
後期末～晩期前葉	○四方谷岩伏遺跡	16	8		1	3	7		4		62	3	4	13
晩期後半	大味地区遺跡群	10	2				3		2		4		2	

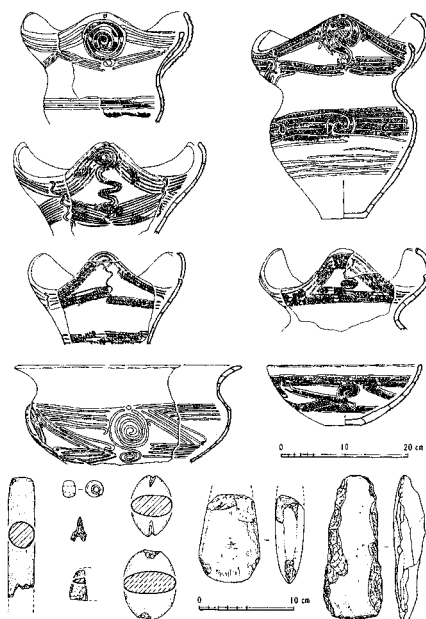
※○は比較参考遺跡を表す。



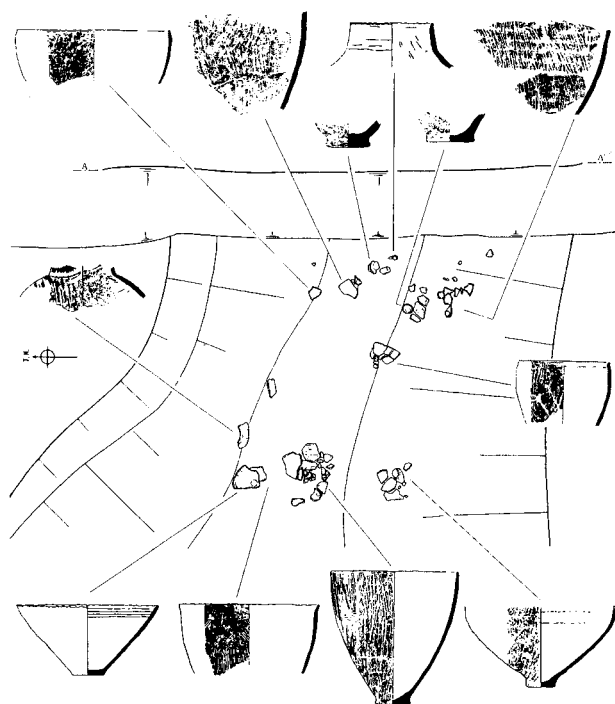
大味地区遺跡群 自然河川及び出土遺物



曾万布遺跡 縄文時代遺構・主要遺物分布図

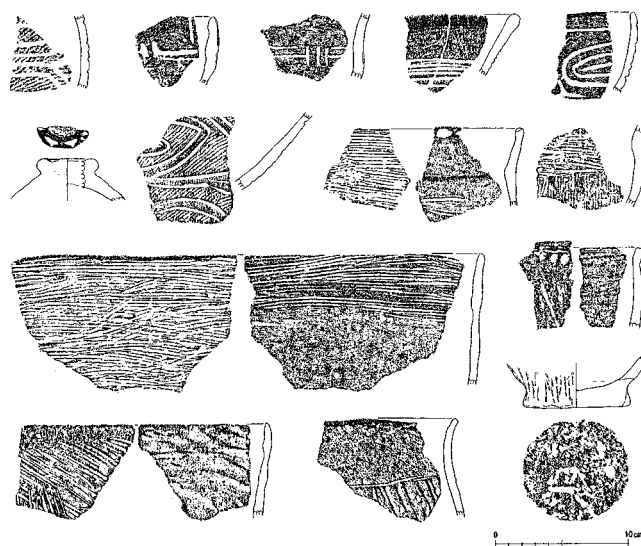


曾万布遺跡 出土縄文時代遺物



大味地区遺跡群 自然河川及び出土遺物

a 青灰色シルト（炭粒混じる）
b 青灰色シルト
c 青灰色砂礫土



兵庫地区遺跡群 自然河川出土遺物



石川県における縄文後晩期集落の特質

伊藤 雅文（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1970年に行われた金沢市近岡遺跡発掘調査で縄文晩期の包含層からイネ科の花粉が検出され、四柳嘉章・藤則雄氏は縄文農耕論を提起した。一方、吉岡康暢氏は下野遺跡の位置づけをめぐる論理の中で、縄文農耕を否定する見解で反論し、30有余年を経た。

縄文前期と後晩期の集落は、標高10m以下に立地するものが多い。気候の寒冷化に伴う海退現象と関連付けされている。集落の低地化は金沢平野で顕著であり、ケーススタディとして検討する。

北加賀地域の特性—生業とのかかわり— 手取川以北の北加賀地域は、手取川扇状地と小立野台地の河岸段丘、砂丘の後背湿地およびそれに連続する沖積低地に地形区分できる。早期から中期にかけては丘陵から段丘に集落が位置するものがほとんどで、中期の北塚遺跡と古府遺跡が標高10mという低地に位置することは注目できる。しかし、これらの集落は後期前半には終息し、後期後半から晩期にいたり、砂丘後背湿地およびそれに連続する沖積低地あるいは扇状地に集落が出現する。

砂丘の後背湿地に位置する近岡遺跡は標高0m前後に遺構面がある。また標高5m付近に遺構面がある藤江C遺跡は、明るく開けた環境だが周囲に湿地の存在という古環境が復元され、食糧生産にかかわる花粉等の検出はない。特徴的な遺物として打製石斧の出土量もそれほど多くない一方で磨石類や祭祀具が一定量出土しているので、小規模ながら集落として完結した姿を見ることができる。

一方、扇状地端の地下水自噴地帯に位置する米泉遺跡の集落は周囲に栗林と湿地という環境である。より大規模な集落のチカモリ遺跡や御経塚遺跡も同様に、生産にかかわる植物の花粉の検出はない。御経塚遺跡で端的だが、土偶や石刀類玉類などの呪具、石鏃や打製石斧・磨製石斧などの生産用具、磨石や石皿の食料加工用具の出土比率が非常に高く、一般的な集落とはいえない。

さらに、扇状部～扇頂部にある乾遺跡や栗田遺跡白山遺跡、山間の段丘に位置する下野遺跡や東島遺跡では打製石斧の割合が高く、根菜類採取の比重が高いことを示すものの、土偶などの呪具・祭祀具や石皿などの食料加工用具の比率が少ないのが特徴である。

考察 集落が低地に立地するようになることがそれまでの生業との違いを推測させるが、具体的な状況を把握できた例はない。それは花粉分析などの自然科学的な分析が遅れていることに起因するのであるが、上記のような考古学的な事実関係からいろいろな事柄が推測できる。

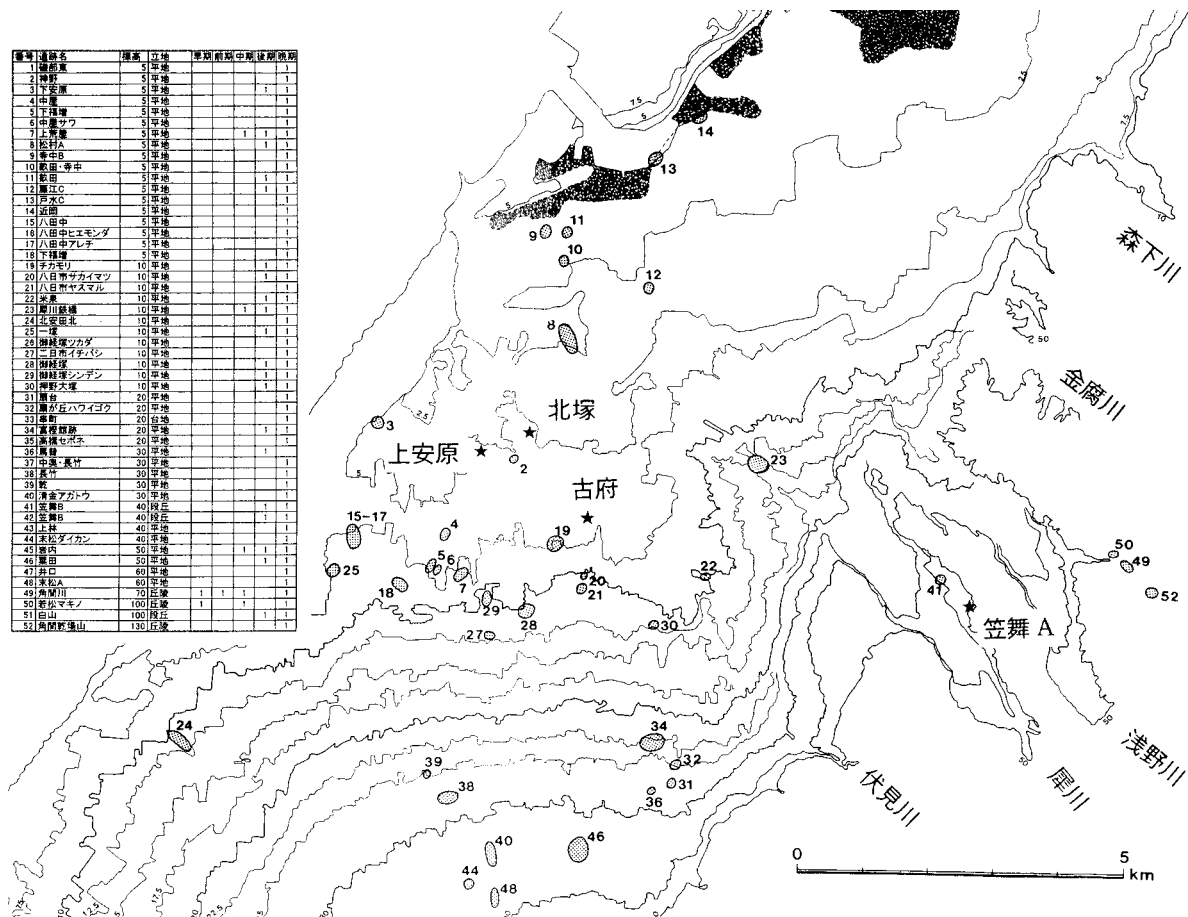
- ①砂丘後背湿地にある集落は独立したムラと考えられ、地勢ゆえに小規模なムラの姿がうかがえる。
- ②扇状地にある集落は、扇端部には大規模なムラを形成し、環状木柱列や土偶などの祭祀面で突出した内容となっている。砂丘後背地のムラとの繋がりは扇状地とのムラと比べて希薄である。
- ③扇状部・扇頂部・山間部の集落は生産用具が目立ち、食料加工用具や祭祀具の比率が低く、独立した集落として理解しがたい。扇端部の大規模集落との関わりの中で活動する可能性を考える。
- ④いずれも遺跡もイネ等の栽培には否定的で、米泉遺跡の貯蔵穴など生産活動の中で水さらし場の重要性があり、この点で低地との結びつきを想定できよう。

参考文献

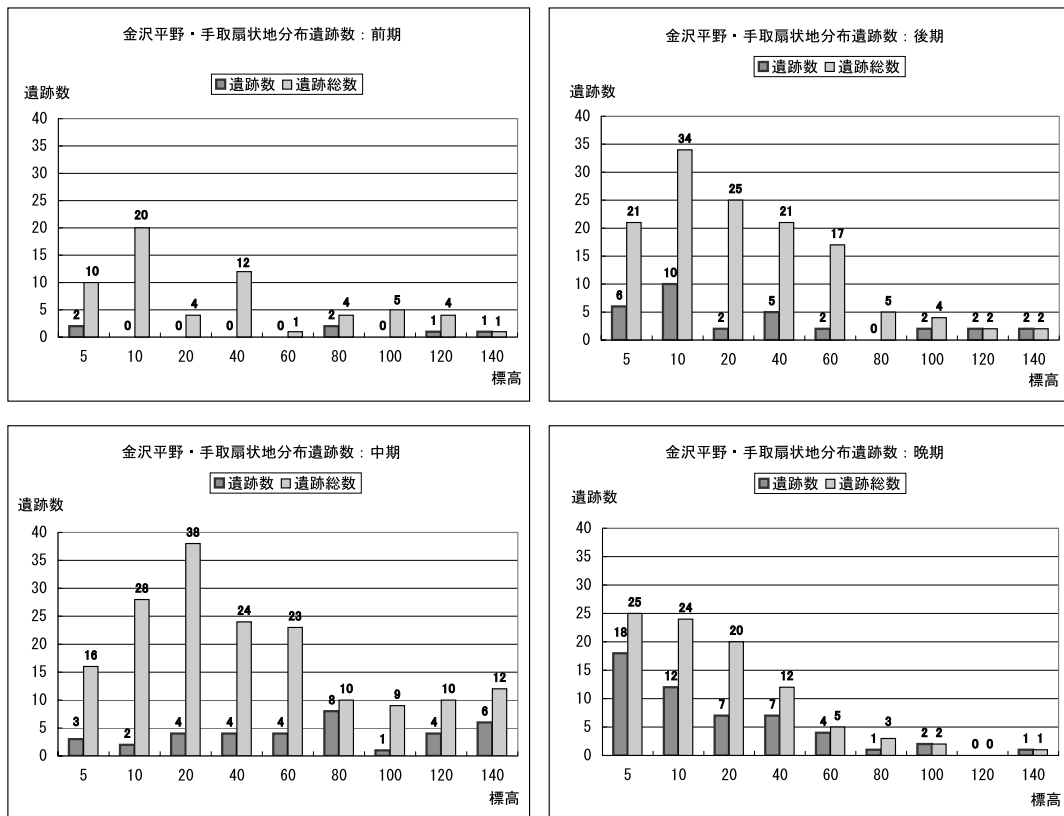
藤則雄・四柳嘉章1970「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」『考古学研究』17-3

吉岡康暢1971「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』56-4

山本直人1990「縄文時代の地域社会論に関する一試論—手取川水系を中心として—」『古代文化』42-12



第1図 北加賀の地形と縄文後・晩期集落（★は中期集落）

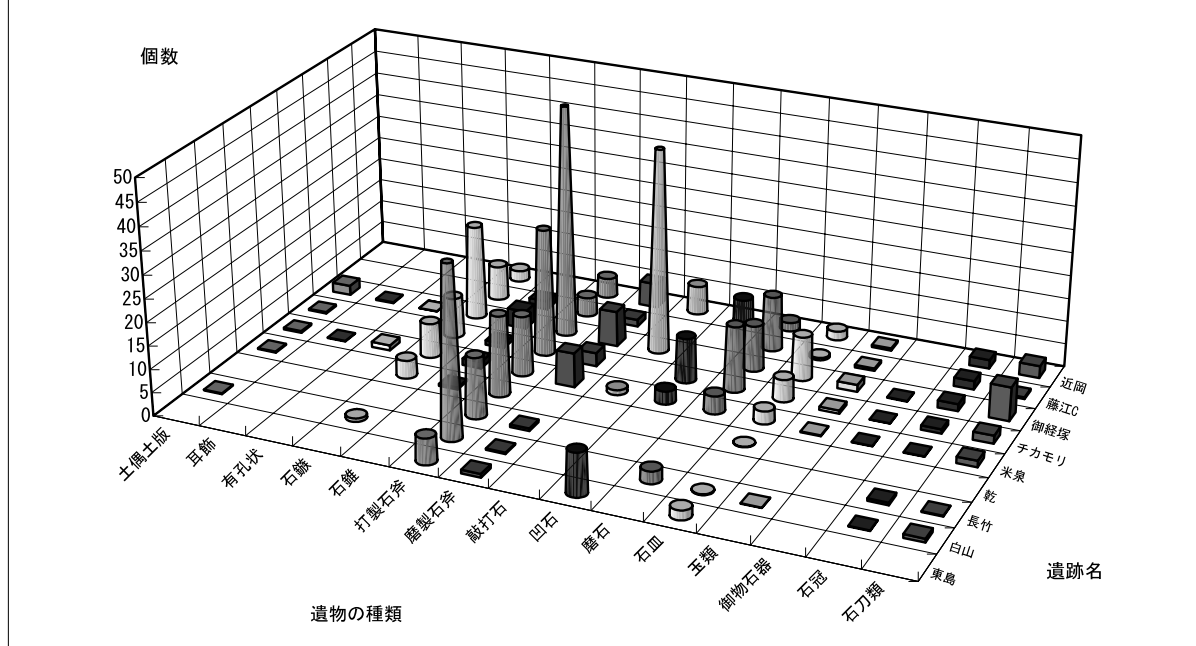


第2図 北加賀の縄文集落の時期と立地（標高）別変遷

遺 跡 名	土 製 品								石 製 品															骨 製 品				
	土偶	土版	耳飾	有孔状	土錘	環状	獣形	ンスタ	石鏃	石錘	玉鏃石	石斧製	石磨製	敲打石	凹石	磨石	石皿	石錘	浮子	玉類	石御物	石冠	石刀類	有溝	岩偶	ビヘン	垂飾	弓頭
近 岡									10			18	22	26	21	8	8	5	5	2		8	11					
佐波モリノマエ									2			1	18	4	1			1										
下 安 原									5			25	2	9	11	5	1						1					
藤 江 C									56	14		31	11			89	4	12		4		14	3	10		1	1	2
御 経 塚	80	1	8	2		2	1	1	788	149	2	2930	290	1700		381	365	38		59	5	60	281					
チカモリ	11								301	35	37	944	99		332	487	166	21		24	3	32	61					
米 泉	8		3	25	7				164	32		284	160	23	62	85	61	22	20	4	2	2	30					
乾	5								89	10		400					3					1	1		1			
長 竹												73	3									3	1					
白 山	2				1				7			369	3			26	2	7		1		1	8					
東 島												14	2		23		5	4										

第1表 北加賀の縄文晩期集落遺物組成

遺 跡 名	土 製 品			石 製 品												調査面積	立地標高	地形区分
	土偶土版	耳飾	有孔状	石鏃	石錐	打製石斧	磨製石斧	敲打石	凹石	磨石	石皿	玉類	御物石器	石冠	石刀類			
近 岡				2.4		4.3	5.3	6.2	5.0	1.9	1.9	0.5		1.9	2.6	418	0	平 地
藤 江 C				7.5	1.9	4.1	1.5			11.9	0.5	0.5		1.9	0.4	750	5	平 地
御 経 塚	2.1	0.2	0.1	20.5	3.9	76.1	7.5	44.2		9.9	9.5	1.5	0.1	1.6	7.3	3850	10	扇状端
チカモリ	0.3			8.7	1.0	27.4	2.9		9.6	14.1	4.8	0.7	0.1	0.9	1.8	3450	10	扇状端
米 泉	0.4	0.1	1.1	7.5	1.5	12.9	7.3	1.0	2.8	3.9	2.8	0.2	0.1	0.1	1.4	2200	10	微高地
乾	0.2			3.9	0.4	17.4					0.1					2300	30	扇央部
長 竹						13.0	0.5							0.5	0.2	560	30	扇央部
白 山	0.2			0.7		36.9	0.3			2.6	0.2	0.1		0.1	0.8	1000	100	扇 頂
東 島						5.6	0.8		9.2		2.0					250	470	山 地



第3図 北加賀の縄文晩期集落遺物組成（100㎡あたりの遺物出土個数）



第4図 金沢市米泉遺跡の状況
（アミカケは後期の遺構）

（小矢部市教育委員会2002 「フォーラム
『環状木柱列と縄文の聖地』」）



中屋サワ遺跡における縄文時代の川跡について

谷口 宗治（金沢市埋蔵文化財センター）

1. 概要

手取川扇状地の末端部にあたる。中屋川のほか、中小の河川が流れている。現在の地区名は「安原」であるが、元は「八州原」と呼ばれ、細い微高地が連続していた。現在は海岸線から約3km離れている。遺跡の近隣には東大寺領横江庄遺跡（昭和47年国指定史跡）、上荒屋遺跡（平成4年県指定史跡）、新保チカモリ遺跡（昭和61年国指定史跡）、御経塚遺跡（昭和52年国指定史跡）などがある。

調査着手以前は水田地帯であった。工業団地造成を起因とした発掘調査である。当遺跡は平成2年に市教育委員会により発掘調査を実施している。

2. 川跡と木組み遺構

調査箇所でもっとも東の区画から縄文時代後期から晩期にかけて機能した川跡を検出している。晩期中頃（2,300年前）の下野式、宮竹式を川跡の最上層で検出した。最下層では御経塚式を検出しているので、遺跡の最上限と判断した。川幅は4～6m、深さは1.6～1.8mを計測し、横断面は逆台形を呈する。川の堆積土砂は暗黒褐色の粘質土と青灰色粗砂が互層を呈し、所々に大量の堅果類の被子が袋状に堆積する箇所によって構成される。遺物の殆どは粗砂と被子類の堆積層から出土している。堅果類は主にトチ、クリが多く、クルミ、カシ、ナラ類は少ないという傾向がある。被子のほとんどは破断した状態で、食用に供した残滓と推測できる。川岸からは径1m内外の土抗が10基以上見つかри、中にカシ・ナラ類が堆積するため「ドングリピット」と判断した。

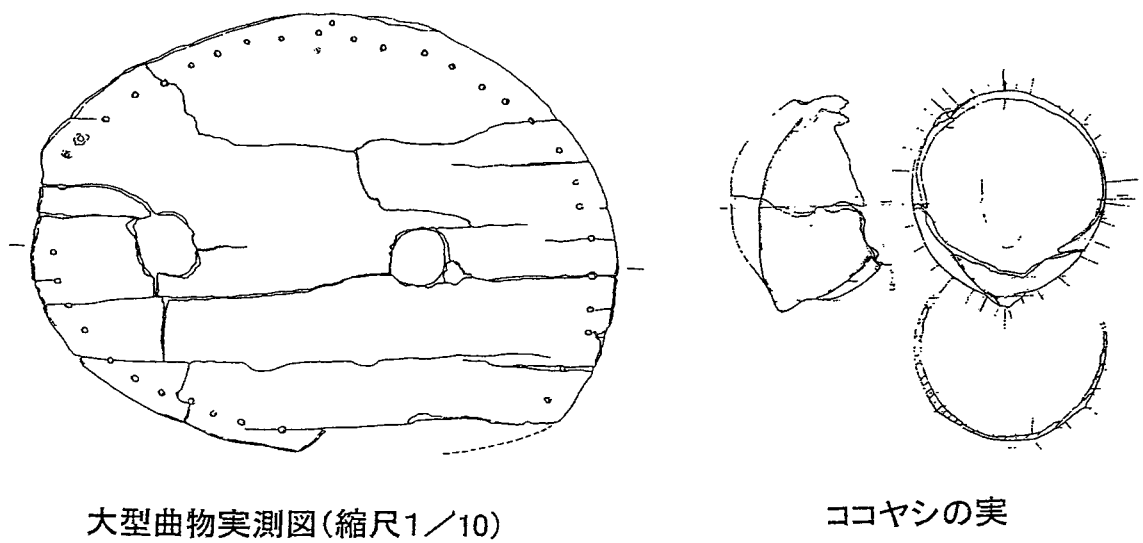
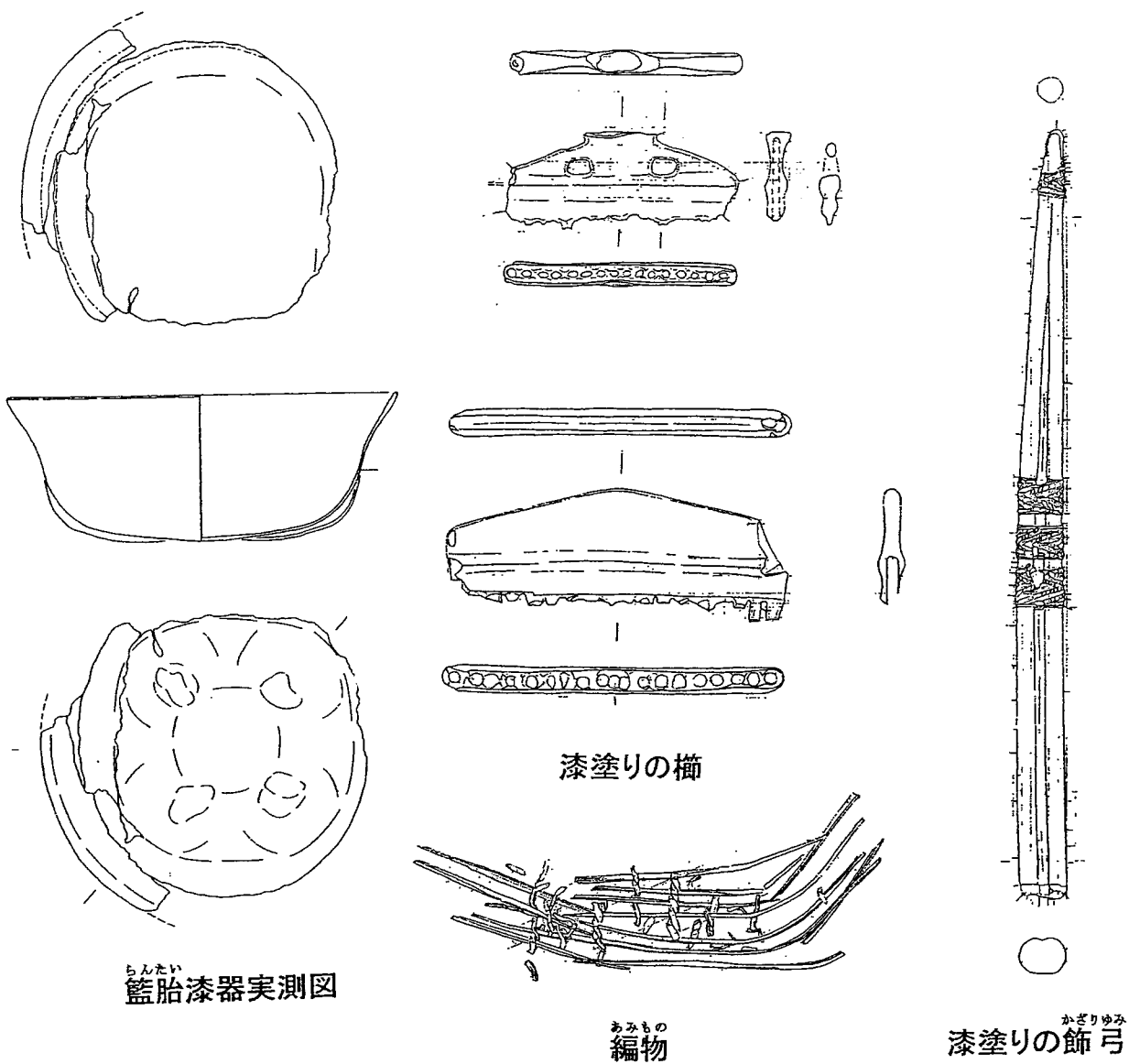
川跡の中央部で「木組み遺構」を川の中層より下位で検出している。「木組み遺構」は、川の中央に大型の木材を流路の方向に沿って配し、中州を人工的に構築したものと、右岸から小さな木材を打ち込んだ杭列によって連結し、右岸には中州と規模のよく似た木材で渡場を設けているものを総称した。大型木材は全て広葉樹の加工木で、丁寧に面取りを行った材を使い、堅牢に作られている。「木組み遺構」は上下2面あり、造営は2回行われたと推測できる。上面は中屋式期の土器とともに露出し、下面の木組みの間から御経塚式期の深鉢を検出しているので、それぞれの時期を比定した。

3. まとめ

川跡から縄文土器、石器、木製品などを検出している。総数はコンテナで500ケースを超える。精製土器は御経塚式と中屋式で8割を占める。粗製土器には「煮焦げ」と判断できる付着物がある。土器の組成は深鉢、浅鉢、注口土器、壺形土器の順に多く、蓋、土偶、耳栓なども確認している。

木製品は弓、編物、容器、曲物、櫛、腕輪、籃胎漆器などが出土した。籃胎漆器は保存処理と復元の結果、国内で最も遺存度がよいことがわかった。曲物は樹皮を利用した製品で、処理の結果、2枚の樹皮から構成され、間に編物を挟んでいたこともわかった。

当遺跡は縄文時代の住居跡を検出せず、川跡から遺物が出土するのみで、遺跡については漠然とした所見を述べるしかない。しかし、土器・石器の出土量が多いこととあわせ、木製品の残りの良さや出土量の多さなどは、当該時期の他遺跡を凌駕している。木製品の利用形態について貴重な情報を提供した遺跡であることは間違いないであろう。



第2図 川1出土遺物実測図(縮尺1/4)



真脇遺跡—晩期の環状木柱列と調査の取り組み—

高田 秀樹（能都町教育委員会）

1. 真脇遺跡の位置と環境

石川県鳳至郡能都町字真脇に所在し、日本列島のほぼ中央にあって大きく日本海に突き出ている能登半島の富山湾に面した東側の海岸近くに位置している。南側が海に面し、西・北・東の三方を標高100m前後の丘陵に囲まれ、標高4～12mの沖積低地に遺跡が位置している。海底の地形は、半島基部側の平坦な海底とは異なり、真脇付近で急激に深くなる。こういった条件がイルカの接岸を促す要因とされ、真脇周辺では昭和初期まで、イルカ追込み漁が盛んに行われていた。

2. 真脇遺跡の概要

真脇遺跡は、昭和57・58年（第1・2次調査）の発掘調査により、縄文時代前期初頭（約6,000年前）から晩期終末（約2,300年前）までの約4,000年間もの間、縄文人が定住していた集落遺跡と判明した。検出した遺構として晩期の環状木柱列、中期の貼り床住居址、前期末のイルカ層がある。また、出土した遺物には後期の土製仮面、中期の鳥さん土器（新保式土器）、前期のお魚土器（真脇式土器）などがある。このように出土した遺物や検出した遺構には貴重な発見が多く、平成元年1月9日に37,599.94㎡が国指定史跡となり、平成3年6月21日には大量の出土品のうち219点が国指定重要文化財となる。

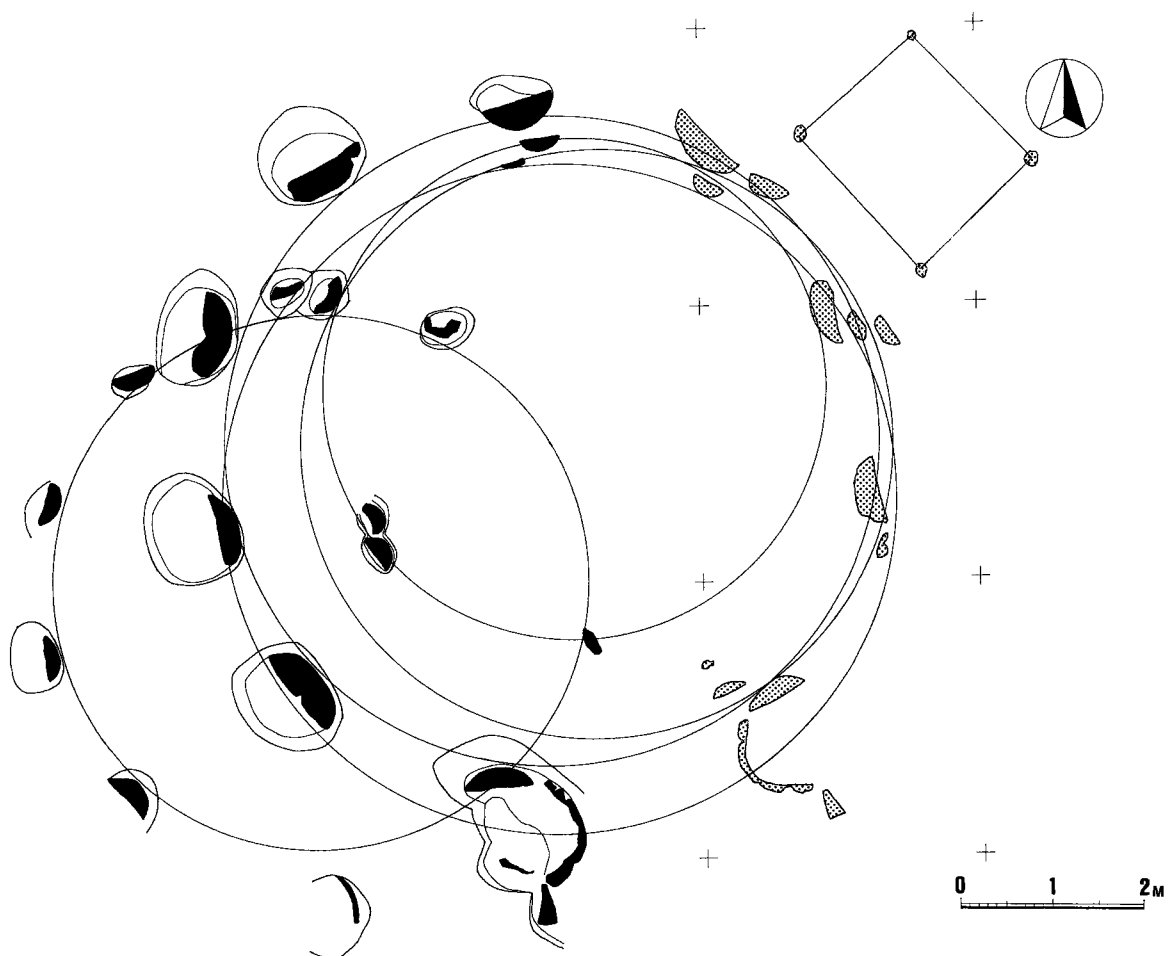
平成10年から史跡整備のための発掘調査を再開し、縄文時代の環境復元の調査を進めている。平成13年の調査において、4基の土壙墓が検出された。その内の3基は板敷き土壙墓と呼ばれ、国内で初めて確認された埋葬方法として注目を集めている。また、この墓の近くから、祭祀に使われたと考えられている、把手付土製ランプなども出土していることから、中期の集落の中心部と判明した。平成14年からは、晩期の環状木柱列の調査を行っている。同じ場所に数回の建て替えを行っていることが判明した。また、発掘調査と並行して自然科学的分析も実施し、集落と海の関係も明らかになりつつある。

3. 晩期の環状木柱列について

昭和57・58年（第1・2次調査）において検出された環状木柱列の内、柱根の直径が約90cm前後の環状木柱列（以後「A環」とする。）の残りの柱根4本と門扉状遺構の調査を平成14・15年（第7・8次調査）にかけて実施した。

検出した木柱1・2・3は残存する大きさと出土した位置から、第2次調査で出土したA環の一部と考えられる。柱根の間隔は約2.2mで直径約7.5mの真円プラン上に10本の柱が立つことになり、当初から予想された規模であることが判明した。

木柱1は検出した木柱根では最大で、直径約96cm、厚さ約33cmである。木柱2は直径約73cm、厚さ約26cmである。木柱3は直径約76cm、厚さ約27cmである。この2例には、弧面に曳き網をかけたとみられる溝が掘られており、掘り方内には人頭大から拳大の石が入れられている。さらに礎板も使われている。門扉状遺構は半割柱、門扉、三角柱と呼ぶ木柱根を検出した。半割柱には弧面に溝が掘られている。門扉は丸太を薄く割ったものを使っている。三角柱には礎板が使われていることが判明した。



第1図 環状木柱列平面プラン (第2・8次調査より)



写真1 環状柱列検出状況 (西方向より撮影)



写真2 木柱1検出状況



写真3 木柱3検出状況



写真4 木柱2、6、7検出状況



写真5 木柱2検出状況



写真6 門扉状遺構検出状況
(南方向より)

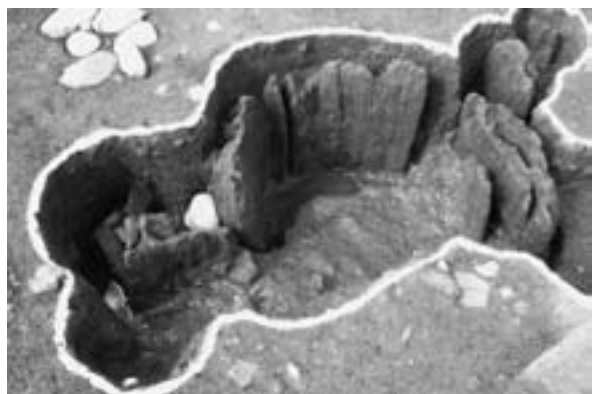


写真7 門扉状遺構検出状況
(東方向より)



富山県における縄文後晩期の低湿地集落

大野 淳也（小矢部市教育委員会）

富山県内の縄文時代後晩期遺跡のうち低湿地に位置し、なおかつ住居やその他の遺構が伴う「集落」遺跡は数例が挙げられるにすぎず、またその全容も明らかではない。そのためここでは、沖積地およびそれに接する丘陵裾部に位置する遺跡をも含めて紹介し、低湿地集落を考える一助としたい。

1 富山県内の縄文後晩期低湿地集落

沖積地および丘陵裾部に位置する縄文後晩期の遺跡のうち、ある程度の遺物、遺構をもつものを取上げ、第1図に示した。丘陵裾部では標高15～30mに位置するものが多く、沖積地では標高20m以下に位置するものが多い。

2 遺跡の立地と消長

遺跡の立地を上記のように丘陵裾部と沖積地に分けた場合、それぞれに以下のような傾向が見られる。

- ①丘陵裾部では、後期から続く遺跡が多く、晩期中葉以降に衰退する傾向が見られる。また、遺物量・種類が多く祭祀具など特殊な遺物をもつ遺跡も多く見られる。
- ②沖積地では、後期から続く遺跡も見られるが、晩期中葉以降に現れる遺跡が大半である。またそのなかでも、下老子笹川・豊田・豊田大塚など一定量の遺物や遺構をもつ遺跡と、養島・江尻・高田新・駒方・若宮Bなどの少量の土器と打製石斧のみの遺物しか持たない遺跡に分かれる。
（後者は根茎類やその他の植物質食料の採集の場合）

3 遺跡から出土した植物遺体

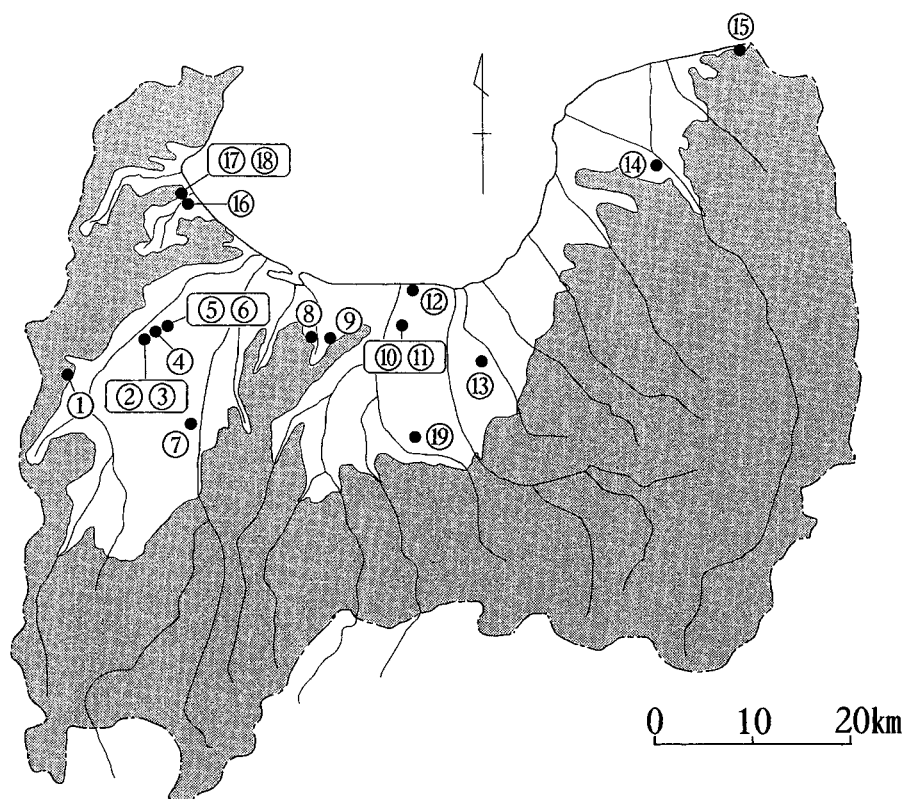
遺跡から出土している植物遺体で、ある程度時期がつかめ、人が利用したことが明らかなものとしては、貯蔵穴出土のトチ（桜町遺跡）・クルミ（桜町遺跡・下老子笹川遺跡・豊田遺跡）・ドングリ（桜町遺跡）が挙げられる。その他下老子笹川遺跡では、トチ・オニグルミ・ナラガシワ？・ミズキ・エゴノキなどの種実遺体が自然流路内や包含層から出土しており、遺跡周辺の植生が推定されている。

4 農耕の可能性

農耕の存在を直接示す資料は現在のところ得られていないが、間接的にその可能性を示すものとしてキビ属のプラントオパール（桜町遺跡）、穂つみ状石器（豊田遺跡）などが挙げられる。また十二町瀉排水機場遺跡では、前期と晩期の遺物が同時に出土しており時期の判定に問題があるが、多量のソバ属の花粉と炭化物片が検出されており、焼畑農耕の存在が推定されている。

5 おわりに

以上、比較的低地にある遺跡を中心にその概要・特徴を簡単に見てきたが、後晩期に限れば、晩期中葉に遺跡のありかたが変化することが指摘できる。しかしながら、その変化を促した直接的な要因を示す遺構や遺物はまだ少なく、今後さらなる資料の増加と多方面からの分析が必要と考える。また今回はふれることが出来なかったが、この他に丘陵上に立地する大きな遺跡もあり、これらとの有機的な関係も考える必要があろう。

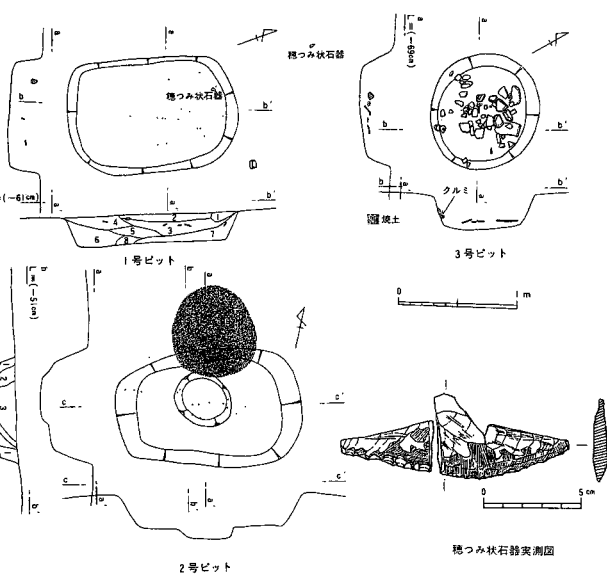
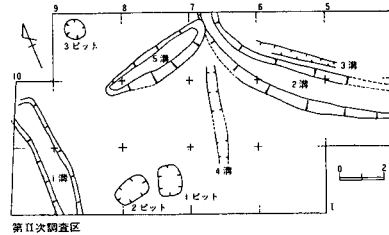
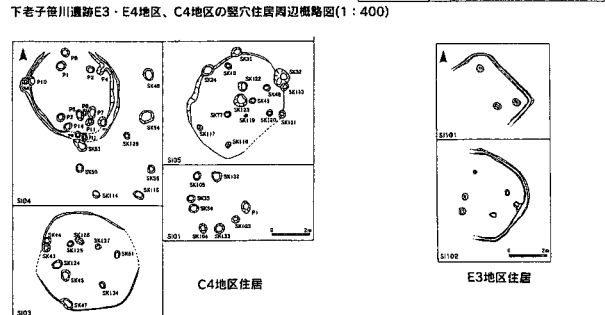
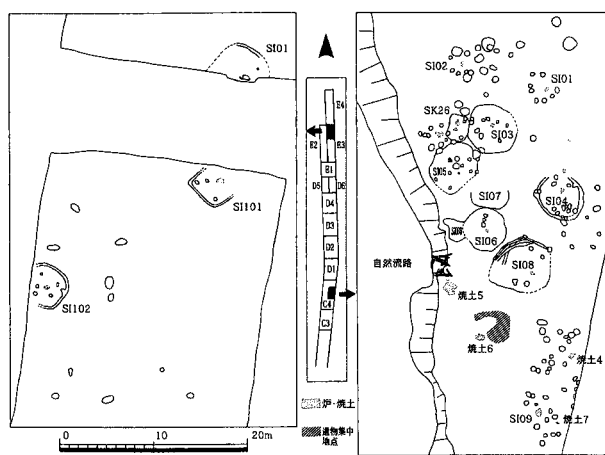
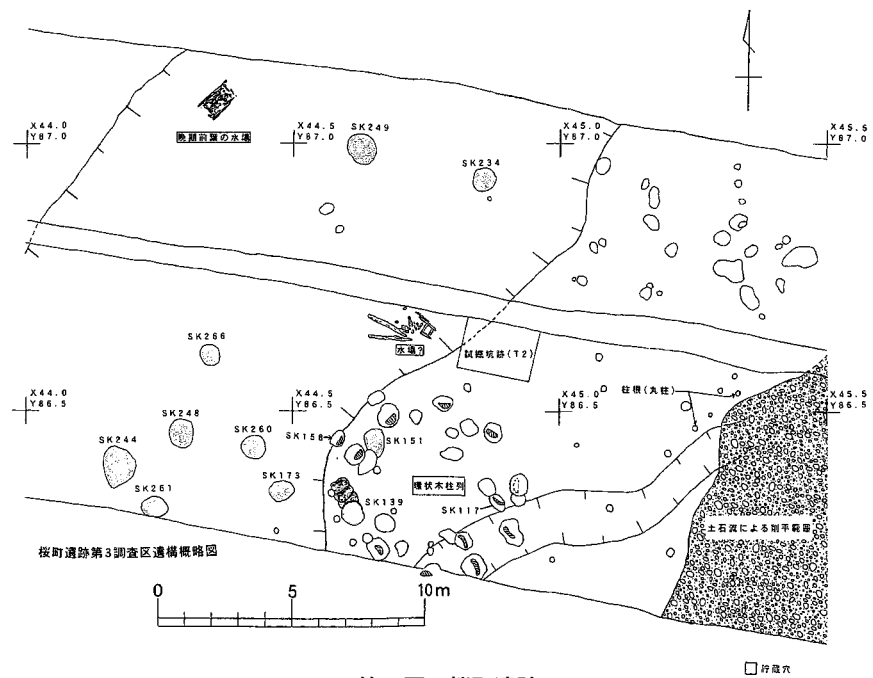


第1図 富山県内の縄文後晩期低湿地遺跡

第1表 富山県内低湿地遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時期	立地	標高(m)	主な遺構	主な遺物
①	桜町遺跡	小矢部市桜町	後期～晩期	丘陵端部開析谷	28.5～40	環状木柱列・貯蔵穴群・水場遺構・自然流路等	土器・土偶・打製石斧・磨製石斧・石鏃・石鏃・敲石・磨石・石皿・御物石器・石棒・石刀・石冠・岩版・岩偶・玉類等
②	猿島遺跡	福岡町猿島	晩期後半	扇状地扇端部	18～20	土坑・自然流路	土器・打製石斧・敲石
③	江尻遺跡	福岡町江尻	晩期後半	扇状地扇端部	18～20	自然流路	土器・打製石斧
④	下老子笹川遺跡	高岡市笹川 (福岡町下老子)	晩期後半	扇状地扇端部	17～20	竪穴住居・土坑(貯蔵穴含む)・自然流路	土器・打製石斧・磨製石斧・石鏃・砥石・磨石
⑤	高田新遺跡	高岡市高田新	晩期後半	扇状地扇端部	15～17	なし	土器・打製石斧・石鏃等
⑥	駒方遺跡	高岡市駒方	晩期後半	扇状地扇端部	15～17	なし	土器・土偶・打製石斧・磨製石斧・磨石等
⑦	久泉遺跡	砺波市久泉	後期末	扇状地扇尖部	54.5	なし	土器等
⑧	北野遺跡	小杉町北野	晩期後半	丘陵裾部	27	環状木柱列・方形掘立柱建物・穴	土器・打製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿・石棒
⑨	古沢A遺跡	富山市古沢	晩期後半	丘陵端部	27～35	柱穴状ピット群・土坑・巨大柱穴群・竪穴状遺構	土器・スタンプ状土製品・打製石斧・磨製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿・石棒・砥石・石剣・砥石
⑩	豊田遺跡	富山市豊田	晩期後半	扇状地扇端部 自然堤防	10	ピット状遺構(貯蔵穴含む)	土器・打製石斧・石鏃・穂つみ状石器等
⑪	豊田大塚遺跡	富山市豊田	晩期後半	扇状地先端 自然堤防	7～8	なし	土器・有孔球状土製品・土偶・磨製石斧・御物石器・石刀・砥石・打製石斧・磨製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿・石棒・砥石・玉類等
⑫	岩瀬天神遺跡	富山市岩瀬	後期～晩期	海岸砂丘	4	なし	土器・有孔球状土製品・土偶・土版・滑車形耳飾・打製石斧・磨製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿・石棒・砥石・玉類等
⑬	若宮B遺跡	立山町若宮	晩期後半	自然堤防	17	小ピット	土器・打製石斧等
⑭	田家遺跡	黒部市田家新	後期～晩期	丘陵裾部	10～15	なし	土器・有孔球状土製品・滑車形耳飾・打製石斧・磨製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿・石棒・砥石・玉類等
⑮	境A遺跡	朝日町境	後期～晩期	丘陵裾部	5～30	弧状木柱列等	土器・有孔球状土製品・土偶・土版・滑車形耳飾・打製石斧・磨製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿・御物石器・石棒・石刀・石冠・砥石・玉類等
⑯	十二町湯排水機 場遺跡	水見市窪	晩期後葉	海岸砂丘	-2	なし	土器・石鏃・石鏃
⑰	朝日貝塚	水見市朝日丘	後期～晩期中葉	丘陵裾	7	なし	土器・有孔球状土製品・土偶・磨製石斧・石棒・石刀等
⑱	朝日水源遺跡	水見市朝日丘	後期～晩期	丘陵裾	7	なし	土器等
⑲	吉岡遺跡	富山市吉岡	晩期後半	扇状地扇端	40～42	石組炉・配石	土器・打製石斧・磨製石斧・石鏃・敲石・磨石・石皿等

※ 長期間に亘る遺跡については後期末葉～晩期の時期のみ扱い、それ以外の時期については表示していない。



第3図 下老子笹川遺跡

第4図 豊田遺跡



新潟県における縄文時代後晩期の低湿地集落と生業

荒川 隆史（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）

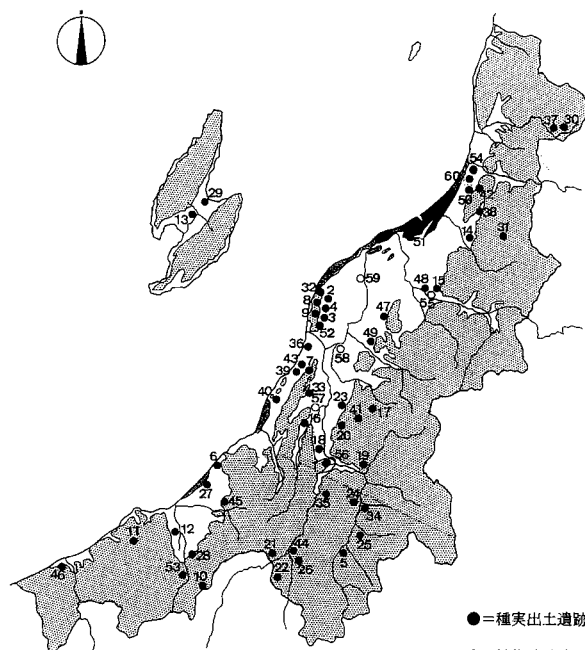
1 越後平野の遺跡立地

ここでは調査が進んでいる越後平野の遺跡について述べる。越後平野における遺跡分布は、砂丘型・堤防型・埋没丘陵型・沖積地埋没型の大きく4つに分類できる〔寺崎2001〕。砂丘型では、鳥屋式土器の標式遺跡である豊栄市鳥屋遺跡（晩期後葉）など阿賀野川以北に後晩期の遺跡が多い。堤防型では、粘土土器の確認が報じられた栄町長畑遺跡（晩期終末）や多数の墓坑が検出された田上町保明浦遺跡（晩期後葉）、木柱根が出土した弥彦村蒲田遺跡（晩期後半）など信濃川周辺の調査が進んでいる。埋没丘陵型では、88本の木柱根や「トチ塚」が検出された巻町御井戸A遺跡（晩期前葉～後葉）、堅果類の水さらし場と推定される木組み遺構がみつかった出雲崎町寺前遺跡（後～晩期）などトチノキ種実の灰汁抜き加工に関する遺跡がある。沖積地埋没型では、加治川村青田遺跡（晩期終末）で大規模集落の調査が行われたほか、中条町野地遺跡（後期中葉～晩期前葉）においても大規模集落が検出され、低湿地集落の様相が明らかになりつつある。また、地表下約5mから不時発見された新発田市轟貝塚（中期末～後期初頭）も生業を検討する上で重要である。

2 低湿地集落の生業

青田遺跡は沖積地を流れる河川の両岸に掘立柱建物が構築された集落で、掘立柱建物58棟・土坑79基・堅果類廃棄範囲59か所などが検出された。遺物は木柱根428本・草壁材・丸木舟・櫓・釜状編物・赤漆塗糸玉などの多数の有機質遺物出土した。掘立柱建物は、柱根の年輪年代学的解析から1時期に8～9棟構築されていたと推定される。また、クリ材の成長スピードが自然林に比べ早いことがわかり、花粉分析結果などを総合すると集落周辺に人為的にクリ林が形成されていた可能性が高まった。堅果類廃棄範囲では、1か所に推定7,000個を超えるクリ果皮の廃棄層が累積しており、クリ果実がジャーフードとして利用されていたものと考えられる。こうした多量のクリ果皮からなる廃棄範囲は短期間の集中的な加工の結果と推察される。さらに、トチノキ種皮やヒエ果実も出土し、日常的に利用されていた可能性が指摘されている。こうした植物利用とコイ科やサケを対象とした河川漁撈との組み合わせが青田遺跡の生業の基本と考える。

県内の堅果類出土遺跡をみると、御井戸A遺跡ではトチノキ種子を「主食」とする食生活が推定された〔前山1996〕。しかし、花粉分析によればクリが多産するほか、木柱根のすべてがクリ材であることから、青田遺跡と同様にクリ果実の利用率が本来高かったことが推測される。そして、クリ・トチノキの花粉が多産する遺跡が多いことから、これらの林を集落の周囲に人為的に備えていたことも視野に入れる必要があろう。また、栽培植物の利用については、青田遺跡でヒエの利用が指摘されたものの、検出遺跡が少ない。イネの利用については、プラントオパール分析により新発田市村尻遺跡・長畑遺跡・長岡市藤橋遺跡で晩期後葉の土器胎土からイネが検出され、稲作が導入された可能性が指摘されている〔外山・中山2001〕。しかし、稲作関連遺構が検出されていない現段階では詳細は不明といわざるを得ない。むしろ、堅果類利用を主体として、集落の立地に応じた狩猟や漁撈を組み合わせる生業の姿が想起される。そして、越後平野の各立地の集落が、石材・石器、あるいは特定の食料などを河川交通によって流通させるネットワークが集落経済を支えていた可能性を検討すべきと考える。生業を検討するには、各立地における生業を明らかにすることが重要である。



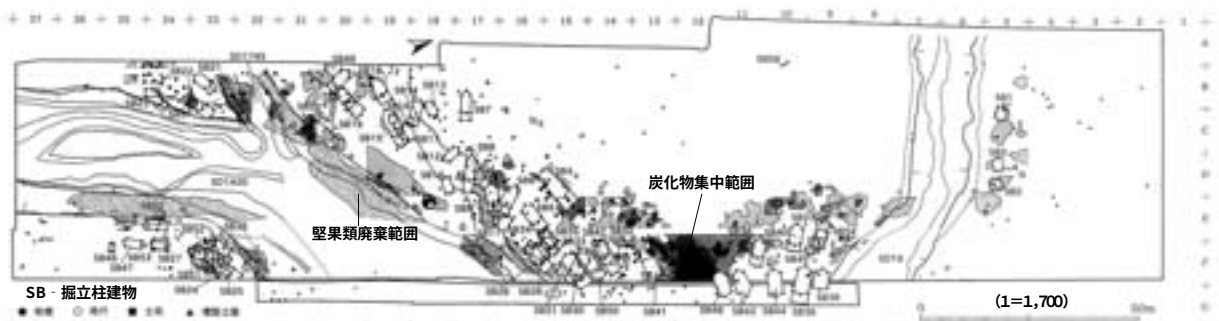
●=種実出土遺跡

○=植物珪酸体分析を行った遺跡

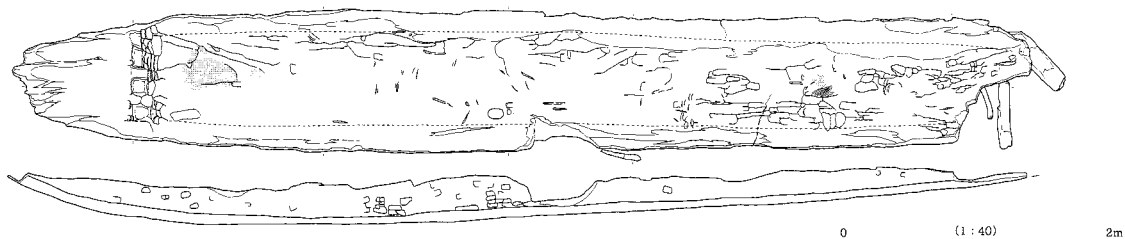
No.	遺跡名	所在地	時期	クルミ	クリ	トチノキ	ドングリ	ハシバミ	ブナ	カヤ	サンショウ	ヒシ	モモ	球根	アブラナ	マメ	イネ	オオムギ	植物珪酸体分析
1	西倉	川口	縄文前期	△															
55	北野Ⅰ(下層)	上川	前期		●	●													×
2	布目	磐	前期前葉	△															
3	新谷	磐	前期前葉	△	○	△													
4	藤原	磐	前期前葉	△	△														
5	万徳寺林	塩沢	前期後葉	△	△						△	△							
6	鶴屋町	柿崎	前期後葉		○														
7	大武	和島	前期前葉	○	△		●												
8	大沢	磐	前期前葉	△	△		△					△							
9	桑原	磐	前期前葉	△	△	▲	△				△	△							
10	道多	妙高	前期前葉	△	△		△												
11	大イナバ	名立	前期前葉		○						△								
53	和泉A(下層)	中郷	前期前葉	△			●												×
12	山屋敷Ⅰ	上越	前期前～中葉	△															
13	雪の貝塚	金井	前期前～中葉	△															
14	上草野E	新発田	前期中葉	△	△						△								
15	ツベタ	安田	前期中葉	△	○	△								△					
16	岩野原	長岡	前期中葉	△	○	△													
17	飯島	新井	前期中葉		○														
18	城之腰	小千谷	前期中葉		○	△	△												
19	清水上	堀之内	前期中葉	△		▲	▲												
20	居平	堀之内	前期中～後葉	△															
5	万徳寺林	塩沢	前期中～後葉	△	△		△		△										
21	八反田	津南	前期中～後葉	△	△										○				
22	沖の原	津南	前期中～後葉	△	○	△	△												
23	中道	長岡	前期後葉	△			△												
24	水上	大和	前期後葉	△			○												
25	宮下原	大日町	前期後葉	△															
26	反里口	津南	前期後葉		△														
27	長峰	吉川	前期後葉	△	△														
28	大貝	新井	前期後葉	△	△														
29	横溝	両津	前期後葉		○														
42	金塚	加治川	後期		△														
23	中道	長岡	後期			○													
5	万徳寺林	塩沢	後期前葉	△	△														
18	城之腰	小千谷	後期前葉	△	△	△	△	△								△			
23	中道	長岡	後期前葉		△	○													
30	黒瀬	明日	後期前葉		△	△													
31	分谷地A	藤川	後期前葉	△	△	△													
32	上ノ原	磐	後期前葉	△	△														
33	頼立	三島	後期前葉	○	△	○	△												
34	柳古新田下原A	大和	後期前葉	△															
35	原田B	十日町	後期前葉		△														
21	八反田	津南	後期中葉												△				
36	藤島	分水	後期中～後葉	△															
37	元屋敷	朝日	後期後葉	△		●	○	●											
38	村尻	新発田	後期後葉	△	△	△	△												
39	寺前	出雲崎	後期後葉			△													
40	刈羽大平	刈羽	後期後葉			▲	●	▲											
41	布場平D	堀之内	後期後葉			○													
54	道雄	荒川	後期後葉	△	▲		●												
56	三仏生	小千谷	縄文前期～晩期																×
43	群々入製鉄	和島	後～晩期		○														×
60	野地	中条	後期中葉～晩期前葉	○	○	●	○												
38	村尻	新発田	晩期	△	△	△	△												◎土
39	寺前	出雲崎	晩期			△													
44	正部ヶ原A	津南	晩期前葉	△															
45	藤原寺	津川原	晩期前葉	△	○														
46	寺地	青森	晩期前～中葉	○			△	▲	△										
47	川船河	田上	晩期中葉	△	△			△											
48	横峰A	安田	晩期中葉	△															
49	上野原	三桑	晩期中葉	△	△														
50	青田	加治川	晩期後葉	○	○	●	○	▲	○		○	△	△						×土
51	鳥屋	島栄	晩期後葉	△	△												△	△	×土
52	御井戸	磐	晩期後葉	○	△	●	○	●	○		△	△							◎土
57	鎌池	長岡	晩期後葉							△		△							◎土
58	長峰	吉川	晩期後葉																◎土
53	和泉A(上層)	中郷	晩期後葉～弥生前期				▲												◎土
59	頼立	黒崎	晩期後葉～弥生前期																◎土

○=多量 △=少量 ●=花粉多量 ▲=花粉少量 ◎=イネの珪酸体検出 ×=イネの珪酸体検出せず ±=土器胎土分析

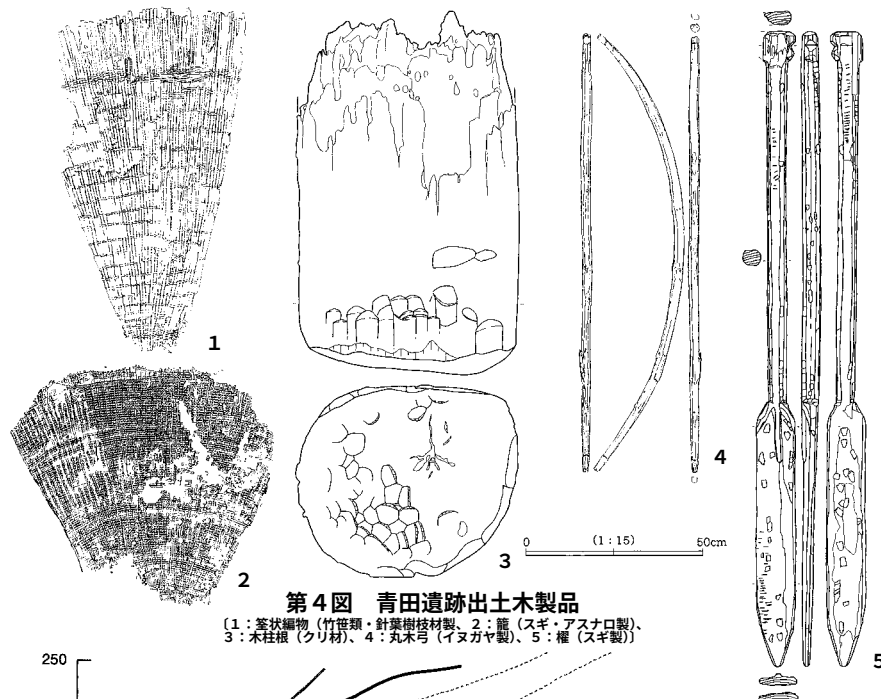
第1図 新潟県における種実出土・植物珪酸体分析実施遺跡
(前山精明1999「植物利用」『新潟県の考古学』高志書院に追加)



第2図 青田遺跡遺構配置図



第3図 青田遺跡出土丸木舟（トチノキ製）

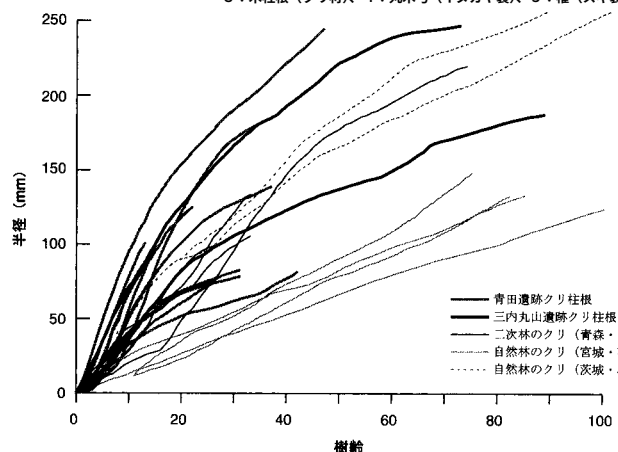


第4図 青田遺跡出土木製品

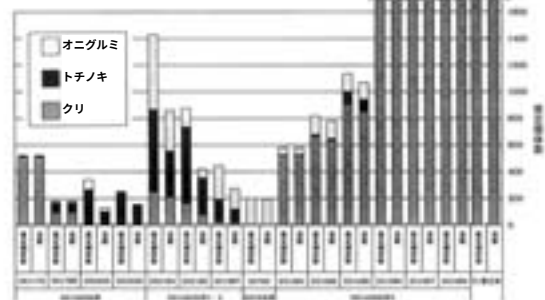
(1: 笠状編物 (竹筒類・針葉樹材製)、2: 鉢 (スギ・アスナロ製)、3: 木柱根 (クリ材)、4: 丸木舟 (イヌガヤ製)、5: 椀 (スギ製))

貝類	カラスガイまたはヌマガイ?
魚類	シジミ類
	サケ科
	ニゴイ属?
	ウグイ属
	フナ
	コイ?
	タイ科
	硬骨魚類
爬虫類	ヘビ科
鳥類	ガンカモ科
	カモメ科
	小型鳥類
哺乳類	アナグマまたはカワウソ?
	ニホンオオカミ?
	ニホンシカ
	海獣
	ヒト?

第1表 青田遺跡出土動物遺体種名表



第5図 木柱根のクリおよび二次林と自然林に生育する現生のクリの生長曲線の比較



第6図 青田遺跡、S1層期出土堅果類の指定個体数
※図表はすべて荒川ほか2004『新潟県埋蔵文化財報告書第133集 青田遺跡』新潟県教委・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団から転載



東北地方における縄文後・晩期の低湿地遺跡

小久保 拓也（八戸市教育委員会）

低湿地遺跡とその立地 「低湿地」とは、沖積平野などの低地に形成された湿地を指し、「低湿地遺跡」とは、主要遺構そのものが低湿地内部の微高地や帯水域に存在する場合、特にその遺跡を指す（那須・市原1979）と提案されているが、現状では遺跡の沢などの一部分を指して「低湿地遺跡」や「泥炭層遺跡」と包括的に呼称している場合が多い。東北地方の縄文後・晩期では13遺跡が確認されているが、いずれも相対的な低地ではなく、湿潤な環境に遺構・遺物が検出された「低湿地遺跡」と捉えられており、「低湿地集落」は発見されていない。

発見される遺構と遺物 埋没してからの遺跡の環境変化は地下水などにより非常に緩やかであり、ほとんどの遺跡で検出される「捨て場」からは、大量の土器とともに植物質の遺物や食料残滓が良好な状態で発見されている。また、土壌には昆虫や種実・花粉などが保存されているため、植生を含めた遺跡環境を考えることができる。生業に関連する遺構としては、是川中居（青森）・柏子所Ⅱ・上谷地（秋田）・高瀬山（山形）から水さらし場遺構が検出されており、萩内（岩手）からは漁撈施設と考えられるエリ状遺構のほか、階段状の木組み遺構、足跡などが検出されている。

東北地方の低湿地遺跡に見られる生業活動 是川中居・山王罎（宮城）・荒屋敷（秋田）では植物珪酸体分析や種実分析を行っている。是川中居の分析では栽培種の可能性があるゴボウやヒエを検出しているが、いずれも量では堅果類には遠く及ばない。東北地方で近年発見が相次いでいる水さらし場遺構はトチのアク抜き施設であり、施設を使いトチを大量に処理していたことを示している。以上の点から東北地方においては縄文時代の生業の核である狩猟・漁撈・採集活動への重点の置き方は大きく、後・晩期での栽培や農耕への変化は少なかったようである。

是川中居遺跡 是川中居は低湿地調査の先駆けとなった遺跡であり、近年、史跡整備に向けて本格的な調査が行われている。「特殊泥炭層」があるとされていた地点は沢地形であり、捨て場が形成されていることが明らかになった。また、沢を埋めているのは泥炭層ではなく食料残滓などによる植物遺体屑層であり、捨て場からはヤス軸3本・弓・掘り棒の5本が束ねられた状態で出土したほか、建築部材や樹皮製の大型漆塗り容器などが見つかった。その下の砂層からは、水さらし場など多用途の木組み遺構を検出した。さらに遺構下部から板材と礫が出土しており、作り替えをしていたと考えられる。

低湿地遺跡の保存・活用 花粉・種子分析を含め、生業の復元という視点での調査は不十分であり、今後も同様の調査が継続されていく必要がある。また、出土する木・樹皮・蔓を材料とした植物質遺物は新発見のものも多く、土器・石器を中心に想定されていた生業活動を大きく補強するものである。栽培・農耕への変化だけに捉われず、新発見の植物質遺物と合わせて生業活動の検討をしていく必要があろう。低湿地遺跡の調査は特別な方法や費用が必要であり、相当の準備が必要である。さらに史跡整備では貴重な情報を持っている低湿地遺跡の水源などを含めた環境調査を行い保存していく必要があるが、同時に教育普及の要望にどう答えるかが課題となっている。また植物質遺物の保存処理は永久なものではなく、処理後は継続的な経過観察が必要であり、処理・保管過程などを記したカルテ作成が望ましい。

《参考文献》那須孝悌・市原壽文 1979 「低湿地遺跡」および関連する用語の定義について 考古学研究119

是川中居遺跡(青森県)

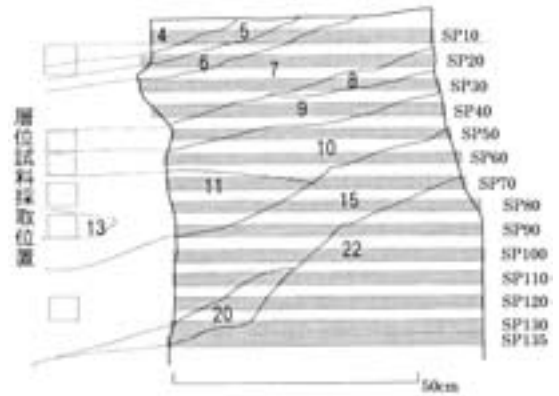


図1 是川中居遺跡 D 区連続試料採取位置

D区の種実分析について

D区ではクルミ・トチ・ヤマグワ・ニフトコなどが目立つが、ヒエは非常に少ない。クリは花粉のみ大量に検出している。

遺跡北側の長田沢1区(晩期中葉)からイネ類が2点検出されているが、検出した土層は、地すべりによる不整合を示す部分があり、弥生時代以降の堆積層と考えている。

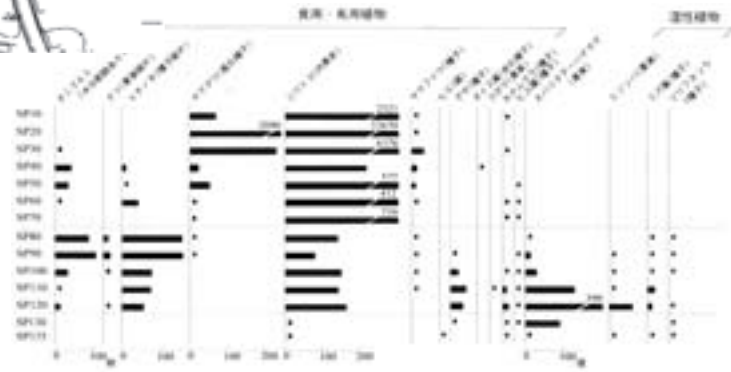
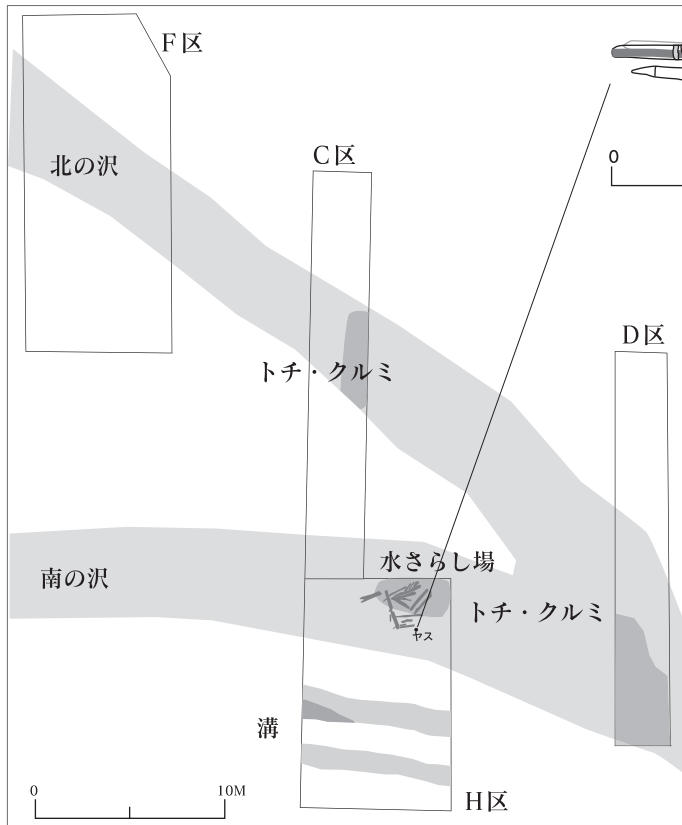
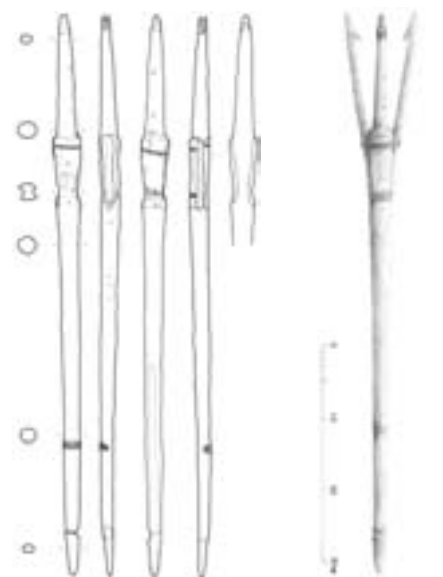
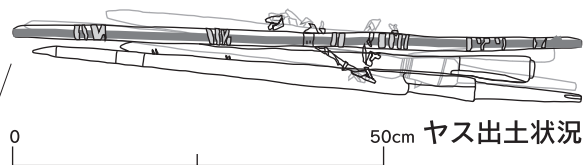


図2 是川中居遺跡 D 区の主要大型植物化石変遷図

(表示個数は12.5リットル中に含まれていた種子総数、黒丸印は10個未満)

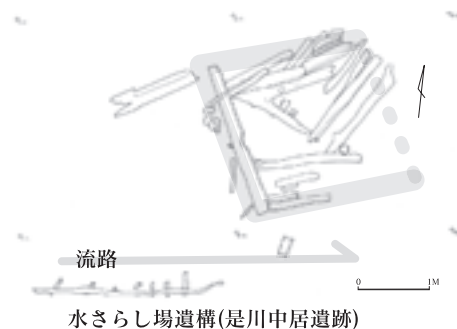
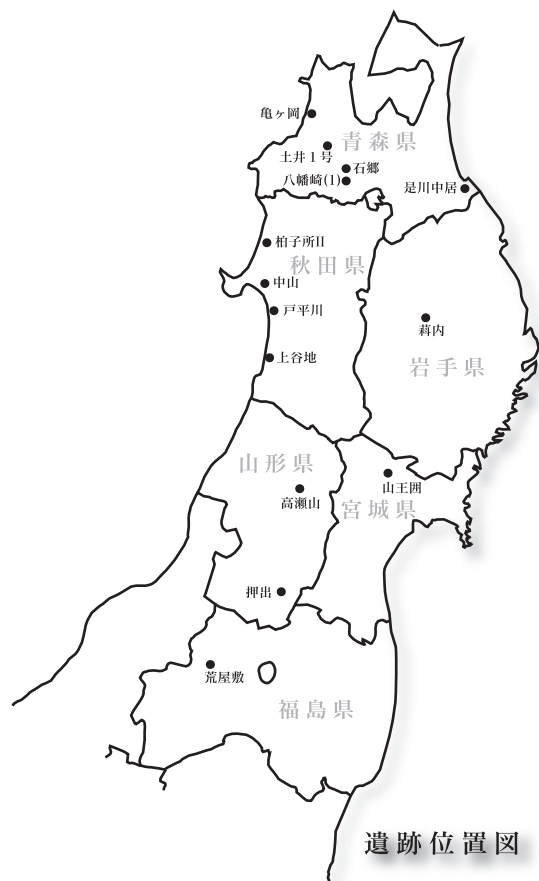


中居遺跡南側のようなす



ヤス1実測図

想定復元図



No	カナ	所在地	立地	時期	検出遺構	出土遺物	自然化学分析
1	ヤハタザキ	青森県南津軽郡尾上町八幡崎宮本	平川水系、猿賀低台地西端	晩期前半	捨て場	漆塗り飾り櫛、藍胎漆器、竹製品、木製品、クリ、クルミ、トチ	
2	ドイイチゴウ	青森県北津軽郡板柳町	岩木川水系、中流右岸の自然堤防上と接する湿地帯	後期～晩期	捨て場	藍胎漆器、飾櫛、腕輪、大形岩偶	
3	イシゴウ	青森県南津軽郡平賀町石郷	平川水系、扇状地	後期末～晩期初頭	捨て場	四脚付土器、織布漆器、木製品	樹種
4	カメガオカ	青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡	岩木川水系、台地先端部	晩期	捨て場	漆塗り土器、彩文土器、藍胎漆器、櫛、編布	花粉、樹種
5	コレカワナカイ	青森県八戸市是川字中居	新井田川右岸の河岸段丘	晩期	捨て場、水さらし場	木胎漆器、藍胎漆器、木製品、樹皮製容器、編布、紐、漆塗り土器、弓、櫛、腕輪、篋形木製品、飾り太刀	AMS、花粉、種実、樹種、胎土、漆塗膜
6	シダナイ	岩手県盛岡市繫字萩内川原、上野地内	雫石川右岸、自然堤防の後背湿地 (L面)	後期・晩期	捨て場、エリ、洗い場、足跡、階段状杭列	木機、漆器、弓、櫛、碇状木製品、墓標状木製品、トーテムポール状木製品、割材、丸木杭	樹種
7	カシコトコロ	秋田県能代市柏子所	台地先端部と崩落によって形成された平坦面と開析谷	後期	水さらし場	加工材、トチなど	
8	カミヤチ	秋田県本庄市	台地先端部と直下の低地	後期前葉	水さらし場	加工材、トチなど	
9	トヒラカワ	秋田県秋田市添川字戸平川	旭川左岸 (羽黒山丘陵)、旭川低地に接している	後期	捨て場	編物、曲物容器、木製品	漆塗膜構造分析、脂肪分析、AMS、樹種同定、胎土分析、黒曜石産地同定、玉類石材分析
10	ナカヤマ	秋田県五城目市		晩期	捨て場	編布	
11	タカセヤマ	山形県寒河江市	最上川左岸の小丘陵と河岸段丘上、低位段丘は自然堤防の後背湿地	後期中葉 晩期前葉	水さらし場 (木組み遺構、石組み遺構)	加工材、トチなど	AMS
12	サンノウカコイ	宮城県栗原郡一迫町真坂山王岡、道満	長崎川北岸の自然堤防上	晩期	捨て場	編布	花粉、樹種
13	アラヤシキ	福島県大沼郡三島町	只見川右岸の河岸段丘、扇状地の緩斜面	晩期	捨て場	編布	黒曜石産地、樹種、種子



北海道における縄文後晩期の低湿地集落 — 農耕の視点で考える —

倉橋 直孝（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

＜はじめに＞ 北海道における縄文時代後晩期の低湿性遺跡調査は、千歳市美々4遺跡呑口部などで行われていたが、本格的な調査は小樽市忍路土場遺跡にはじまる。その後、千歳市キウス4遺跡、キウス5遺跡、苫小牧市柏原5遺跡、余市町安芸遺跡などで調査が行われている。

栽培植物の検出については、花粉分析、プラントオパール分析、水洗選別法、フローテーション法などが用いられている。北海道ではフローテーション法による植物遺体の検出が他の地域に比べ1970年代から継続的に行われているので、この成果を中心に報告する。この方法の利点は、サンプリングする地点が低湿地部分に限定されず、台地上の遺構（竪穴住居跡、土壇、焼土、盛土遺構など）でも行えることである。

＜北海道における縄文時代後晩期の遺跡から出土した植物遺体＞

縄文時代後晩期の遺跡から出土した植物遺体の種類：表1のようにフローテーション法により木本、草本類の種実などを検出した。大部分が野生種であるが、一部栽培植物も見つかっている。キウス4遺跡、キウス5遺跡、柏原5遺跡、札幌市N30遺跡からはアサが、忍路土場遺跡からはゴボウ、シソ、ホウズキ、恵庭市ユカンボシE7遺跡からはアワ、恵庭市西島松5遺跡からはオオムギ、小樽市塩谷3遺跡からはオオムギ、アワ？が検出されている。柏原5遺跡から出土したアサは量が比較的多いが、その他のものは出土数が少なく、実際に現地で栽培されたものか、持ち込まれたものか、もしくは偶発的に混入したものか判断が難しい。その他、花粉分析では、忍路土場遺跡、奥尻町東風泊遺跡、千歳市ママチ遺跡からソバ属の花粉が見つかっている。

＜北海道における縄文農耕の可能性＞

縄文時代に農耕があったかどうかは、農耕の定義も含めてさまざまな議論がある。

栽培植物：ソバ、アサ、ソバ、アワ？、ゴボウ、シソ、ホウズキ、オオムギが検出されている。

畠跡：千歳市美々貝塚北遺跡で畠跡といわれる遺構が報告されているが、解釈が難しいところである。その他に縄文時代の畠跡はみつかっていない。

農具：はっきり農具といえる遺物は出土していない。しかし、キウス5遺跡などから出土している尖頭加工棒は、播種などに利用することが可能である。

ヒエ属に見られる形態の変化：縄文時代早期貝殻文期の函館市中野B遺跡からヒエ属の種子が出土している。エノコログサなど同様に生えていたと思われる植物種子が検出されないこと、出土するヒエ属の種子には脱穀されているものが多いことから、選択して利用していたと考えられる。その中に野生種のイヌビエの形態でありながら、栽培型のヒエに近い形態を持つものが見られる。それらの形態変化は、その他縄文時代の遺跡から出土するヒエ属種子にも見られる。これは人が関与することによる野生植物から栽培植物への馴化（domestication）の過程と同じものである可能性がある。

＜まとめ＞ 本州の後晩期のようにイネの検出は見られず、雑穀ではアワ、オオムギが少量出土しているにすぎない。ただ、ヒエ属は早期中葉の中野B遺跡から出土し、縄文時代の各時期に見られ、それが続縄文時代に続いているようである。形態変化が縄文時代を通してみられることを積極的に評価すれば馴化の過程をあらわしているといえる。ヒエは日本で栽培種になったと考える農学者もあり、このような状況が本州の縄文時代の遺跡でどの程度みられるのか今後の課題であると考えられる。

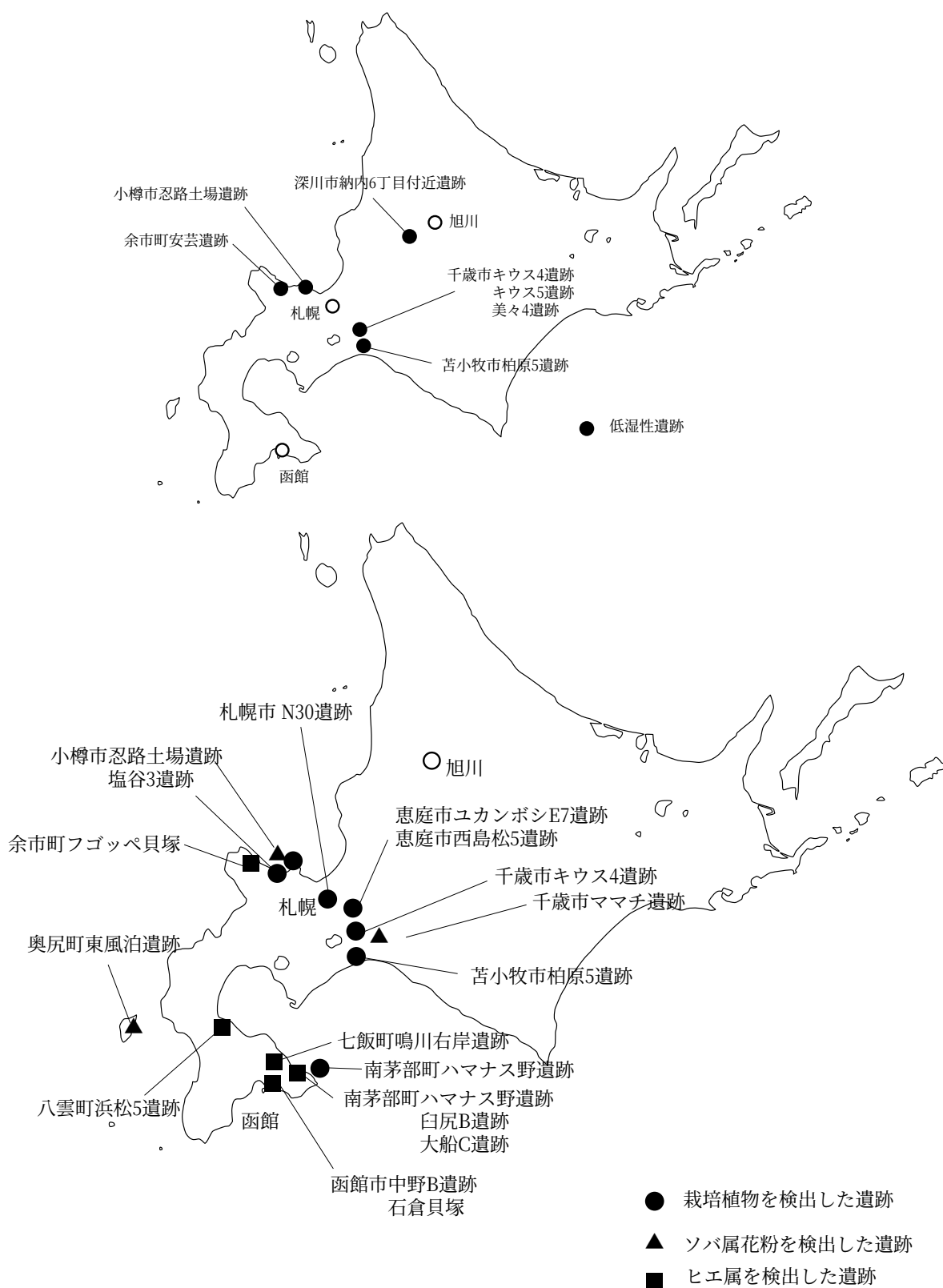
低湿性遺跡から出土した植物遺体

遺跡名	時期	サンプル地点	植物名	報告書名	発行年	発行元	同定者
1 小樽市忍路土場遺跡	縄文後期	低湿地遺物包含層	ハイスガヤ種子・アカドマツ球果・オニグルミ核・アサダ堅果・ハシハミ堅果・ハシノキ果穂・鱗片・ミズナラ堅果・コナラ・クリ堅果・ホウノキ種子・コブシ種子・ヤマザクラ種子・キハダ種子・ミツバツグ種子・トチノキ種子・ヤマブドウ種子・ウルシ種子・ミズキ種子・ハクウボク種子・ニワトコ種子・オオカキ・カヤツリグサ科(エノコログサまたはキンエンコログサ)・カヤツリグサ科(ホタルイ)・カヤツリグサ科(カヤツリグサ)・タデ科種子・アカザ属・アブラナ科・シソ・ホウズキ・ゴボウ	『小樽市 忍路土場遺跡・忍路5遺跡第4冊分』, 193-212	1989	北海道埋蔵文化財センター	矢野牧夫
2 千歳市美々4遺跡	縄文後期	低湿地遺物包含層	オニグルミ核・核片・ハシハミ堅果・ミズナラ堅果・穀斗・クリ堅果・トチノキ種子皮・ヒシ刺針・ヤマブドウ種子	『美沢川流域の遺跡群3』, 53-56	1979	北海道教育委員会	矢野牧夫・尾上博章
3 苫小牧市柏原5遺跡	縄文後～晩期	遺物包含層	イネ科(ヒエ属?)・シソ属・アサ・タデ科・アカザ属・ケシ科(エノコログサ)・セリ科・カヤツリグサ科(スゲ属)・ヒルムシロ属(ヒルムシロ)・クサノオウ属(クサノオウ)・バラ属(ハマナス)・クワ属(クワ)・カラマツソウ属(カラマツソウ)・タラノキ属(タラノキ)・マタタビ属(サルナシ)・ニワトコ属(エノニワトコ)・キハダ属・ブドウ属(ヤマブドウ)・ミズキ属・モクレン科(ホウノキ)・ヒシ属・クルミ属・ブナ科(ミズナラ)	柏原5遺跡	1997	苫小牧市教育委員会 苫小牧市埋蔵文化財調査センター	梅坂恭代
4 千歳市キウス5遺跡A・2地区	縄文中～後・晩期	土壌・焼土・包含層・流路	<谷地部分>アサ・タデ属・ナス科・ネギ属・マタタビ属・タラノキ属・キハダ属・ミズキ属・サクラ属・ブドウ属・クリ属・コナラ属・クルミ属 <段丘・低湿地・旧河道部分>アサ・タデ属・ナス科・ミヤマニガウリ属・ミツバツグ属・マタタビ属・タラノキ属・キハダ属・クマシダ属・サクラ属・ブドウ属・モクレン属・エゴノキ属・クリ属・クルミ属・ハシノキ属	『千歳市 キウス5遺跡(5) 第2分冊』, 369-382	1998	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
5 千歳市キウス4遺跡A2地区	縄文前期	堅穴住居・焼土・土壌・包含層	カヤツリグサ科・ホタルイ属・ユリ科・ミツバツグ属(ミツバツグ)・キハダ属・ブドウ属(ヤマブドウ)・ホウノキ属・コナラ属・クルミ属(オニグルミ)	『千歳市 キウス4遺跡(4)』, 211-217	1999	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
6 深川市納内6丁目付近遺跡	縄文早期	旧河道・堅穴住居	オニグルミ核・核片・ヤマグワ核・ホウノキ核・コブシ核・キイチゴ属核・ナナカマド属核・サクラ属核・キハダ核・ブドウ属核・サルナシ種子・タラノキ属核・ミズキ核・エノニワトコ核・イネ科種子・ヒルムシロ属種子・カヤツリグサ科果実A・B・C・D・タデ属果実・アカザ科果実・キンボウゲ科果実・キシムシロ属またはヘビイチゴ属核・ナス科種子・シソ科種子・ナデシコ科種子・キク科果実・アブラナ科種子・マメ科種子	『深川市 納内6丁目付近遺跡2』, 255-276	1990	北海道埋蔵文化財センター	山田悟郎

栽培植物またはヒエ属が出土した遺跡

遺跡名	時期	サンプル地点	植物名	報告書名	発行年	発行元	同定者
1 小樽市塩谷3遺跡	縄文晩期	土坑・屋外炉・包含層・流路	ヒエ属・メヒシバ属・キンエンコロ・アワ・オオムギ・タデ科・キク科・マメ科・マタタビ属・ニワトコ属・タラノキ属・キハダ属・ウルシ属・ミズキ属・ブドウ属・クルミ属	『塩谷3遺跡』, 134-140	1991	小樽市教育委員会	吉崎昌一
2 札幌市N30遺跡	縄文後～晩期	住居址・焼土・炭化物集中・石片集中	アサ・タデ属・ナス科(ホウズキ属)・マメ科・バラ属(ハマナス)・キハダ属・マタタビ属(サルナシ)・ニワトコ属・タラノキ属(タラノキ)・ミズキ属(ミズキ)・モクレン属(ホウノキ)・ブドウ属(ヤマブドウ)・ウルシ属(ヤマウルシ)・コナラ属・クルミ属	『N30遺跡』札幌市文化財調査報告書58	1998	札幌市教育委員会	吉崎昌一・梅坂恭代
3 恵庭市西島松5遺跡	縄文後期	土壌・焼土	オオムギ・マタタビ属・キハダ属・ブドウ科・クルミ属・コナラ属	『恵庭市西島松5遺跡(2)』, 355-358	2003	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
4 千歳市キウス4遺跡A・H・I・K地区	縄文	堅穴住居・土坑墓・盛土遺構・屋外炉・水場遺構・プラスチック状ビット・包含層	ヒエ属・アサ・タデ属・ナス科・キク科・ケシ科・マメ科・ユリ科・マタタビ属・キハダ属・ブドウ科・コナラ属・クルミ属	『千歳市 キウス4遺跡(3)』, 514-521	1999	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
5 千歳市キウス4遺跡R地区	縄文早期・中期・後期	堅穴住居・焼土・土壌	ヒエ属・イネ科・アサ・タデ科・キク科・ユリ科・ブドウ科・ブナ科・クルミ属・マタタビ属・キハダ属・ウルシ属	『千歳市 キウス4遺跡(6)』, 342-348	2000	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
6 八雲町浜松5遺跡	縄文後期	堅穴住居・土坑・包含層	クリ子葉果皮・ミズナラ子葉・コナラ子葉・カシワ子葉・オニグルミ核片・エノニワトコ種子・タデ属そう果・ヒエ属穎果	『浜松5遺跡』, 185-190	1995	八雲町教育委員会	山田悟郎
7 千歳市キウス4遺跡I地区	縄文後期	盛土遺構	ヒエ属・アサ・キク科・タデ属・ナス科・アカザ属・ユリ科・マタタビ属・キハダ属・ブドウ属・クリ属・クルミ属・コナラ属	『千歳市 キウス4遺跡(2)』, 357-367	1998	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
8 恵庭市ユカンボシE7遺跡	縄文後期	堅穴住居・焼土	アワ・オニグルミ・コナラ亜属・キハダ・ブドウ属・エノニワトコ・アカザ属・タデ属・キク科・ユリ科・カヤツリグサ科	『恵庭市 ユカンボシE7遺跡』, 361-370	1998	北海道埋蔵文化財センター	山田悟郎
9 七飯町鳴川右岸遺跡	縄文前～中期・後期・晩期	屋外炉	ヒエ属・マタタビ属・ニワトコ属・キハダ属・ウルシ属・ミズキ属・タデ属・アサダ属・クルミ属	『七飯町 鳴川右岸遺跡』, 205-208	1994	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一
10 南茅部町大船C遺跡	縄文前～中期	堅穴住居	ヒエ属・タデ属・マメ科・マタタビ属・キハダ属・ミズキ属・ウルシ属・ブドウ属・クマシダ属・アサダ属・クリ属・クルミ属・ニワトコ属・冬芽	『大船C遺跡』	1996	南茅部町教育委員会	吉崎昌一・梅坂恭代
11 南茅部町白尻B遺跡	縄文前～中期	堅穴住居	ヒエ属・タデ属・アカザ属・タラノキ属・キハダ属・キイチゴ属・ニワトコ属・ブドウ属・マタタビ属・ウルシ属・アサダ属・キク科・ナス科	paleoethnobotany of the kameda peninsula jomon	1983	university of michigan, No. 73	G.Crawford
12 南茅部町ハマナス野遺跡	縄文前～中期	住居址床面	ヒエ属・タデ属・ブドウ属・ウルシ属	『後 野 B 遺跡 ハマナス野遺跡』	1991	南茅部町埋蔵文化財調査団	梅坂恭代
13 南茅部町ハマナス野遺跡	縄文前～中期	堅穴住居	ソバ・ヒエ属・タデ属・アカザ属・タラノキ属・キハダ属・キイチゴ属・ニワトコ属・ブドウ属・マタタビ属・マメ科・アサダ属・ウルシ属・カヤツリグサ科	paleoethnobotany of the kameda peninsula jomon	1983	university of michigan, No. 73	G.Crawford
14 余市町フゴッペ貝塚	縄文前～中期	堅穴住居・屋外炉	ヒエ属・アカザ属・タデ科・マメ科・ヨモギ属・マタタビ属・タラノキ属・ニワトコ属・キハダ属・クルミ属	『余市町 フゴッペ貝塚 本文編』, 531-533, 535-546	1991	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一
15 函館市石倉貝塚	縄文前期	堅穴住居・土坑・焼土	ヒエ属・メヒシバ属・キハダ属・ミズキ属・ブドウ属・クルミ属	『函館市 石倉貝塚』, 219-224	1996	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
16 函館市中野B遺跡	縄文早期	堅穴住居・土坑・焼土	ヒエ属・タデ属・キイチゴ属・マタタビ属・ニワトコ属・ガマズミ属・ウルシ属・キハダ属・ミズキ属・ブドウ属・クルミ属	『函館市 中野B遺跡 第4分冊』, 304-313	1996	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代
17 函館市中野B遺跡	縄文早期	堅穴住居・土坑	ヒエ属・ナス科・タデ属・マタタビ属・ニワトコ属・キハダ属・ミズキ属・ブドウ属・クルミ属	『函館市 中野B遺跡(3)』, 615-621	1998	北海道埋蔵文化財センター	吉崎昌一・梅坂恭代

アンダーラインは栽培植物



参考文献

- 吉崎昌一1997「日本における栽培植物の出現」『季刊考古学』50
 高橋 理1998「北海道における縄文時代の植物栽培と農耕の地平」『考古学ジャーナル』439
 山田悟郎1998「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要』第26号

討論と展望

久田 正弘（調査第1課）

「低湿地集落」を生業という視点で捉えることとした。それは、低湿地は植物遺体が多く確認されることから、本来考古学が行うべき人間の営みの主要部分「衣・食・住」の目に見えにくい「食」について考えるヒントが多く残されているからである。しかし土器・石器などと同様に、植物遺体もたまたま掘り出されたものだけを報告することが石川県の現状である。それは調査体制や時間と予算の関係などクリアすべき多くの問題点がある。他地域の低湿地調査の事例・調査方法を知ることによって、調査担当者の目的意識を高めることも環日本海研究集会の目的とするところでもある。

水ノ江氏は山崎純男氏による北部九州での後・晩期での生業の新視点を紹介された。山崎氏は植物遺体や急増する石器（扁平打製石斧や磨製石斧）を分析して、後期後半にイネを中心にした焼畑農耕の存在を指摘し、弥生時代までの生業の変化の経緯を説明された。しかし、水ノ江氏は、住居形態や集落構造や集落立地の観点で分析を行うと、画期は後期と晩期との境にあるので、そのギャップの解消をどう判断するのか、という課題があることを指摘された。また、水ノ江氏は、北部九州での貯蔵穴を分析され、縄文時代前期から弥生時代後期まで存続するが、縄文時代はアク抜きを必要としないイチイガシが主体であることから、縄文時代には水晒し遺構は確認されていない。しかし、弥生時代になるとアク抜きを必要とするアカガシが主体になり、水晒し遺構が確認されることから、ドングリ類の貯蔵は質的な要求（うまみ）に答えるために選択された可能性を指摘された。



スライドを使った説明



発表会場

また、柳浦氏は島根県の遺跡立地を分析され、低湿地遺跡は縄文時代前期以降一定の比率をもって存在し続けており、後・晩期に低湿地進出＝農耕というシナリオは描けないようである。しかし、出雲平野南部・西端部などでは、新たに後・晩期に遺跡が進出される場所があり、立地面では注目すべき可能性を指摘されている。また、トチノキは低温帯のブナ帯の沢沿いに分布するので海岸部には存在しないが、海岸部の遺跡ではトチの実が一定量出土する例があるという。このことから、縄文人の嗜好性以外にも、海岸部と山間部との交易を考慮すべき点を指摘された。

荒川氏は、越後平野での低湿地遺跡を大きく4つに分類し、その代表的な遺跡の内容を紹介された。その結果、砂丘型集落以外は周辺にクリ林やトチノキ林が形成されていた可能性が高いことから、主食である堅果類を身近に備えながら、植物を栽培して安定した食料確保を行っていた可能性を指摘された。また、青田遺跡の石器石材の分析などから、阿賀野川以北の丘陵部などから入手されたことを明らかにした。4つの遺跡立地類型は、地形に応じた資源確保のために選択された結果であり、その

特性を生かしての生業を行い、不足部分は遺跡間ネットワークを利用している可能性を指摘された。

倉橋氏は、北海道での栽培植物の検出方法について、フローテーション法が1970年代から継続的に行われており、その結果台地部分と低湿地での植物遺体に差があることが明らかになった。これは、組織的な取り組みが成果を挙げた好事例である。私は本来残るはずが無いと先入感を持っていた台地上の遺跡でも検出可能であることに驚きを感じ、以前聞いた関東地方弥生時代の台地上の遺跡でも炭化麦などが検出されている事と合わせて考えると、やはり目的意識を持って調査・分析を行う必要を痛感した。

種子・花粉分析などの自然科学的分析は、各方面の研究者や機関にお願いして報告していただいている。しかし、報告書では時間の関係で、それらの分析結果の提示しかされないことが多いように思われる。分析によって明らかにされた事実を元に考古学方面からの検討を行えるように努力すべきであるが、難しいのも現状である。しかし、提示された事実を遺構・遺物によって検討していかなければ、学問分野を超えて（過去の）事実解明は有り得ないのである。自然科学的分析成果や研究主張を一方向的に聞くのではなく、考古学からも問題点・疑問点をあげていけるように努力すべきと思われる。

最後に、今回はパソコンを使用した具体的な遺跡・遺構・遺物などの説明が多くあった。有名な遺跡・遺物などを見れたことは有意義であったが、全体的に進行が遅くなったのが反省点である。しかし、発表だけの肩苦しい研究集会でなかったことも事実であり、有意義であった面も少なくなかったと思われます。



討論の様子



討論の様子



資料見学会

第5回いしかわの発掘展 「この世とあの世をつなぐもの」の記録

田村 昌宏

平成15年8月1日（金）～8月31日にかけて、第5回いしかわの発掘展「この世とあの世をつなぐもの—中世墓の世界—」を当センターのホールと研修室を会場に開催しました。今回の展示は、最近県内で発掘調査が増加している中世墓に焦点を当て、その調査成果をもとに中世の人々の死に対する考えを探っていくことを目的に企画しました。

なお、展示にあたっては、金沢市埋蔵文化財センター、野々市町教育委員会、辰口町教育委員会、加賀市教育委員会から資料を借用いたしました。

展示内容

展示は、「墓塔」「埋納物」「墓の変遷」などのコーナーに分かれ、中世墓から出土した卒塔婆や五輪塔、土師器皿や銅銭などの埋納物、珠洲焼、加賀焼の蔵骨器などを紹介しました。また、辰口町宮竹墓谷中世墓群から出土した石塔を組み直し、当時の墓地の景観を復元しました。

墓の成立

中世前半では、有力者の墓が単独で造られることが多く、その墓をひとつの象徴として血縁・地縁関係を強化したと思われます。中世の後半になると墓は群集化し、一般の人々にも普及して行きます。この頃から五輪塔などの石塔が墓標として頻繁に立てられるようになります。このように、中世の墓制は、時代によって変化し、また、階層差によって異なります。

墓 塔

墓塔は、埋葬地の上に立てる塔のことで、五輪塔や宝塔などの石塔や木製の塔婆などがあります。平安時代終わり頃に描かれた『餓鬼草紙』では、墳丘墓の上に木製塔婆や石製五輪塔などを見ることができます。県内では、押水町南吉田葛山遺跡や金沢市堅田B遺跡などから木製塔婆が見つっていますが、多くは出土していません。木製は石製と比べて腐りやすいので残らないためかもしれません。室町時代以降には、五輪塔や板碑など石塔が増加します。石塔の中で特に目立つのは五輪塔です。

五輪塔は、空輪（宝珠形）、風輪（半円形）、火輪（三角形）、水輪（円形）、地輪（方形）が組み合わされたもので、密教の宇宙観を表しています。県内では、全般的に見られますが、奥能登地域と北加賀地域に集中しています。五輪塔のなかには紀年銘の入ったものを見ることができます。紀年銘の内容は、造立年月日、造立者・被葬者で、ほとんどは地輪に彫られます。県内では、穴水町、野々市町、鶴来町などで確認されていますが10例ほどしかないことから加賀・能登地域では紀年銘を入れる風習はなかったと思われます。

中世墓から発見される石塔には、五輪塔のほかに板碑があります。板碑は、薄い板石で造られた塔婆の一種で、表面に仏像、梵字、五輪塔などを彫りこみます。県内では約1,000基確認されており、能登地域では鎌倉時代から、加賀地域では室町時代から見られるようになります。

また、加賀地域では、五輪塔の形状に似た宝塔を確認することができます。宝塔は、基礎と塔身は五輪塔の地輪、水輪と同じですが、その上にある笠は上部に反花が彫られ、さらにその上に相輪が乗ります。これは、福井県北部に分布する宝塔の影響を受けたと考えられています。

これらの石塔は、墓塔としてだけでなく、死者の冥福を祈るための供養塔にも用いられました。

墓の変遷

平安時代後期～鎌倉時代は、土葬を用いた木棺墓や土坑墓が見られます。加賀市三木だいもん遺跡では、長辺110cm、短辺約50cmの木棺墓が発見されました。規模などから幼児用の墓と考えられます。

鎌倉時代後半になると土葬墓が造られる一方で、配石区画をもった火葬墓が出現します。七尾市細口源田山遺跡は、54基の土葬墓と80基の火葬墓が発見されており、14世紀末に土葬が、15世紀前半から火葬による造墓が始まり、以後16世紀まで土葬と火葬が併存します。

室町時代以降は、石塔をもった火葬墓が各地で造立されます。この頃から墓の群集傾向が強まり、「個人」から「家」の墓としての意識が芽生えます。宮竹墓谷中世墓群の墓は川原石で区画された群集墓です。これらの墓は、初めに丘陵斜面最上部に立てられ、そこから時代が下るごとに順次斜面下へ向かって造られていったようです。

埋納物と蔵骨器

墓の中からは、土師器や漆器が見つかります。これらは死者を弔うために置かれたものと思われます。また、邪気を払うための鉄製刀子や銅銭なども出土します。この埋納物の種類や数などから、被葬者の地位や階層を推定することができます。

蔵骨器は火葬した骨を納める容器で、珠洲焼や加賀焼などの甕や壺をよく使用します。蔵骨器の蓋には摺鉢を使うこともあります。また、墓の中には火葬骨が単独で見つかることがよくあります。これは骨を納めていた木製容器が後世に腐ってなくなったためと考えられます。



展示室の景観



復元された石塔
(辰口町宮竹墓谷中世墓群)

南加賀地方における弥生時代の一様相

久田 正弘

1. はじめに

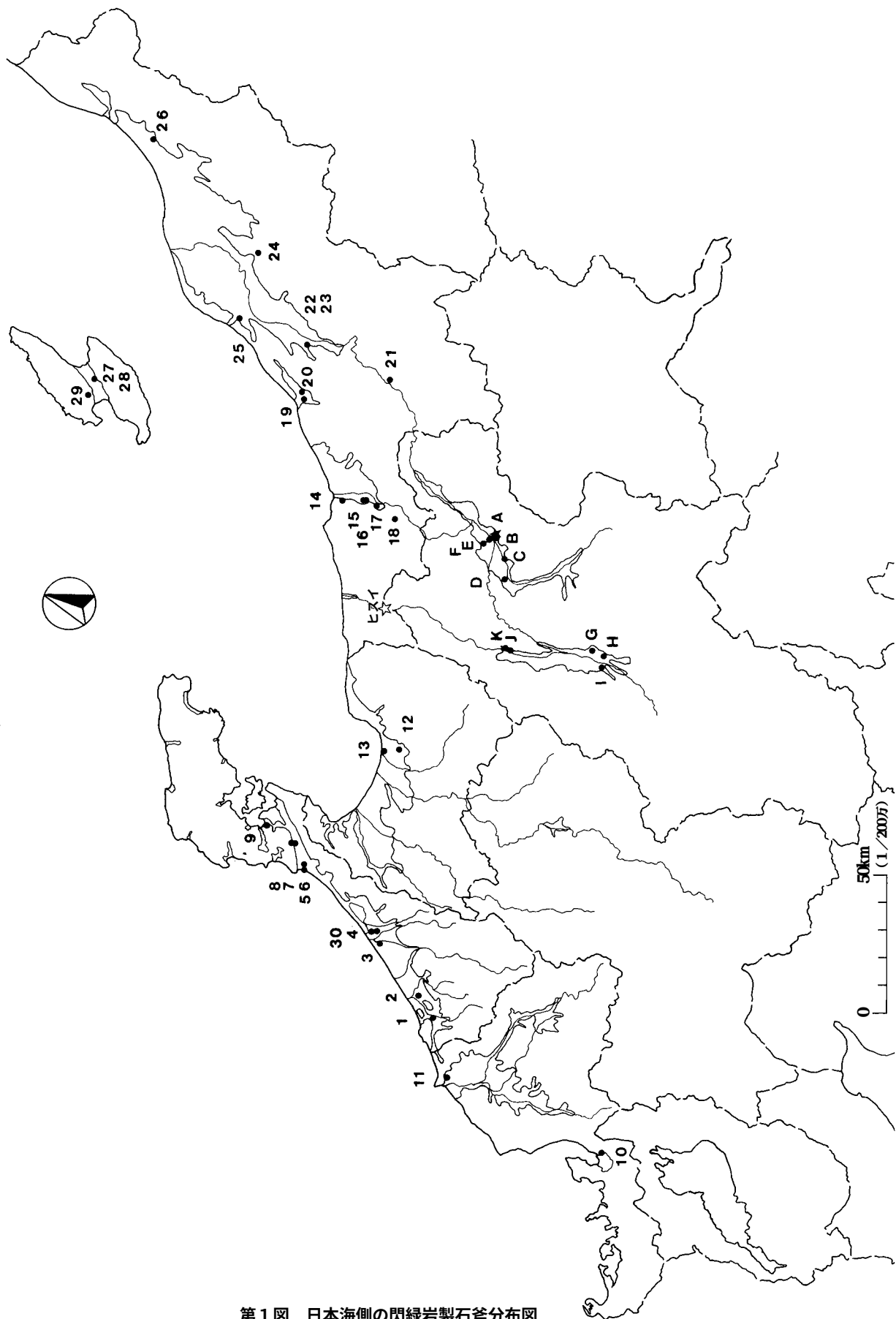
加賀市猫橋遺跡を報告するにあたり、色々な研究視点があることが判明した。しかし、筆者の力量不足や時間・ページの関係などで報告できなかったものが多くあった。一部は穴口遺跡の報告書で「多角形柱建物の覚書」を掲載することができた。猫橋遺跡の報告書としての不備を補うために今後石川県埋蔵文化財情報誌などで紹介していきたい。ここでは長野県善光寺平で製作された緑色岩類製石斧の北陸地方での集成を行い、太型蛤刃石斧と扁平片刃石斧については規格性について、その他の岩類製石斧との検討を行う。また、猫橋遺跡の後期前半の土器についてのまとめをおこなってみたい。

2. 北陸地方における緑色岩類製石斧について

緑色岩類の石斧は、転石を原材料とした原産地直下の長野市榎田遺跡（第1図A）において製作（町田ほか1999）されており、緑色岩類は火成岩類に属しており、肉眼鑑定では「閃緑岩」と「輝緑岩」に大別され、偏光顕微鏡鑑定では「輝緑岩」「玄武岩」となっている。また、「輝緑岩」「玄武岩」を町田ほか1999第2分冊第62図では輝緑岩・玄武岩の下に（輝緑凝灰岩）記載されており、肉眼観察で「閃緑岩」「閃緑岩」「玄武岩」「輝緑凝灰岩」と分類される石斧は、長野市周辺で製作された可能性を強く意識する必要がある。その理由として、肉眼観察では石材の認定には、組織差、個人差が大きいため、同じ石材でも違う名称で呼ばれることが多いからである。今回の集成をした際には、現物で確認することを中心にして、出来ない資料は写真により形式学的特徴と石材的特徴（通称ゴマシオ、馬場氏教示）を元に資料を集成した。よって榎田型磨製石斧（馬場2001）の中で閃緑岩製だけに限定したことを断って置く。

加賀市猫橋遺跡・小松市八日市地方遺跡・羽咋市東的場タケノハナ遺跡の石器実測委託を（株）アルカに委託した際に、3遺跡とも善光寺平産の石斧が石川県に運ばれていることが判明した。この成果から石川県内でももっと存在する可能性があり、平成14年春、馬場伸一郎氏と数十分の間に羽咋市吉崎次場遺跡（福島ほか1987）で数点、富山県上市町中小泉遺跡（狩野ほか1983）で馬場氏が写真で1点存在することを確認した。その後、過去の報告書などを再調査した結果10点以上の存在が確認された。これをもとに当センターの平成15年2月環日本海研究集会で玉類との交換材として、長野県方面からは緑色岩類製石斧が持ち込まれたことを想定（久田2003）した。すでに一部では、閃緑岩製石斧として報告（福島ほか1987・中野ほか2001・小西2003）されている。その後北陸地方の弥生時代遺跡の報告書の再調査を行い、また各地の方々の協力により集成したのが第2・3図、第1表である。県内では、浜崎悟司・本田秀生氏、福井県では赤澤徳明・富山正明・仁科章・中原義史氏、新潟県では笹澤正史・品田高志・渡邊朋和・渡邊裕之・土橋由理子・立木宏明・寺崎裕助、長野県では町田勝則・馬場伸一郎氏から未報告・報告資料の提供や教示を得ている。馬場氏は研究者としての多くの教示を得ており、立木氏からは発表予定の新潟県内弥生石器出土遺跡一覧表の提供を受けるなど、両氏には特に感謝している。しかし、新潟県史1983図版732の石斧などは筆者が写真で緑色岩類と判断したものであり、実測図や実物で確認出来ないことから、他の資料に関しても事実誤認があるかもしれない。また資料の集成に関しては、報告書の石材名とは異なるので、出典番号を一覧表に記載したが、閃緑岩石斧と認定した責任はすべて筆者にあることを断っておく。

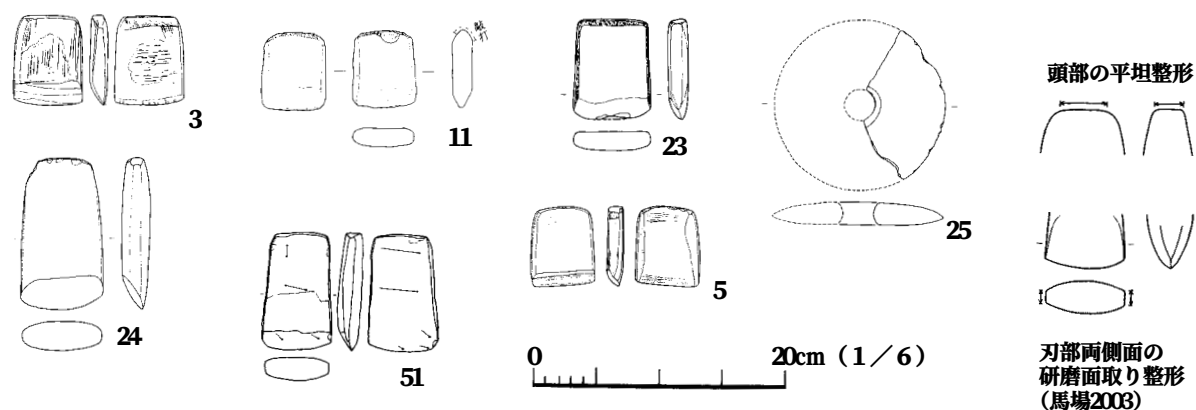
緑色岩類製石斧は榎田遺跡（第1図A）で初期製作されたものを松原(C)・中俣遺跡(D)で製作・



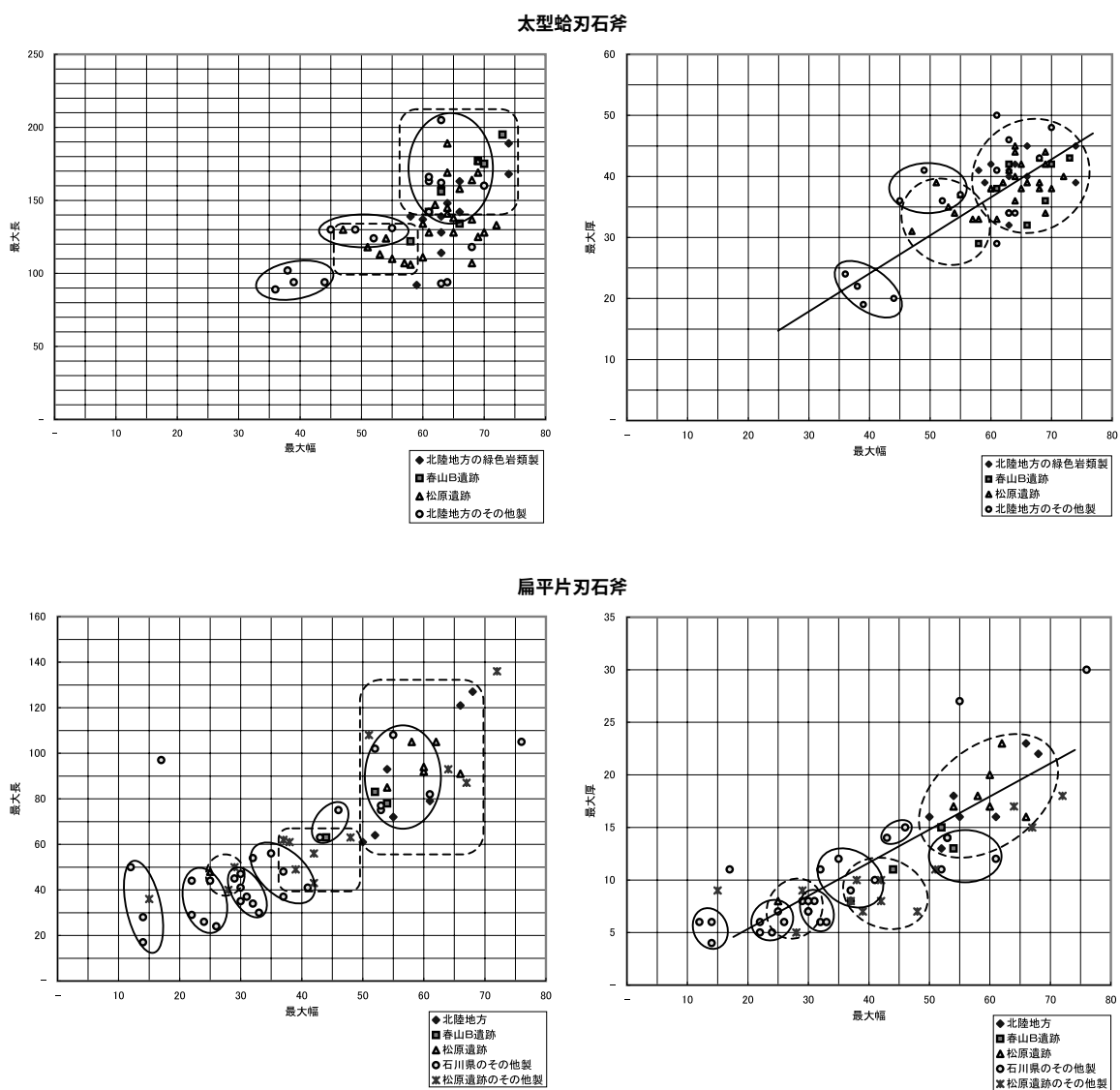
第1図 日本海側の閃緑岩製石斧分布図



第2図 閃緑岩製石斧集成1



第3図 閃緑岩製石斧集成2



第4図 石斧の最大長・幅・厚さの相関図

北陸地方での緑色岩類一覧表

(単位は mm, g)

遺跡	番号	遺跡名	県	市町村	分類	出土遺構	遺 構	時 期	長さ	幅	厚さ	刃部幅	重量		報告書	報告番号	製品比率	備 考	
1	1	猫橋	石川県	加賀市	太型蛤刃	SD16	方形周溝墓	3期後半	163	66	45	59	823		完形	本書		1 / 5	
2	2	八日市地方	石川県	小松市	太型蛤刃	河道	自然河道	中期後半	66	68	45				刃部欠損	県今年度報告			
2	3	八日市地方	石川県	小松市	扁平片刃	河道	自然河道	中期後半	72	55	16				完形	県今年度報告			
2	4	八日市地方	石川県	小松市	太型蛤刃														市調査、町田氏教示
2	5	八日市地方	石川県	小松市	扁平片刃														市調査、町田氏教示
3	6	上安原	石川県	金沢市	太型蛤刃	SD110	自然河道	中期後半	111	67	38		445		刃部欠損	小西2003	第155図1008	1 / 5	頭部を敲打石に転用
4	7	西念南新保	石川県	金沢市	太型蛤刃	不明			76	56	39		302		刃部欠損	宮本ほか1983	第29図 6	1 / 16	
4	8	西念南新保	石川県	金沢市	太型蛤刃	B 1 区 T 1 溝			49	65	39		190		刃・基部欠損	宮本ほか1983	第62図 2	1 / 16	
4	9	西念南新保	石川県	金沢市	太型蛤刃	L 区表土			76	65	34	61	334		基部欠損	楠ほか1992	第186図72	1 / 16	
4	10	西念南新保	石川県	金沢市	太型蛤刃	M 区包含層			131	80	44		774		刃・基部欠損	楠ほか1992	第186図73	1 / 16	
4	11	西念南新保	石川県	金沢市	扁平片刃	P 区 SD21		古代	61	50	16	44	135		完形	楠ほか1996	第205図27	1 / 16	
30	12	南新保 C	石川県	金沢市	太型蛤刃	SD03	自然河道	2～5期後半	103	66	39		433		基部欠損	伊藤ほか2002	Fig. 103-17		
5	13	東の場タケノハナ	石川県	羽咋市	太型蛤刃	不明		3～4期	130	68	42		582		刃部欠損	県今年度報告			ベンガラ・朱精製に使用
6	14	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	J 7 区	包含層		129	66	41	62	616		刃部若干欠損	福島ほか1987	第117図 2	1 / 90	刃部を敲打石に転用
6	15	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	J 区12区	包含層		74	59	40	55	275			福島ほか1987	第117図 4	1 / 90	刃部は潰れ、側面面取
6	16	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	I 区	I 3 溝		55	57	34		104		刃部のみ	福島ほか1987	第117図 7	1 / 90	
6	17	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	W 6 区	包含層		59	50	41		179		刃部付近	福島ほか1987	未報告	1 / 90	
6	18	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	W 4 区	包含層		46	27	30		44		刃部 1 / 3	福島ほか1987	未報告	1 / 90	
6	19	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	N 2 号土坑		2期前半	57	52	48		168		胴部破片	福島ほか1987	第120図41	1 / 90	
6	20	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	I 区	I 4 溝		39	64	39		206		刃・基部欠損	福島ほか1987	第120図45	1 / 90	両側面敲打石に転用
6	21	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	W 2 区	包含層		101	64	40		462		刃部欠損	福島ほか1987	第118図25	1 / 90	頭部研磨面微量あり
6	22	吉崎次場	石川県	羽咋市	太型蛤刃	H 5 区	溝		74	56	34		243		刃部欠損	福島ほか1987	第119図26	1 / 90	頭部研磨面あり
6	23	吉崎次場	石川県	羽咋市	扁平片刃	J 1 区	包含層		79	61	16	61	171		ほぼ完形	福島ほか1987	第121図54	1 / 11	刃部刃こぼれ
6	24	吉崎次場	石川県	羽咋市	扁平片刃	J 区 6 区	包含層		121	66	23	64	328		完形	福島ほか1987	第120図50	1 / 11	
6	25	吉崎次場	石川県	羽咋市	環状石器	W 1 区	包含層		径135		18		168		約 1 / 3 強存在	福島ほか1987	第121図58	1 / 2	ベンガラ精製に使用か
7	26	谷内ブンギャチ	石川県	鹿西町	太型蛤刃	トレンチ		3～4期	112	61	36		464		刃部欠損	栃木ほか1995	第133図 1	1 / 3	頭部研磨面あり
8	27	杉谷チャノバタケ	石川県	鹿西町	太型蛤刃	中段下斜面	包含層	3～4期	168	74	45	72	1003		完形	栃木ほか1995	第244図142	1 / 6	頭部研磨面あり
9	28	三引	石川県	田鶴浜町	太型蛤刃	11区	SD01		189	74	65	72			完形	湊屋ほか2003	第84図 3		
10	30	舞崎	福井県	敦賀市	太型蛤刃	石斧埋納坑		4期	114	63	39		562		完形	中野ほか2001	第37図図 3	1 / 6	26と1点が土坑に埋納
10	29	舞崎	福井県	敦賀市	太型蛤刃	石斧埋納坑		4期	92	59	39		365		完形	中野ほか2001	第37図図 3	1 / 6	25と1点が土坑に埋納
11	31	下屋敷	福井県	三国町	扁平片刃			2末～3初	127	68	22	64			完形	福井県博2000	22頁写真12		未報告、後主面は凸
12	32	中小泉	富山県	上市町	太型蛤刃	SD46		中期後半	78	63	41	60			基部欠損	狩野ほか1982	図版24-1		欠損面を敲打石に転用
13	33	魚舁	富山県	滑川市	太型蛤刃			3～4期	124	66	36	62			基部欠損	橋本ほか1973	第16図 1	1 / 4	
13	34	魚舁	富山県	滑川市	太型蛤刃			3～4期	81	36	32				刃部破片	橋本ほか1973	第16図 2	1 / 4	
14	35	裏山	新潟県	上越市	太型蛤刃	主丘頂上			128	63	32	62	333		完形	加藤ほか2000	図版72-184		刃部刃こぼれ
15	36	吹上	新潟県	上越市	太型蛤刃			3～4期							刃部欠損	笹沢ほか2002	図22左側		全体で約20点弱出土
15	37	吹上	新潟県	上越市	太型蛤刃			3～4期							基部欠損	笹沢ほか2002	図22左側		笹沢氏教示
15	38	吹上	新潟県	上越市	扁平片刃			3～4期							基部欠損	笹沢ほか2002	図22左側		
16	39	稲荷牛ヶ首	新潟県	上越市	太型蛤刃											県史1983	図版732-7		
17	40	籠町	新潟県	新井市	太型蛤刃											県史1983	図版732-4		
18	41	片貝松ノ木田	新潟県	中郷村	太型蛤刃											県史1983	図版732-8		
19	42	箕輪	新潟県	柏崎市	太型蛤刃	98SK20	多角形柱建物	3後～4期	139	63	41	63	659		完形	小野塚ほか2002	図版24-89		頭部には敲打痕を残す
20	43	関野	新潟県	柏崎市	太型蛤刃				137	60	42	42			完形	宇佐美ほか1987	第284図78		頭部研磨面あり
21	44	城之古	新潟県	十日町市	太型蛤刃										完形	県史1983	図版732-9		
21	45	城之古	新潟県	十日町市	扁平片刃										完形	県史1983	図版732-5		
22	46	山ノ家	新潟県	越路町	太型蛤刃														立木氏教示
23	47	前郷	新潟県	越路町	太型蛤刃														立木氏教示
24	48	川向	新潟県	加茂市	太型蛤刃	採集品			139	58	41	50	633		完形	立木ほか2001	図 5-1		刃部刃こぼれ
24	49	川向	新潟県	加茂市	太型蛤刃	採集品			142	66	40	62	606		完形	立木ほか2001	図 5-2		
25	50	大武	新潟県	和島村	太型蛤刃				148	64	42	62			刃部欠損	春日ほか1977	第 3 図20		
25	51	大武	新潟県	和島村	扁平片刃				93	54	18	50			完形	春日ほか1977	第 3 図21		
26	52	乙	新潟県	中条町	太型蛤刃											県史1983	図版732-10		
27	53	平田	新潟県	新穂村	太型蛤刃	SB115	住居	3後～4期	88	58	36		329		刃部欠損	田海ほか2000	図版95-276		頭部を敲打石に転用
27	54	平田	新潟県	新穂村	扁平片刃	SB115		3後～4期	64	52	13	48	94		完形	田海ほか2000	図版95-273		後主面が凸
28	55	新穂玉作	新潟県	新穂村															立木氏教示
29	56	藤津	新潟県	金井町												県史1983	図版732-3		

搬出が想定(町田2001)されており、春山B遺跡(B)でも生産しているようである。榎田型太型蛤刃石斧の特徴は、頭部の平坦整形・刃部両側面の研磨面取り整形が特徴(馬場2003、第3図右)であり、仕上がり目標値が最大長170~210mm、最大幅55~70mm、最大厚30~45mmであるという。平面形態は、ほぼ中央に最大幅を持つもので矩形(A類)、刃部に最大幅を持つもので基部の尖る二等辺三角形(B類)、刃部に最大幅を持つもので台形(C類)があるという(町田1999)。

緑色岩類太型蛤刃石斧は、特徴から榎田型磨製石斧と呼ばれ、太平洋側では、すでに集成(馬場2001)されており、今回日本海側での集成を試みた。福井県では2遺跡3個体確認され、敦賀市舞崎遺跡(第1図10)では丘陵上の竪穴式住居周辺の土坑に3点の太型蛤刃石斧が埋納され、その2点が閃緑岩製(中野ほか2001)である。29・30はその側面形状から研ぎ直しが想定され、第4図左上からも伺える。三国町加戸下屋敷遺跡(11)では扁平片刃石斧(福井県立博物館2000)が出土しており、両遺跡とも栗林式土器の出土は未確認(赤澤・富山氏教示)である。石川県内では栗林式土器は1980年代後半から報告例が多くなり、80年代は6遺跡(久田1991)、90年代は12遺跡(久田1999)であった。現在は金沢市内や能登地方は中期後半の遺跡で有れば必ずと言って良いほど栗林式土器が出土する。しかし、加賀市猫橋遺跡(1)・金沢市上安原遺跡(3、小西2003)・田鶴浜町三引遺跡(9、湊屋ほか2003)では栗林式土器の出土は確認されていない。南加賀地方では、2遺跡5点確認され、小松市八日市地方遺跡(2)では太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧各2点(市調査で各1点出土=町田勝則氏確認・教示、当センター今年度報告で各1点=浜崎悟司氏教示)である。北加賀地方では、3遺跡7点が確認され、西念南新保遺跡(4)で5点(太型蛤刃石斧4点、扁平片刃石斧1点)出土している。能登地方では5遺跡16点が確認され、吉崎次場遺跡(6)では12点と多く出土し、太型蛤刃石斧9点、扁平片刃石斧2点、環状石器1点である。なお、閃緑岩ではないので集成から除外した杉谷チャノバタケ遺跡(栃木ほか1995)第244図CS144も緑色岩類製石斧の可能性が高いことが馬場氏の観察で判明したので、能登地方では17点出土となった。富山県では2遺跡3点確認し、新潟県では16遺跡40点以上を確認したが、新潟県内では、地理的關係で遺跡数や個体数はもっと多いものと思われる。特に上越市吹上遺跡(15)では30点弱確認(笹澤正史氏教示)されており、その出土量の多さは他地域に搬出された量(馬場2001)では最大である。日本海側への搬入ルートは新潟県中越・下越地方へは、信濃川ルートであり、上越地方では関川ルートが基本であり、吹上遺跡が重要な位置を占めている。また吹上遺跡では、地理的理由以外にヒスイ製勾玉を主体として管玉などの玉類の生産による広範囲の流通システム(笹澤ほか2002)が確認され、善光寺平方面では緑色岩類製石斧(30点弱)が交換品であったようである。松本平の南側には松本市境窪遺跡(I、3期前半4点大田ほか1998)、県町遺跡(G、8点町田1999)、百瀬遺跡(H、4点大田2001)などがあり、木曽川・天竜川へのルートの入り口にあたり、その分岐点での出土が認められる。また北側の大町市では来見原遺跡(K、2~4期1点島田ほか1988写真48)、中城原遺跡(J、5点島田ほか1992)の太型蛤刃石斧が確認された。また来見原遺跡では、2期末~3期初頭の北陸地方沿岸部製の壺(久田1999)が出土しており、観察メモが行方不明であったために言及しかなかった(久田1998)が、その後メモが確認され、海面骨針が胎土に入っていることが判明した。この土器は姫川を經由して運ばれたものであり、このルートはヒスイ鉱床へのルートでもある。

石川県では、八日市地方遺跡、西念南新保遺跡、吉崎次場遺跡で4~12点の出土が確認された。八日市地方遺跡は多量の管玉・木製品を生産している遺跡であり、大規模拠点集落ないし弥生都市(小松市教育委員会編2002)とされ、栗林式土器も多く出土し、搬入品や在地・北加賀地方での模倣品が存在(福海ほか2003)するという。八日市地方遺跡はまだ整理作業中であるので、榎田型磨製石斧と

栗林式土器の出土量は今後増えるものと思われる。西念南新保遺跡は金沢市内では中核的な環濠集落であり、栗林式土器も多く出土している。吉崎次場遺跡は勾玉・管玉・木器・石器を生産しており、後期には青銅器も生産が確認（林2000）された拠点集落（安2001）である。では閃緑岩製石器は5点出土（福島ほか1987）し、数km離れた眉丈山塊に片麻岩・閃緑岩が分布することから地元産の確立が高い（藤1988）とされた。再調査を行うと12点の閃緑岩製石器が確認され、現状では吹上遺跡に次ぐ多さである。閃緑岩製磨製石斧の未製品が確認されないことから、搬入である可能性が安藤広道氏により指摘（安藤1997）されていた。今回ようやく吉崎次場遺跡の再調査を行い、その結果磨製石斧は90点の破片を確認し、閃緑岩製石器は12点を数えた。閃緑岩の剥片や未製品も確認されないの、やはり長野県地方から搬入されたものと思われる。ためしに、当センターのエネルギー分散型蛍光X線元素分析装置 MESA-500S（堀場製作所製）で石斧の分析を行ってみた。第2図1・13・14ではカリウムが1%未満であり、吉崎次場遺跡の他の石材（緑色の石斧製作剥片、緑色の石斧未成品、斑晶入り安山岩）ではカリウムが6～8%という結果が出た。厳密な分析ではないが、今後蛍光X線分析でも違いが出せる可能性を指摘しておく程度にとどめておく。

第2図19はⅡ期初頭であり、今後長野県内での大型蛤刃製作の開始時期や流通過程の再検討を行う必要となる石斧である。しかし、松本市石行遺跡（設楽1995）、羽咋市吉崎次場遺跡では朝鮮式磨製石剣（羽咋市教育委員会調査、未報告資料）が出土しており、大陸系文物が北陸を經由して長野県へ入った（設楽1995）ようであり、北陸地方が大陸系文物の長野県側への流入経路の1つである。

さて、榎田型磨製石斧は町田・馬場氏により論考が多く出されており、それを元に北陸地方出土の閃緑岩製石斧のみについて検討してみたい。閃緑岩に限定したことは、写真により認定しやすいこと、玄武岩系などでは地元産で有った場合に判断が付きにくいからである。まず大型蛤刃石斧をみてみたい。第4図1・2では幅50～75mmに春山B・松原遺跡（馬場2003の計測値を使用）の石斧が集中しており、北陸地方の閃緑岩製と石川県内その他岩製もその範囲に集中する。春山B・松原遺跡の最大厚は30～45mmに集中し、北陸地方の閃緑岩製と石川県内のその他岩製もその範囲に集中しており、榎田型大型蛤刃石斧の規格性（最大長170～210mm、最大幅55～70mm前後、最大厚30～45mm馬場2003）は石川県内でも伺え、目標値として設定できそうである。しかし、長さについては研ぎ直しによる減りや未成品との関係を考慮しなければならず、今回は検討外とした。また、最大幅45～60mm弱・最大厚30～40mm前後に松原遺跡と石川県内その他岩製のまとまりがあり、県内では大型蛤刃石斧の小型に分類（木田1999）されている。これとは別に石川県内のその他岩製は最大幅・厚35～45cmの一群があり、これ以外にもより小型の一群が存在し、縄文系の定角式石斧（木田1999）とされている。しかし、小型の2群は縄文からの石斧が寝強く残るというよりも、使用目的の違いにより形態が同じであると判断したい。

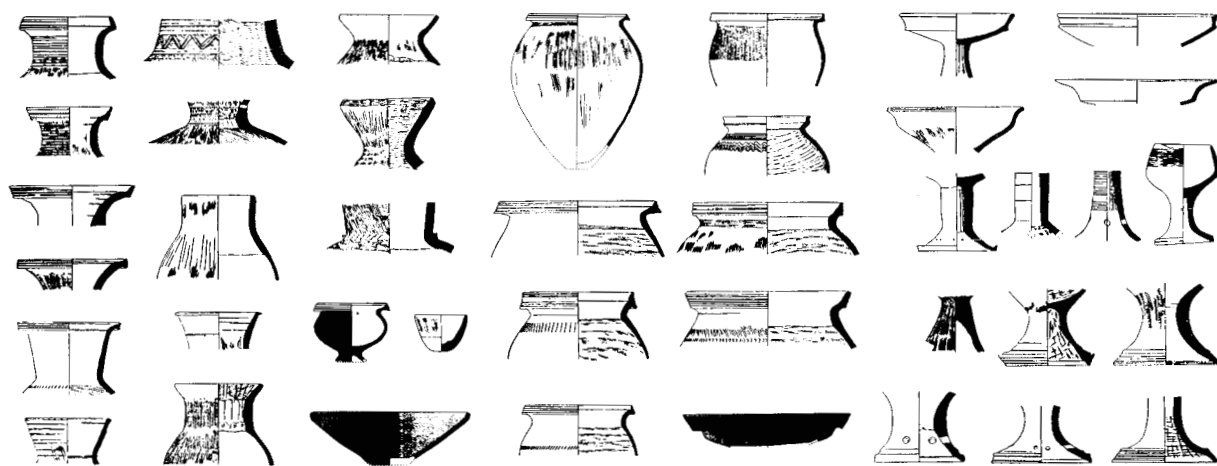
次に閃緑岩製の扁平片刃石斧（第4図下段）をみてみたい。春山B・松原遺跡・北陸地方出土閃緑岩製は最大長60mm以上であり、使用減を考えると長いものが多い。また、最大幅は50～70mm前後、最大厚は13mm以上が殆どであり、幅広で厚いという規格性があり、小サイズは少ない。松原遺跡でのその他岩製は閃緑岩製の規格に入るものもあるが、やや薄いものが多い。また閃緑岩製の規格性に属さない小型（最大長62mm、最大幅50mm、最大厚12mm以下）が多く、3つの小グループが確認される。

石川県内のその他岩製は、閃緑岩製の分布域に入るものがある。その他岩製は、大型（最大長60mm、最大幅43mm、最大厚11mm以上）と小型（最大長60mm、最大幅41mm、最大厚12mm以下）に分かれ、各々小グループに分かれる。扁平片刃石斧は木田1999によって3タイプが存在することがすでに指摘されている。ここでは長さに関しては使用減りも考慮しなければならないので除外して、最大幅と最大厚

の関係に注目してみたい。最大長60mm、最大幅40mm前後の小型では、最大幅15mm前後・最大厚さ5mm程度のノミ状のものがある。同じ幅・厚さで長さが10cm程度の金沢市藤江B遺跡（滝川ほか2001）のものは、大型品が破損したものを再利用した可能性を想定しておきたい。次に最大幅24mm前後・最大厚7mm前後のものと最大幅30mm前後・最大厚7mm前後のものが存在するが、あえてグループ分けしないほうが良いのかもしれない。次は最大幅37mm前後・最大厚10mm前後が存在する。大型はグループが明確ではないが、最大幅45mm前後・最大厚15mmが存在し、最大幅50～60mm前後・最大厚13mm前後が存在する。石川では扁平片刃石斧の規格性は大きく5～6つ、長野県内の扁平片刃石斧は大きく4つの規格性があるものと思われ、両者は共通する部分も多いので、用途に合わせた一般的規格が存在した可能性があろう。厚さに関しては、両県のその他岩製は、厚みが薄いものに多く見られることから、最大厚を意識して石材を選択している可能性がある。

3. 後期の土器について

猫橋遺跡は、後期前半の標識遺跡であり、河道資料（第5図上段）で猫橋式土器の図面が提示された（浜岡1964・68）。しかし、未だに後期前半は発掘調査や資料の少なさからその実態が解明できないのが現状である。猫橋遺跡では、ほ場整備事業に伴う狭い範囲の調査であるが、本田1997・98などの調査で資料が蓄積したことにより、後期前半の土器について簡単にまとめてみたい。第5～7図がまとまった土器のセットが確認される遺構などである。しかし、河道資料（第6図）などが多く、混在が多いのが現状である。その中で資料的な偏りがあるが、94年1号土坑（第5図下段）・95年第2調査区1号土坑（第7図）が比較的古い様相が存在する。断面三角形口縁甕類が主体であり、口唇部は器高に対してハの字状に内傾している。高坏は短い口縁部を持つものであり、凹線文を持つものや口唇部を面取りするものが確認される。八日市地方遺跡iv層出土土器（福海ほか2003）がまとまっているが、新相にあたるのであろう。次の段階は01年SI01・03などであり、平面梯川遺跡（浜崎ほか1995・川畑ほか2000）の主体的な時期であり、中葉が設定（浜崎ほか1995）されている。また一針B遺跡C区SI01（荒木ほか2002）も当期と思われ、北加賀地方では、西念南新保遺跡2－3・4期（楠ほか1996）にあたるものと思われる。断面三角形口縁甕は口唇部が器高に対して平行となっているものが多い。また短い有段口縁甕が存在し、外観だけでは区別がつかないものもある。またやや長めの有段口縁甕が存在するが、比率は前2者と比べると少ない。中には第7図01年SI04—上段中央①、有段口縁甕のように胴部下半に縦ミガキをするものがあり、西日本に系譜を求めざるを得ない。他地域では備前V－4様式、因幡・伯耆V－2様式、出雲・隠岐V－2様式まで縦ミガキの類例は存在（正岡ほか1992）するが、北陸地方ではこの甕（猫橋遺跡第29図90）が下限である。ではこの甕は単独や溝での出土では、法仏式甕と認識される甕であるが、共伴した壺や高坏（第7図右中央②）は法仏式までは下らないものである。高坏は短い口縁部を持ち、あまり外傾しないものであり、半環状把手をもつ丹後系高坏である。脚部は低く直線的に伸びて、端部をナデて少し上側に面取りする。しかし、脚端部は丹後のように折り返したりはしない。この高坏は丹後後期Ⅱ期に併行すると思われるが、Ⅲ期（野々口1999）まで存在する。また、丹後後期Ⅲ期に出現する擬凹線を施す広口壺はSI03周辺溝に出土（第6図）しており、同じ丹後系高坏が出土している。SI03はSI03周辺溝に切られており、95年2号溝では断面三角形口縁甕が存在するが、SI03周辺溝では、断面三角形甕が見られないことや有段口縁甕が存在するので確かに新しい要素が認められる。またSI04の有段口縁甕も新しい要素である。しかし、高坏には時間差を認めるのは難しく、SI03周辺溝はSI03の付属溝（排水溝）の可能性も高いために、現状ではあえて細分することは行わないでおくが、資料の蓄積を待って細分可能かどうかを判断したい。肩部に刺突文を持つ壺は因幡・伯耆V－2様式の系譜を引くものであり、山陰

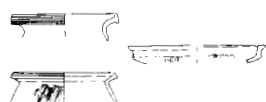


昭和38年調査



立会調査

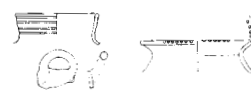
(1/12)



94年1号土坑



94年2号土坑



その他

第5図 猫橋遺跡の後期土器 1

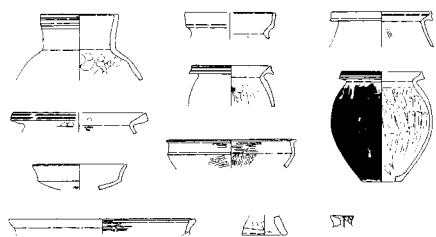
地方の影響であろう。

4. おわりに

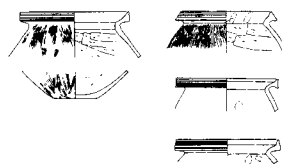
緑色岩類石斧の日本海側の流通は、中期初頭に遡る可能性を指摘したが、長野県内ではまだその可能性は確認されていない。しかし、新潟県上越市吹上遺跡の調査結果では、3期前半の緑色岩類製石斧が存在すれば、時間的ギャップを埋めることが出来るので詳細な報告を期待したい。後期前葉～中葉に関しては基準資料・一括資料の少なさと筆者の力量不足の関係で図の提示だけに終わってしまった。しかし、南加賀地方では中期の八日市地方遺跡、後期中葉の平面梯川遺跡、後期後半以降の漆町遺跡（田嶋1986）が存在するので、今後南加賀地方での体系的編年を行うことが可能であり、若い研究者に期待したい。事実誤認などもあると思われるが、南加賀地方の後期編年の捨石にでもなれば幸いである。



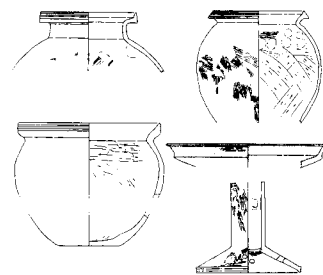
第6図 猫橋遺跡の後期土器 2



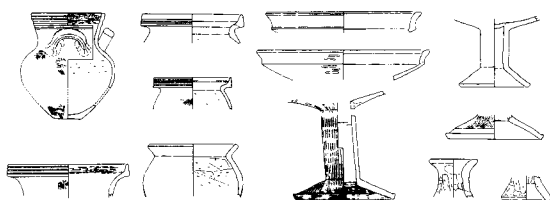
01年 SI01



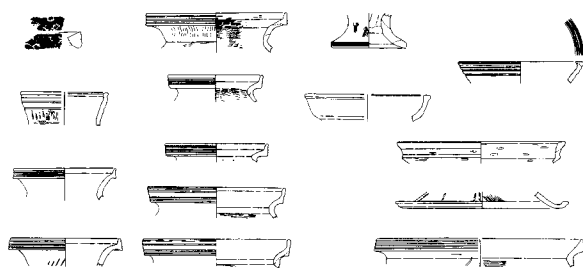
01年 SD02



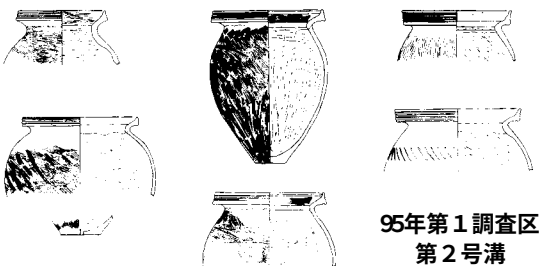
01年 SD02B・20・23



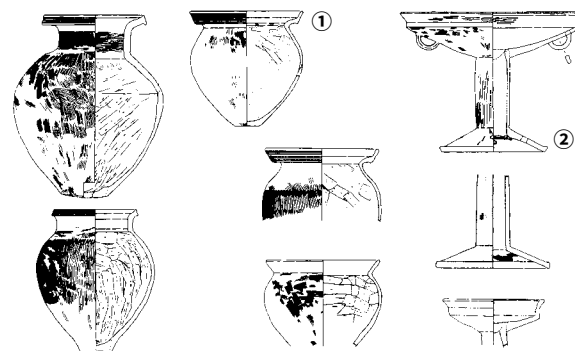
01年 SI03



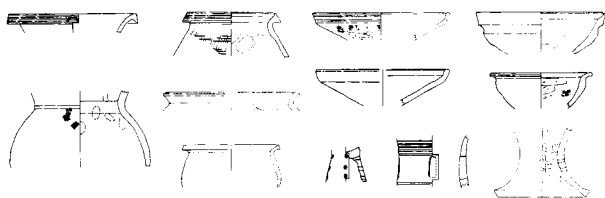
01年 SI03周辺溝群
95年第1調査区第6号溝



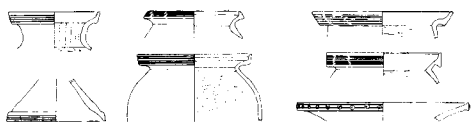
95年第1調査区
第2号溝



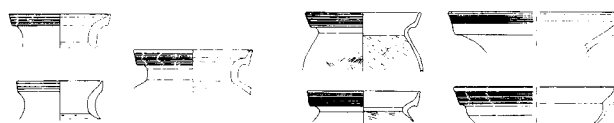
01年 SI04



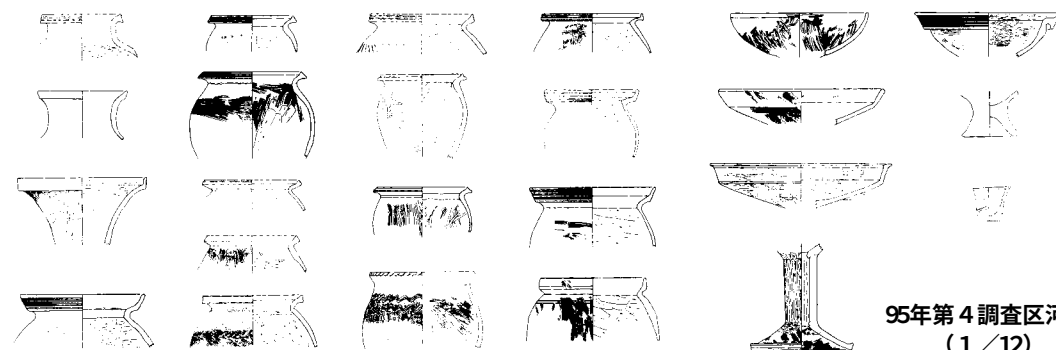
95年第2調査区1号土坑



95年第3調査区10号溝

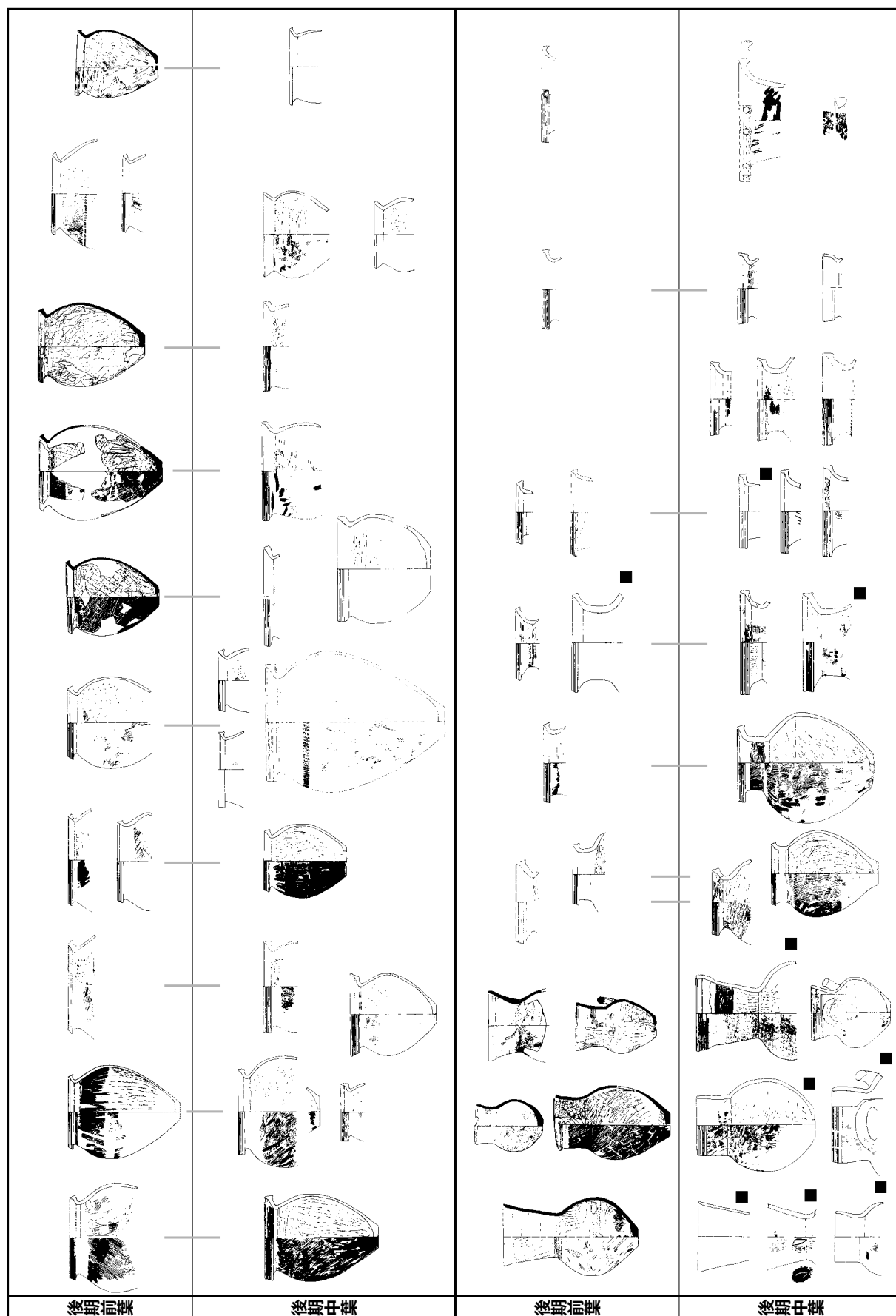


95年第3調査区3号土坑

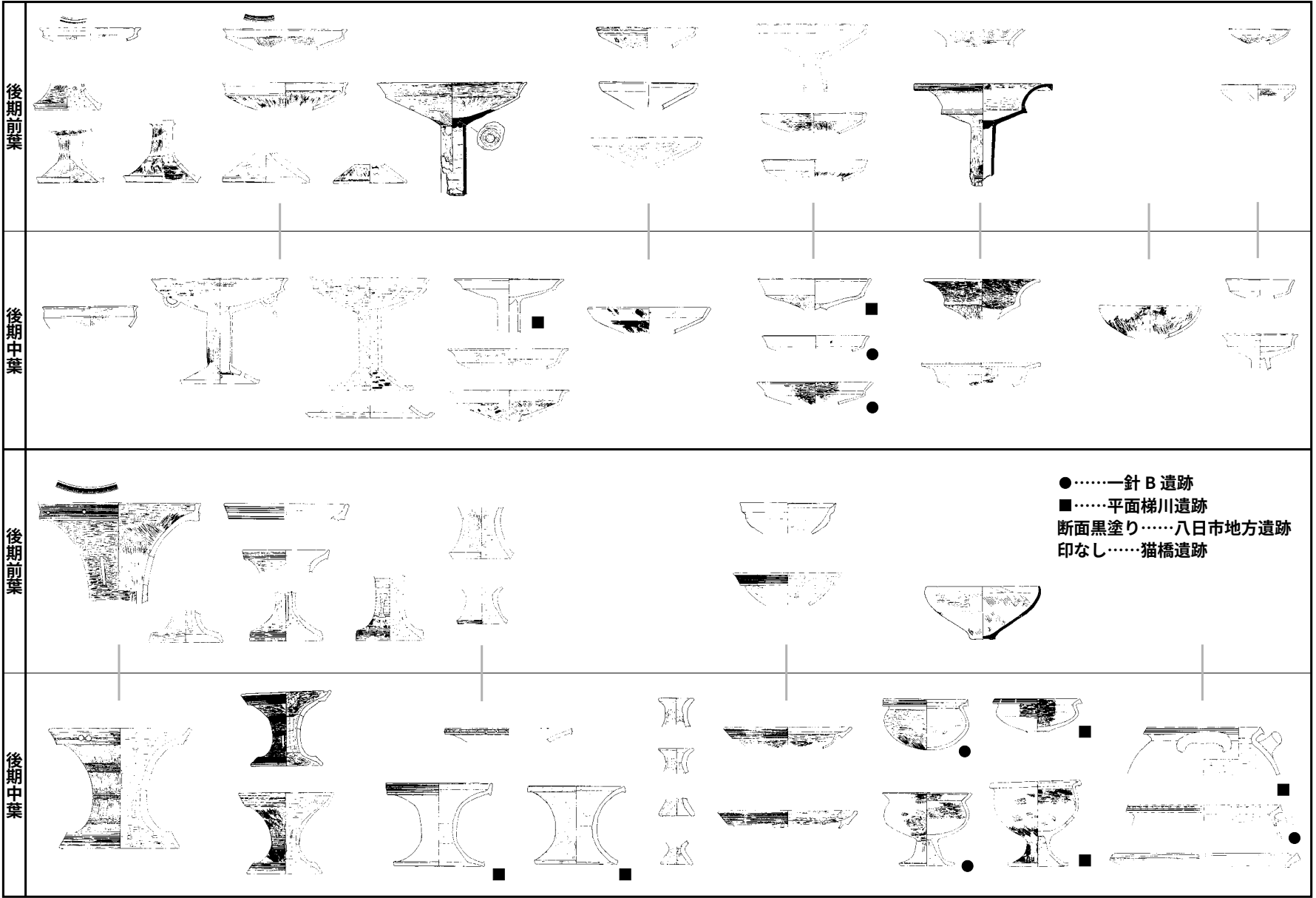


95年第4調査区河道
(1/12)

第7図 猫橋遺跡の後期土器 3



第8図 南加賀地方の後期編年案1



第9図 南加賀地方の後期編年表2

参考文献

- 荒木麻理子ほか 2002 『小松市一針 B 遺跡・一針 C 遺跡』石川県埋蔵文化財センター
 安藤広道 1997 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要第 2 号』横浜市歴史博物館
 石川考古学研究会編 1999 『農工具』
 伊藤雅文ほか 2002 『金沢市南新保 C 遺跡』石川県埋蔵文化財センター
 宇佐美篤美 1987 「関野遺跡」『柏崎市史資料集考古篇 1』柏崎市史編さん委員会
 大田圭都ほか 1998 『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市教育委員会
 大田圭都ほか 2001 『百瀬遺跡Ⅳ』松本市教育委員会
 小野塚徹夫ほか 2002 『箕輪遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査事業団
 春日真実・寺崎裕助 1997 「新潟県三島郡和島村大武遺跡」『日本考古学年報48（1995年度版）』日本考古学協会
 加藤 学ほか 2000 『真山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団
 狩野 睦 1982 「中小泉遺跡」『上市町土器・石器編』上市町教育委員会
 川畑 誠ほか 2000 『小松市平面梯川遺跡―第 2・3 次』石川県埋蔵文化財センター
 木田 清 1999 「磨製石斧」『農工具』石川考古学研究会
 楠 正勝ほか 1992 『西念・南新保遺跡Ⅲ』金沢市教育委員会
 楠 正勝ほか 1996 『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会
 小西昌志 2003 『上安原遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会
 小松市教育委員会編 『北陸における弥生都市 フォーラム成果報告書』
 笹澤正史ほか 2002 『吹上遺跡発掘調査概要報告』上越市教育委員会
 設楽博巳 1995 「相状稿模様のある磨製石剣」『信濃』第47巻 第4号 信濃史学会
 島田哲男ほか 1988 『来見原遺跡Ⅱ』大町市教育委員会
 島田哲男ほか 1992 『中城原』大町市教育委員会
 滝川重徳ほか 2001 『金沢市藤江 B 遺跡Ⅱ』石川県埋蔵文化財センター
 田嶋明人ほか 1986 『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
 立木宏明・小熊博史 2001 「加茂市七谷地区で発見された縄文・弥生時代の遺物」『レポート加茂市史創刊号』加茂市
 田海義正ほか 2000 『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団
 栃木英道ほか 1995 『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
 中野拓郎ほか 2001 『舞崎前山古墳・舞崎遺跡』敦賀市教育委員会
 新潟県 1968 『新潟県史資料編 1 原始・古代一 考古編』
 野島永・野々口陽子 1999 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（1）」『京都府文化財情報第74号』京都府埋蔵文化財調査センター
 橋本 正ほか 1973 『魚野遺跡発掘調査報告書』滑川市教育委員会
 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会（上・下）」『古代文化第53巻第5・6号』古代学協会
 馬場伸一郎 2003 「榎田型磨製石斧の再検討」『埼玉考古第38号』埼玉考古学会
 浜岡賢太郎 1964・68 「北陸地方Ⅰ」『弥生式土器集成 本編』東京堂出版
 浜崎悟司ほか 1995 『平面梯川遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財保存協会
 林 大智 2000 「羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について」『石川県埋蔵文化財情報第3号』石川県埋蔵文化財センター
 久田正弘 1991 「能登における弥生時代中期の一樣相」『石川考古学研究会々誌第34号』石川考古学研究会
 久田正弘 1998 「北陸地方西部の土器の動き」『水遺跡発掘調査資料図譜第三冊』水遺跡発掘調査資料図譜刊行会
 久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌92』長野県考古学会
 久田正弘 2003 「石川県における玉の生産と交流―弥生時代を中心に」『石川県埋蔵文化財情報第10号』石川県埋蔵文化財センター
 福井県立博物館 2000 『埋もれたモノへのまなざし』
 福島正実ほか 1987 『吉崎・次場遺跡第 1 分冊』石川県立埋蔵文化財センター
 藤 則雄 1988 「石器、玉類の石質とその分布」『吉崎・次場遺跡第 2 分冊』石川県立埋蔵文化財センター
 福海貴子ほか 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
 正岡睦夫ほか 1992 『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編』木耳社
 町田勝則ほか 1999 『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
 町田勝則 2001 「弥生石斧の生産と流通に関するモデル試論」『中部弥生時代研究会第 3 回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
 湊屋玲美ほか 2003 『三引遺跡』石川県埋蔵文化財センター
 宮本哲郎ほか 1983 『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会
 安 英樹 2001 「北陸地方における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第 6 号』石川県埋蔵文化財センター

加茂遺跡の祭祀遺構に関する覚書

松尾 実

1. はじめに

石川県河北郡津幡町加茂地内に所在する加茂遺跡では平成14年度第8次調査においてB区・1層（古代相当）掘削中、須恵器杯身が少なくとも4つ重なり、逆さになった状態で出土した。そのなかには「茂」・「与知」の墨書文字等がある。その後、第2検出面で平面形を捉えることができたため、遺構番号 SP1071を付した。また、当該遺構の周囲には建物群があり、その空間的位置にも注目できる。

本稿では、当該資料の出土状況、出土遺物の構成に注目し、空間的位置などを含めてその性格を検討し、古代における多様な祭祀形態の一事例として報告することを目的とする。さらに、当該資料の墨書文字について整理を行い、若干の検討を行う。

なお、当該遺跡の概要や当資料の詳細に関しては、既往報告⁽¹⁾に準拠する。

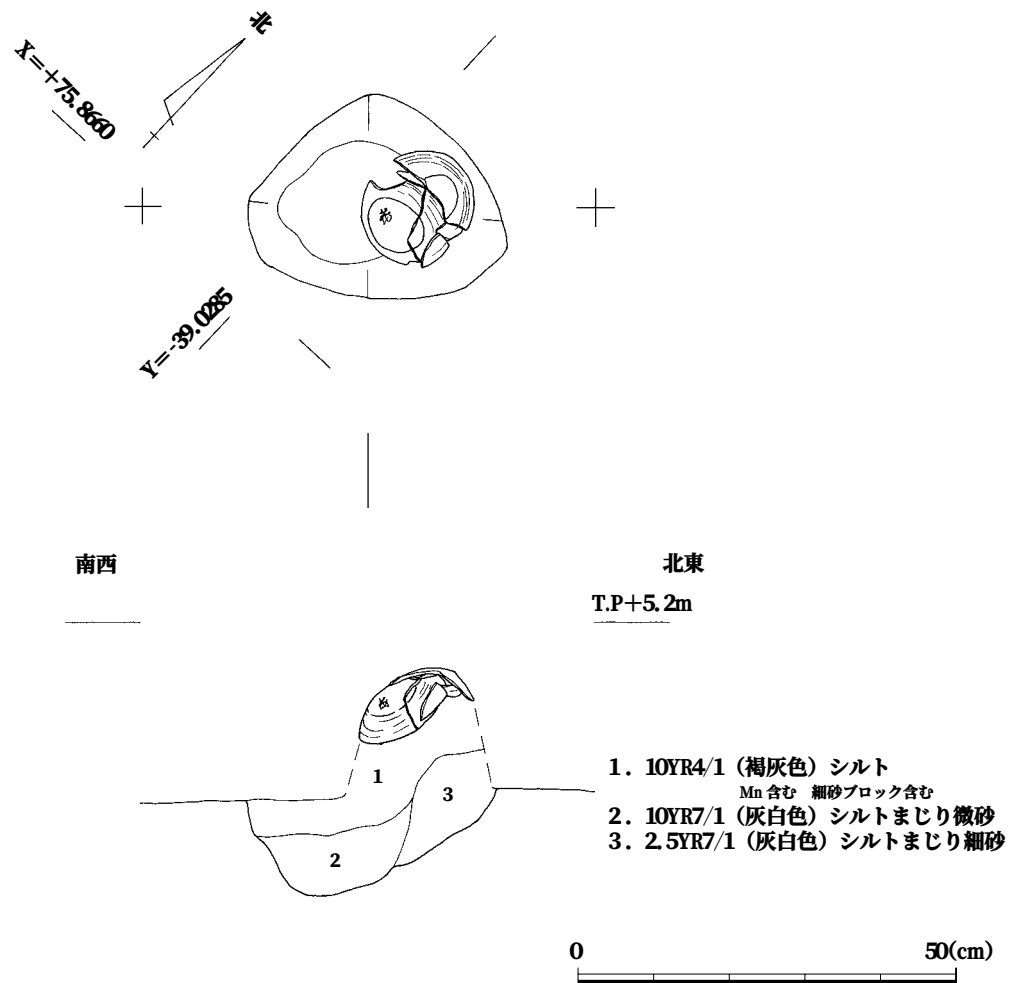


図1 B区第2面 SP1071平面・断面図

2. 遺構 (SP1071) について

(1) 調査成果概要

第1層掘削中に土器がまとまって出土したため、第2検出面で遺構の平面形を確認し、半裁して遺構断面の観察を行った。断面観察では堆積状況から柱穴としての判断が困難⁽²⁾であり、暫定的に性格を小穴として報告する。

遺物は、逆さになった須恵器杯身(片も含む)が少なくとも4つ重なった状況で出土した。上から1つ目は深い杯身の破片である。2つ目は浅い杯身で、外部底面に漆で描かれているが、詳細は不明である。3つ目の深い杯身は体部外面に「与知」と墨書が記されている文字がある。4枚目の浅い杯身は底部外面に「茂」の墨書文字がある。埋める以前は、深い杯身と浅い杯身を順に重ねていたと推定でき、このような特異な組み合わせは人の意図が働いた行為の結果として考えられる。また、遺構の上部は不明だが、出土状況を見ると、それらが逆さにした状態で出土していることは少なくとも人が捨てた現象とは考えがたく、むしろ意図をもって置いたと考えたい。出土土器の構成から見ても、日常的な廃棄や埋置は考え難く、非日常的(祭祀・儀式など)であったと考えられる。

(2) 出土土器

1は須恵器杯身である。高台を有していたと考える。外・内面は回転ナデ。重ね焼き痕跡がある。2は須恵器杯身である。外・内面は回転ナデ。口縁部の外・内面一部に油痕跡がある。また、重ね焼き痕跡がある。底面に回転ヘラ切り痕がある。また、漆書きで何か描かれている。3は須恵器杯身である。高台を有していたと考える。外・内面は回転ナデ。重ね焼き痕跡がある。体部外面に縦位で「与知」と墨書されている。4は須恵器杯身である。外・内面は回転ナデ。底部は回転ヘラ切り後一定方向のナデを行っている。重ね焼き痕跡がある。底部外面には、「茂」と墨書されている。

これら遺物の時期を9世紀後半と推定し、高松・押水窯跡群を生産地と考える⁽³⁾。

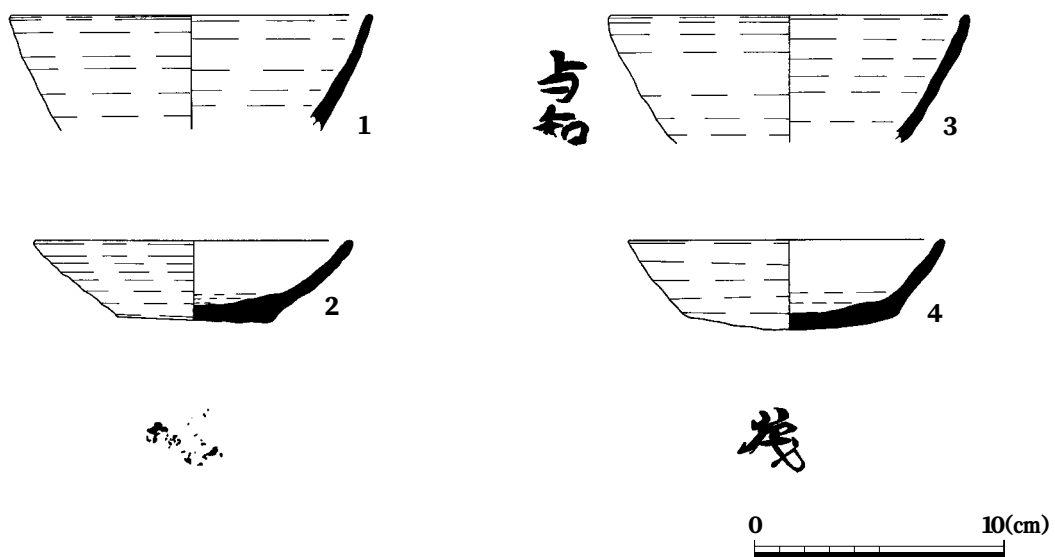


図2 B区 SP1071出土土器実測図

3. 小 結

当該遺構（SP1071）は、少なくとも2回の建て替えが行われた2間×4間の掘立柱建物の南西側にあり、周囲に2間×2間、2間×2間（それ以上の可能性がある）の掘立柱建物が3棟ある空間的位置にある（図5）。そこに小穴を掘った後、少なくとも4つの須恵器を深い杯身と浅い杯身の順に重ね、逆さにして置き、埋めたと考えられることから、当該遺構は非日常的行為、つまり祭祀・儀式行為の現象として捉えることが可能と考える。時期は古代（9世紀後半）である。

また、加茂遺跡の既往調査成果では、大溝から集中的に吉祥句を墨書した土器などが出土しており、水に関連した祭祀が行われたと想定されている⁽⁴⁾。一方、当該資料については掘立柱建物群付近に位置していることから建物や土地に関連した祭祀・儀式が行われたと考える。この類例として平安京右京二条二坊五町における古代（9世紀末～10世紀始め）の祭祀遺構⁽⁵⁾をあげたい。時期は下るが、ここでの祭祀形態は大きく2つの類型に分けられている。すなわち、水や境界に関連した形態と土地や建物に関連した形態であり、加茂遺跡における祭祀形態と類似している。都で行われた祭祀と地方の公的施設で行われた祭祀形態が類似しており、示唆的である。

当時は地震が多く⁽⁶⁾、他に飢饉や疫病などが発生していたと推測できる。また、社会的にも不安定であったと考えられ、当該遺構はそうした災いを避けるために祈った行為の現象と解釈する。当該資料は古代における祭祀の一事例として考えることができ、貴重な例といえよう。

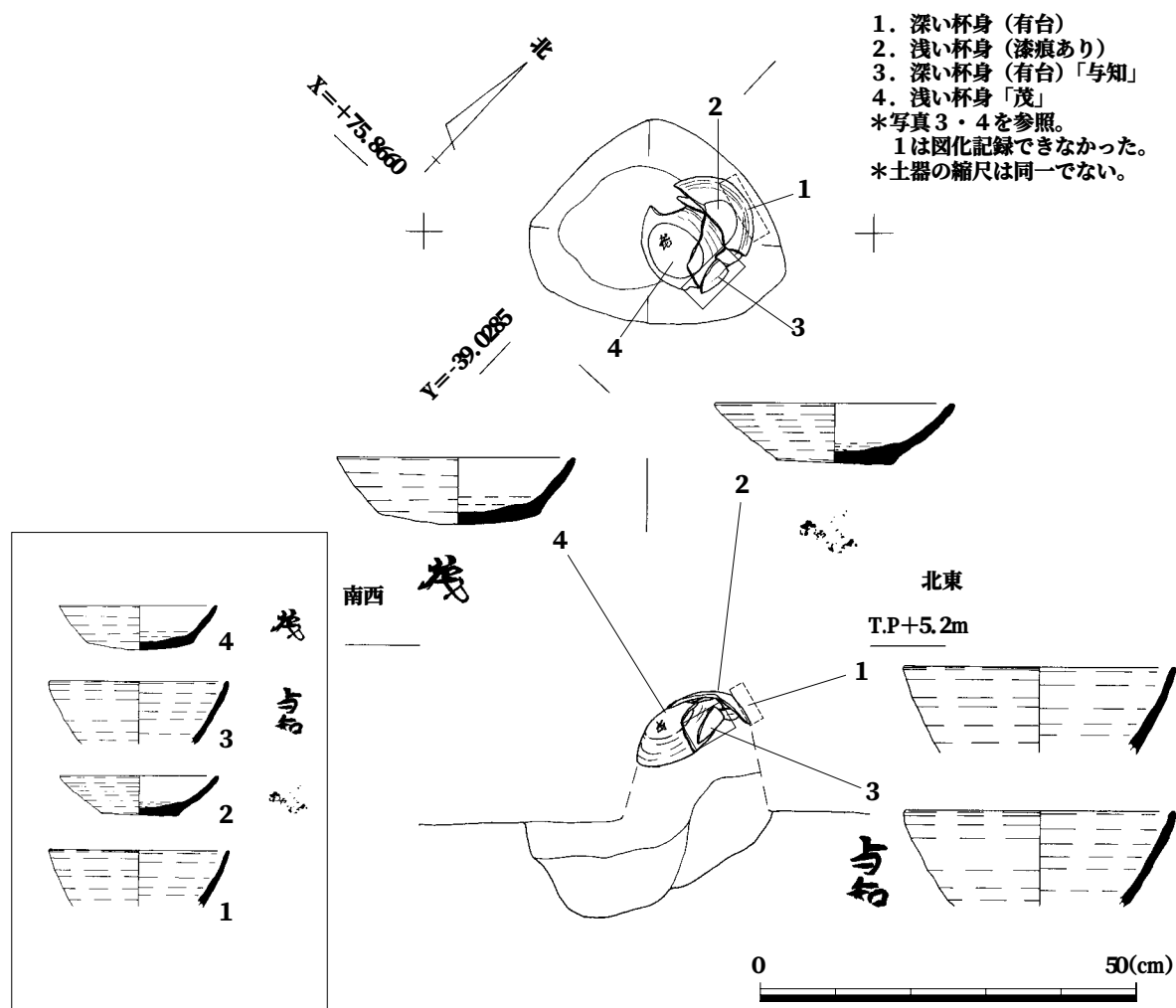


図3 B区第2面 SP1071出土土器内訳図

4. 墨書土器「与知」・「茂」の出土地について

石川県下において「与知」、「茂」が出土している遺跡数は合計3例と決して多くない。さらに供伴して出土している遺跡は本遺跡の1例である。ここでは該当する文字資料が出土した遺跡を個々に紹介したい⁷⁾。

前者では、加茂遺跡第7次で調査されたB区・第1面で検出された遺構（P35）から「与知」と墨書されている須恵器杯身片が出土している（図4）。時期は9世紀後半。この文字資料は、現地点で、石川県下で2例しか見つかっておらず、かつ出土地が近隣にある。

後者では、加茂遺跡既往調査の大溝から墨書土器などと共に「茂」と墨書されている須恵器杯身が3点出土している。時期は9世紀後半～10世紀前半。他には、志雄町杉野屋ろくばわり遺跡のトレンチ内出土で須恵器杯身に「茂」と墨書されている。時期は不明。また、小松市高堂遺跡で

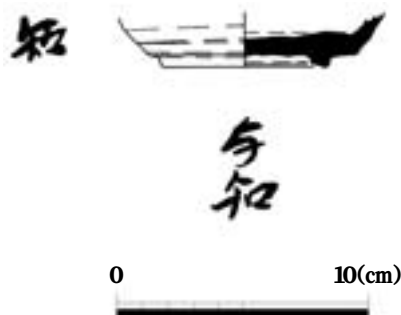


図4 B区第1面 P35出土土器実測図

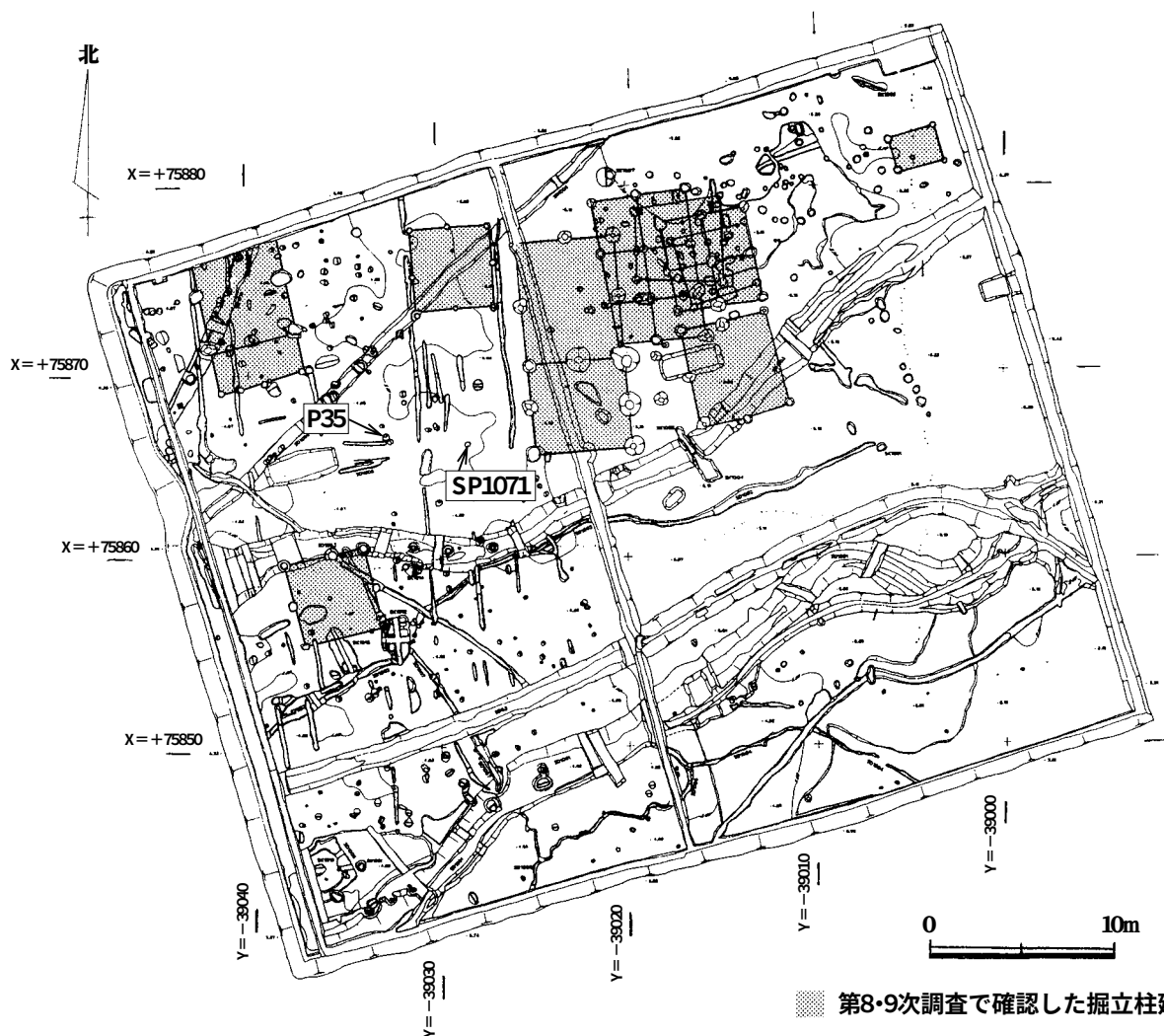


図5 B区・C区第2面平面概略図

は溝から出土しており、須恵器杯蓋に「隆」と共に「茂」と墨書されている。時期は9世紀後半。「茂」の文字資料は、稀少ではあるが、広範囲にわたって分布している事が指摘できる。また、高堂遺跡出土の墨書土器のように吉祥句とされる「隆」と共に「茂」が同一個体に墨書されていることは、「茂」が吉祥句としての蓋然性を示す資料として評価できよう。



写真1 B区・C区第2面全景（北西から）

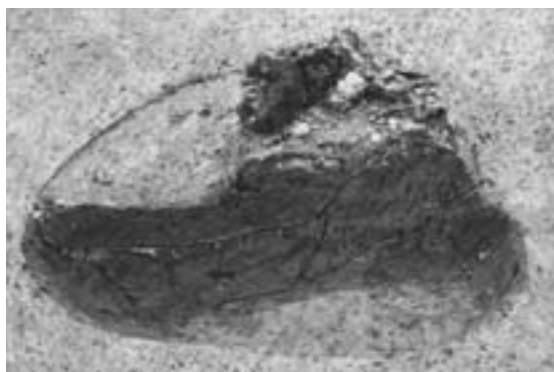


写真2 B区第2面 SP1071断面（南から）



写真3 B区 SP1071土器出土状況（上から）



写真4 B区 SP1071土器出土状況（南から）

5. 墨書文字について

墨書土器の文字には地名・人名・方位等の属性があり⁽⁸⁾、遺構や遺跡の性格を知る手がかりとなる。ここでは、祭祀・儀式関連の遺構（SP1071）から出土した墨書文字「与知」、「茂」について個別に検討を行い整理したい。

まず、「与知」について検討する。これには地名や年齢階梯などを示す見解がある。前者では、加茂遺跡の北東に位置する宇ノ気町余地村⁽⁹⁾（室町時代の文献に「与知村」と表記されている）を比定している。これが正しければ、比定地の地名が古代にまで遡ることになる。また、その地域から人や物が流通していたことを具体的に示すため、古代における当地域での流通の一端を窺うことができよう。しかし、比定地における墨書土器や木簡等での地名を示す資料が見つかっていないため、地名とする証左に欠ける。

一方、後者には7・8世紀での古代社会における年齢集団⁽¹⁰⁾（男15歳～20歳程、女8歳以上の若者世代）を示すという見解がある。仮に年齢階梯層を示す社会的身分としての属性を有するならば、古代村落の社会構造の側面をより具体的に窺うことができる資料といえる。

今回、先述した小松市高堂遺跡出土の墨書土器で「隆」と「茂」が同一個体に書かれていることから、「与知」も吉祥句である可能性を指摘する。

次に、「茂」について考えていきたい。「茂」は繁栄を意味するのかは不明であるが、吉祥句⁽¹¹⁾と考

えられている。一方、当該遺跡の所在する「加茂」、「賀茂」の地名の略とする見解もあったが、加茂遺跡付近の加茂廃寺遺跡で出土した墨書土器の文字に「鴨寺」の文字が書かれてある⁽¹²⁾ことから、地名である可能性は低いと考える。また、人名は出土地も広範囲に点在することから考え難い。「茂」の属性を吉祥句として考えるのが妥当であろう。

以上のように文字資料の整理、検討を試みた。ここでも祭祀に関わる可能性が考えられる。これを敷衍するならば、当該遺構の出土状況と文字との間に有機的な関係があることを示唆する。しかしながら本報告は「与知」、「茂」に関する文字資料が稀少なため、資料の増加を待つて慎重に検討する必要がある。

6. おわりに

本報告では、当該遺構の性格について、祭祀に関連した遺構とし、特に建物や土地に関連した祭祀・儀式が行われたと考え、古代の多様な祭祀形態の一事例として理解するに至る報告を行った。また、これらを構成する墨書土器の文字の意味について整理・検討し遺構の性格と関連がある可能性を指摘した。なお、今後の課題として主に以下のことがあげられる。

- ・ 周囲の建物などの関連性を検討する必要がある。
- ・ 時期については詳細な土器編年をもとに、再検討する必要がある。
- ・ 他の遺構との比較検討を行うことによって、より具体像が浮かび上がるものとする。
- ・ 文字資料の個々の考察が不十分である。今後、文献史学からのアプローチが必要不可欠であり、多方面から検討を行う必要がある。

加茂遺跡の発掘調査の成果は整理途中であり、今後より検討・議論を行う必要がある。このような個々の検討から遺跡としての具体像を考えていくことも重要な作業であり、多様な問題意識を持つ契機となると信じる。調査における検出時での詳細な観察を基に検討・考察することによって遺構、遺跡の評価につながり、また地域史にアプローチできると考える。

最後に、本報告に際して当センター職員の他、以下の方々に御教示・御教授頂いた。記して感謝の意としたい。

鈴木靖民氏 田中禎昭氏 中嶋徹郎氏 森田喜久男氏

【補注】

- (1) 北川晴夫・松尾 実 2003 「加茂遺跡（第8次調査）」『石川県埋蔵文化財情報』第10号 p18～p21（財）石川県埋蔵文化財センター
松尾 実 2003 「加茂遺跡における弥生時代の水田跡の紹介」『石川県埋蔵文化財情報』第9号 p31～p36（財）石川県埋蔵文化財センター
- (2) さらに、調査時において、建物を構成する柱穴の可能性があるととして周囲を精査したが、柱穴としての遺構は検出できなかった。
- (3) 当センター柿田祐司氏にご教示いただいた。
実測図断面の黒ぬりは須恵器を表す。時期は、田嶋（1988）文献に準拠する。
- (4) (社)石川県埋蔵文化財保存協会「加茂遺跡（第4次調査）」『（社）石川県埋蔵文化財保存協会年報』6 p26～31
- (5) 眞喜志悦子 1997 「平安京右京二条二坊のまじない遺構」『つちの中の京都』2（財）京都市埋蔵文化財研究所 p15～16
東 洋一・網 伸也・眞喜志悦子 1997 「平安京右京二条二坊」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 p26～32
- (6) 平川南監修(財)石川県埋蔵文化財センター編 2001 『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』大修館書店 p7の年表による。

- (7) (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1997 『石川県出土文字資料集成』
 本報告では、遺跡の立地・性格などの検討は行わず、墨書土器の出土地・器種・時期を表記した。
- (8) 中森茂明・布尾幸恵・宮川彩子・春田幸恵 1998「石川県出土土器の基礎的検討」『古代北陸と出土文字資料』
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 p75～120
- (9) 宇ノ気町史編纂委員会 1992 「余地の概観」『宇ノ気町史』第2号別巻集落誌 p1202～1217
- (10) 田中禎昭 1995 「「与知」について ―日本古代の年齢集団―」『古代史研究』13号 立正大学古代史研究会
 p1～12
 田中禎昭 1995 「日本古代における在地社会の「集団」と秩序」『歴史学研究』第677号 p24～32
- (11) (注8) 文献
- (12) 津幡町教育委員会 2003 『加茂遺跡・加茂廃寺遺跡 第5・6・7調査区現地説明会資料』

【引用・参考文献】

- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定 加賀地域にみる7世紀から11世紀中頃にかけての土器群の推移」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』 石川考古学会・北陸古代土器研究会
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997 『つちの中の京都』2
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997 『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 宇ノ気町史編纂委員会 1992 『宇ノ気町史』第2号別巻集落誌
- 田中禎昭 1995 「「与知」について ―日本古代の年齢集団―」『古代史研究』13号 立正大学考古学史研究会
- 田中禎昭 1995 「日本古代における在地社会の「集団」と秩序」『歴史学研究』第677号

* 加茂遺跡関連の文献は別頁にまとめて記載している。

【図版・写真出典】

- 図1～図4：新規作成
- 図5：〔北川、松尾(2008)〕をもとに加筆
- 写真1～4：新規作成

【加茂遺跡関連文献一覧】

- 吉岡康暢 1974 「平安後期地方寺院の一例」 『津幡町史』 津幡町史編纂委員会編 津幡町役場
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1992 『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』 3
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1993 『加茂遺跡 ー第1次・第2次調査の概要ー』
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1993 『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』 4
 橋本澄夫 1993 『ドライブ紀行 いしかわ遺跡めぐり 金沢編』 北國新聞社
 三浦純夫 1994 「石川県河北郡津幡町加茂遺跡」 『日本考古学年報』 45 日本考古学協会
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1994 『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』 5
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1995 『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報』 6
 三浦純夫・森田喜久男 1996 「石川・加茂遺跡」 『木簡研究』 第18号 木簡学会
 柿田祐司 1996 「加茂遺跡」 『発掘された地震痕跡』 埋蔵関係救援連絡会議 埋蔵文化財研究会
 森田喜久男 1997 「出土文字資料から見た北加賀の古代 ー加茂遺跡出土の木簡を中心としてー」 『市史かなざわ』 第3号 金沢市史編さん事務局
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1997 『石川県出土文字資料集成』
 (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1998 『古代北陸と出土文字資料』
 兼田康彦 2000 「加茂遺跡」 『石川県埋蔵文化財情報』 第4号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 柿田祐司 2000 「石川県津幡町加茂遺跡についてー道路遺構を中心にー」 『第1回「奈良時代の富山を探る」フォーラム資料』 富山県教育委員会 埋蔵文化財センター
 本田秀生 2001 「加茂遺跡」 『石川県埋蔵文化財情報』 第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2001 『シンポジウム 古代北陸道に掲げられたお触れ書き ー加賀郡勝示札から平安時代を考えるー』
 平川 南監修 (財)石川県埋蔵文化財センター編集 2001 『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』 大修館書店
 宮森俊英 2001 「加茂遺跡の性格をめぐって ー過去の調査成果からー」 『郷土史講座 第7回レジメ』
 藤井一二 2001 「加茂遺跡出土「勝示札」の発令と宛先 ー嘉祥期御触書八箇条を中心にー」 『砺波散村地域研究所研究紀要』 第18号 砺波市立砺波散村地域研究所
 湯川善一 2001 「石川・加茂遺跡」 『木簡研究』 第23号 木簡学会
 柿田祐司 2001 「石川県津幡町加茂遺跡の発掘調査について」 『条里制・古代都市研究』 第17号 条里制・古代都市研究会
 安 英樹 2001 「石川県における地震痕跡」 『古代学研究』 153号 古代学研究会
 座主哲二 2002 「加茂遺跡」 『石川県埋蔵文化財情報』 第8号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002 『シンポジウムの記録 古代北陸道に掲げられたお触れ書き 加賀郡勝示札から平安時代を考える』
 藤井一二 2002 「平安農村の農事と生活歴 ー「加賀郡符木簡」の構成と意義」 『古代における荘園農事の展開と開拓村落の形成・変容に関する基礎的研究』 平成11・12年度科学研究費〔基礎研究C〕研究成果報告書
 湯川善一 2002 「文化財レポート 石川県津幡町加茂遺跡出土の加賀郡勝示札とその意義」 『日本歴史』 第654号 吉川弘文館
 小嶋芳孝 2002 「加茂遺跡と加賀郡勝示札 北陸道に掲げられた平安のお触れ書き」 『石川ふるさと歴史館』 橋本澄夫他編集 北國新聞社
 北國文華編集室 2002 『北國文華』 北國新聞社
 藤井一二 2003 「大伴池主・家持と「深見村」 ー万葉集と加茂遺跡木簡を中心にー」 『越の万葉集』 笠間書院
 三浦純夫 2003 「北陸の駅家関係遺跡 ー石川県津幡町加茂遺跡を中心にー」 『駅家と在地社会』 研究報告資料 古代官衙・集落研究会 独立行政法人 奈良文化財研究所
 松尾 実 2003 「加茂遺跡における弥生時代の水田跡の紹介」 『石川県埋蔵文化財情報』 第9号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 北川晴夫・松尾 実 2003 「加茂遺跡」 『石川県埋蔵文化財情報』 第10号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 平川 南 2003 「第1章 5 勝示札一文書伝達と口頭伝達」 「第2章 5 小型の過所木簡ー石川県加茂遺跡」 『古代地方木簡の研究』 吉川弘文館
 平川 南 2003 「古代における里と村ー資料整理と分析ー」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第108集 国立歴史民俗博物館
 津幡町教育委員会 2003 『加茂遺跡・加茂廃寺遺跡 第5・6・7調査区現地説明会資料』
 金田章裕 2004 「古代の郡・郷と村についての覚え書きー「加賀郡勝示札」をめぐってー」 『日本歴史』 第668号 吉川弘文館

調査報告

御館遺跡

安 英樹

1 はじめに

御館遺跡（第1図30044）は羽咋郡押水町御館地内に所在し、宝達山系の低位丘陵からその裾に広がる平野部にかけて立地する。発掘調査は押水町教育委員会と石川県立埋蔵文化財センターがそれぞれ行っているが、小文では後者の遺構・遺物を紹介したい。調査の原因、面積、期間、担当者などは下記のとおりである。なお、遺跡名については、調査時は「御館遺跡」とは別遺跡として「御館下遺跡」となっていたが、その後、「御館遺跡」に含まれるものということで変更になった。記録資料と出土品については石川県埋蔵文化財センターで保管されている。

調査原因 県営ほ場整備事業（御館地区）

調査面積 280㎡

調査期間 平成4（1992）年11月18日～12月3日

担当者 本田秀生、安 英樹

補助員 大藤雅男

2 調査区と遺構

調査区はほ場整備の排水路掘削によって遺跡が破壊される部分に相当し、丘陵裾に広がる平野部を東西方向に貫く幅2m・延長140mのトレンチである。記録の基準はN-88.5°-Eを指す排水路の中心軸線であり、西端を0mとし、東へ向かって140mまで数えた（第2図・第3図）。

層序（第4図）は上位から現耕作土、旧耕作土、遺物包含層、地山と推移する。遺物包含層は茶灰色粘質土が基調であり、よく木質を含む一方で、遺物は少なく、腐植土的である。上位の黒灰色粘質土はそれが泥炭化したものであろう。地山は強粘性の黄灰色～灰白色粘質土であり、遺物包含層との間には凹凸が見られる。№1・№4地点は特に凹凸が大きく、落ち込みが存在するようであり、漸移層（層8）も見られる。地形は緩やかに東から西へ下降しており、標高は東端で15.3m、西端で13.0mを測る。ただし、60～100m地点では標高14.5m前後とほぼ平坦で、100～130m地点では緩やかな落ち込みが見られるなど一様ではない。

遺構は全体に希薄であり、調査区の西側でわずかに穴、溝を検出した。溝は60m地点に位置する（第3図）。幅20cm、深さ5cm前後の細く浅い溝であり、北北西・南南東方向に走る。北側は不整形な穴と重なりよくわからない。溝内から弥生土器が1箇所にとまって出土している（第5図）。

3 遺物

遺物は弥生土器、石器、陶磁器が出土しており、量はパンケースLⅡ型に1箱と少ない。遺物の主体は弥生土器であり、石器は輝石安山岩の剥片1点で、陶磁器は中世から近代にかけてのものが数点出土しているのにすぎない。図化したものは15点である。

第6図1～7は溝からとまって出土した遺物である。すべて弥生土器であり、1～4は甕、5・6は壺、7は高杯である。1は丸縁で直立気味の有段口縁で、胴部はあまり張りそうにない器形である。口縁は約1/6が遺存し、径17cmに復元される。口縁帯には5～6条の擬凹線が引かれ、外面全体にススが付着する。2は擬凹線をもつ有段口縁、3は頸部であるが、ともに摩耗して遺存が悪い。4は胴部で、外面全体にススが付着する。5は頸がすぼまる器形から壺とした。ほぼ水平方向に2条の線刻が見られる。6は底部であり、丁寧な調整と重厚な作りから壺とした。約1/4が残存し、底

径は6cmに復元される。7は高杯の脚部で、筒状の支柱と緩やかに開く裾が推定できる。下端には透穴が1箇所遺存する。この他、弥生土器破片が多く出土しているが、そのほとんどはこれらと同一個体と思われる。全般に遺存が悪いため接合できなかったが、本来は複数の個体がより完形に近い状態で溝内に存在したものと推定される。以上の弥生土器は、概ね能登南部の土器編年でいう弥生時代後期の7期に位置付けられる¹。

第6図8～15はその他調査区内で出土した遺物である。8～13は弥生土器であり、8～11は甕、12は壺、13は高杯である。14・15は珠洲焼の甕である。8は口縁の開きや頸の屈曲、胴の張りが弱く、全体にめりはりに乏しい器形である。短い口縁部のみヨコナデ、他は全面ハケ調整であり、特に外面は縦方向に揃う。口縁の先端にはヘラ状具による刻みがめぐる。口縁は約1/6が残存し、径は17cmに復元される。9はくの字口縁で、端を面取りし下方へ少し伸ばしている。外面は褐色の皮膜がこびりつき、調整不明である。口縁約1/2が残存し、径17cmに復元される。10は丸縁で外傾する有段口縁であり、口縁帯には8条の擬凹線が引かれる。口縁は約1/6が遺存し、径17cmに復元される。11も10と似るが、遺存が悪い。12は太くて長い頸をもつ。調整は外面ハケ、内面は9と同じく褐色の皮膜により不明である。13は全体に摩耗している。杯部と脚部の接合される部位であり、孔を塞いでいた粘土が剥離したものである。14は外面の平行タタキの密度が2.5本/cmと低く、タタキは太くて深い。15は外面の平行タタキが縦方向のち斜め方向に重ねられており、密度はそれぞれ3本/cm、4本/cmと異なる。弥生土器については8を除けば溝から出土したものとほぼ同時期である。8は器形、調整、装飾とも古い手法であり、弥生時代中期でも前半段階に位置付けられよう。珠洲焼については小破片のため、中世の詳しい時期まではわからない。

なお、弥生土器の胎土を肉眼観察したところ、県域北部に特徴的である海綿骨片が確認できなかった。周辺遺跡の土器生産を考える際、参考になるとと思われるので付記しておく。

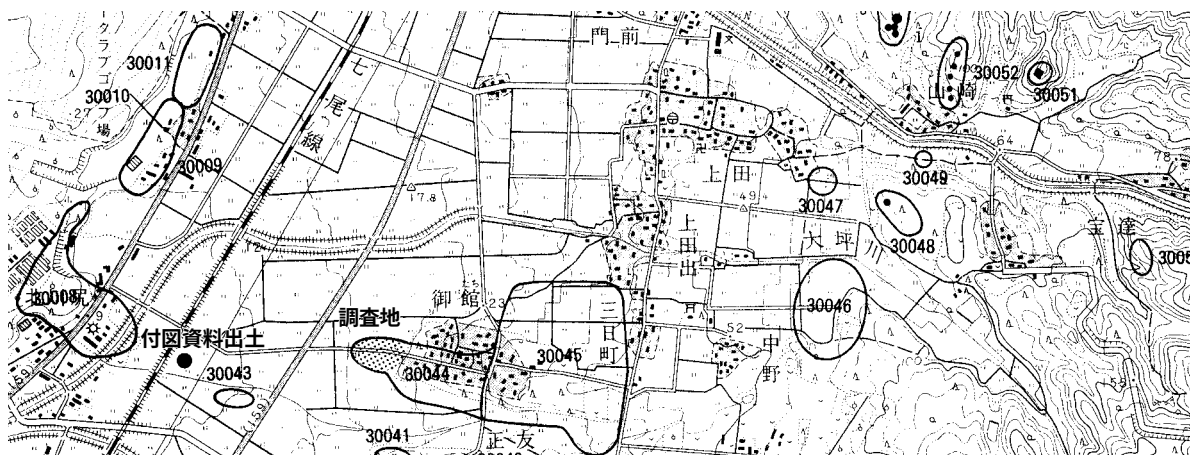
4 まとめ

調査区内の状況は、低湿な地形で、遺構・遺物も希薄であった。時期は弥生時代中期、中世の遺物が若干出土しているが、弥生時代後期が中心である。押水町教育委員会が行った発掘調査では、御館館跡（第1図30045）が所在するより東側の丘陵上でもこの時期の遺物が出土しており²、遺構・遺物の中心はより居住に好適なこちらに求められる可能性があるだろう。なお、調査区内で検出された溝と出土した弥生土器については、日常的な廃棄としては周辺の遺構・遺物が希薄な状況に対して不自然であり、遺跡の外縁における溝内祭祀³の一類型と考えている。

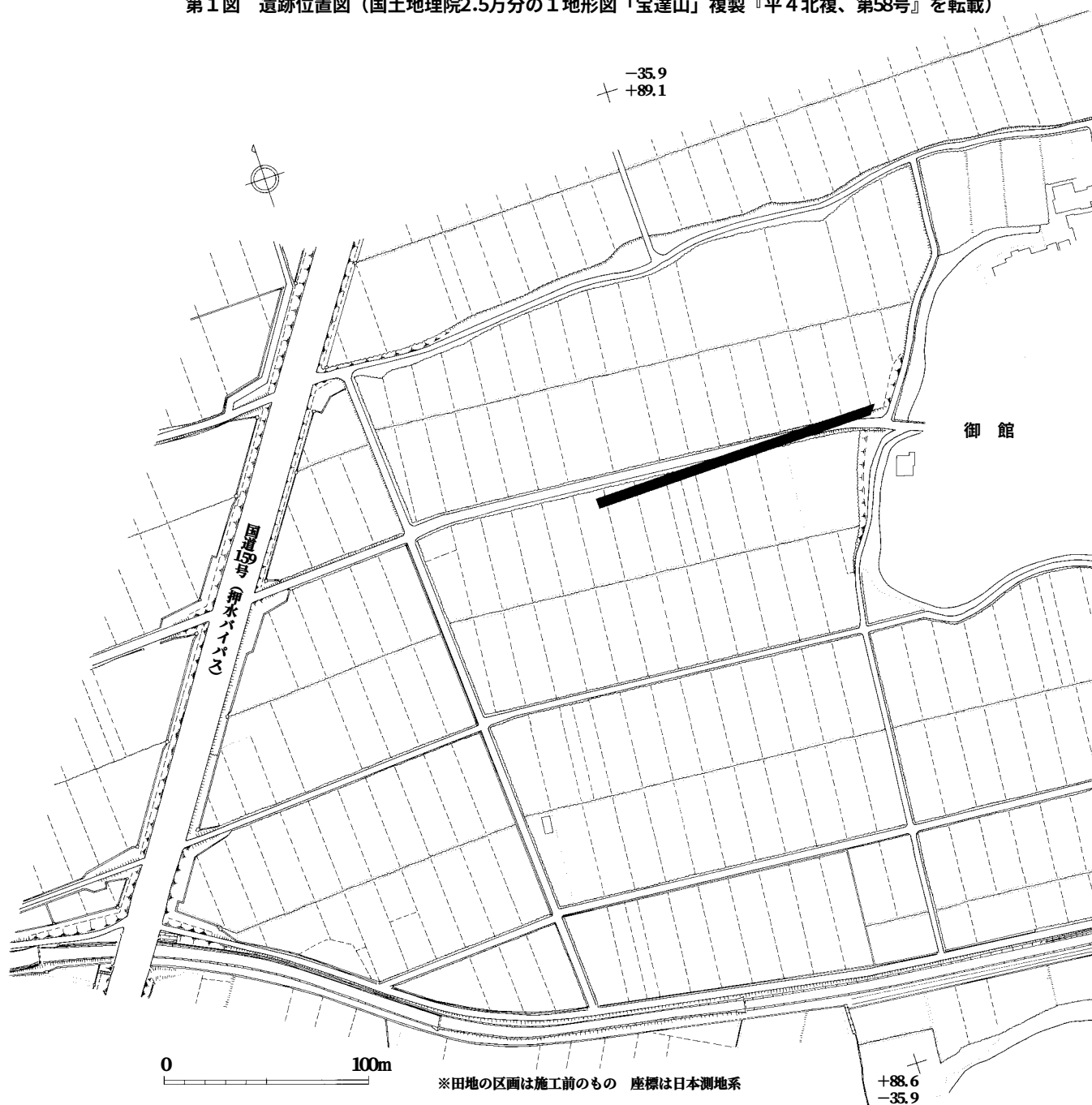
付 記

付図は、羽咋郡押水町北川尻地内（第1図の●地点あたり）で出土し、当センターへ持ち込まれた資料である。詳細な出土地点や出土状況は不明であるが、工事中に出土したものを採集したとうかがっている。

資料は須恵器の台付長頸瓶であり、口径・底径12cm、胴部最大径20cm、器高25cmに復元できる。口縁部は完存、胴部は約2/3が遺存、底部は約1/4が遺存する。胴部下半から底部の欠損が大きい。割れ面の約1/2は新しい破損である。色調は灰色で、焼成は良好・堅緻であり、肩部外面と口縁部内面には不均等な降灰が見られる。胎土は粒径2mm前後の砂礫が器面に表出し、より微粒のものも多く含まれる。器形は扁球形の胴部、外反が強い厚手の台部、外反する長い口縁部が接合されたものである。調整は全体がロクロナデで、胴部外面下半はロクロを用いないヘラケズリが、口縁部内

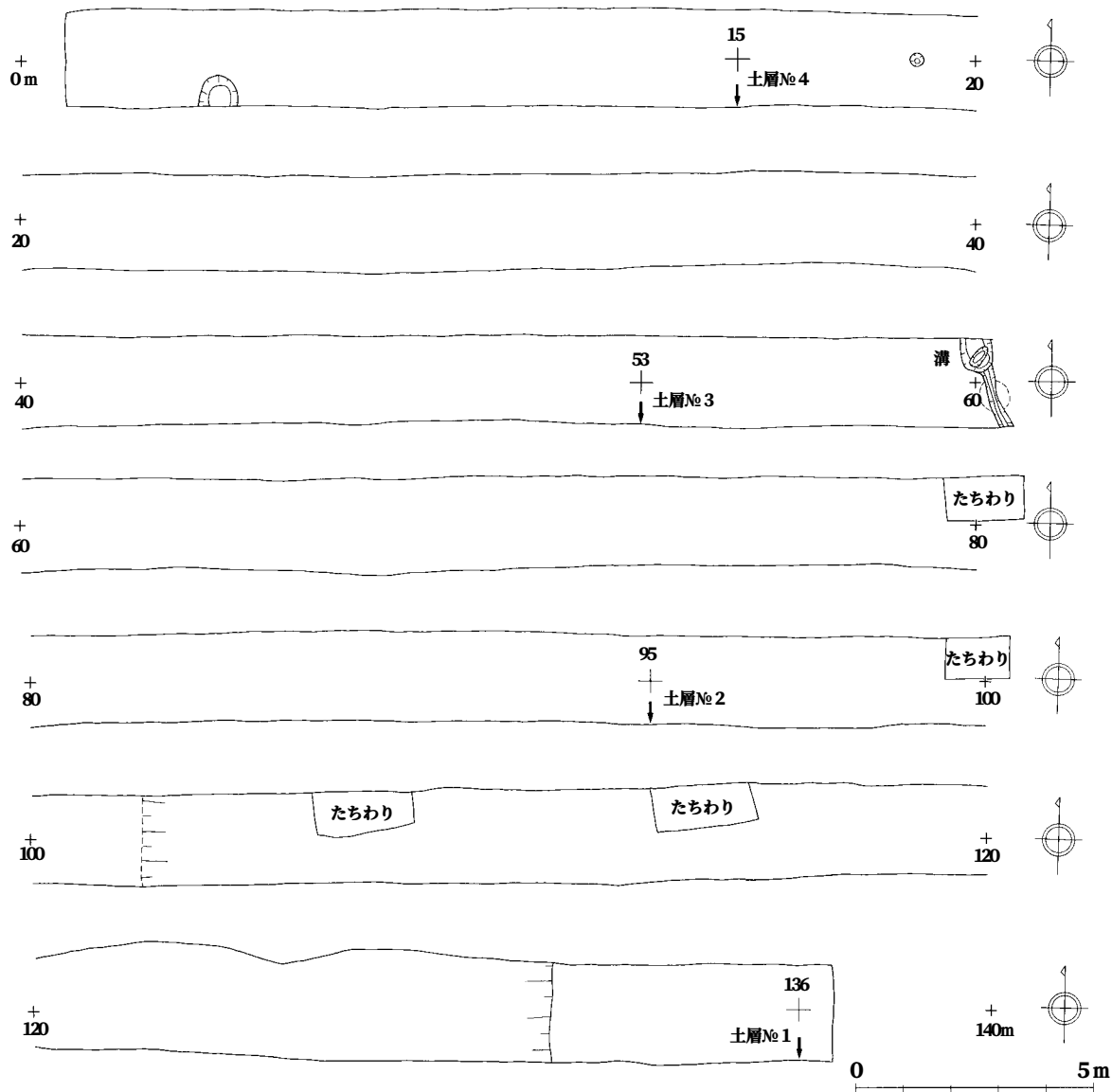


第1図 遺跡位置図（国土地理院2.5万分の1地形図「宝達山」複製『平4北複、第58号』を転載）

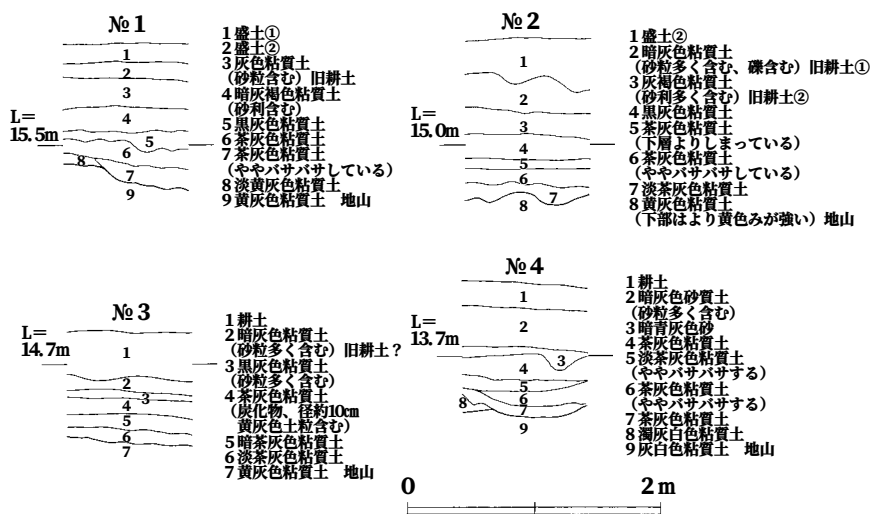


※田地の区画は施工前のもの 座標は日本測地系

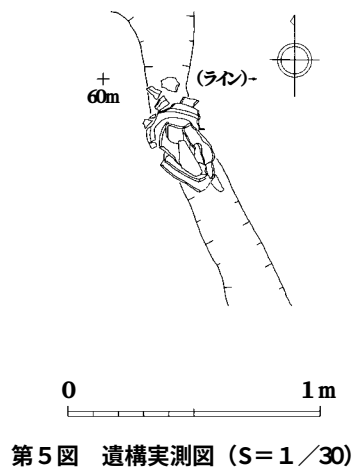
第2図 調査区位置図 (S=1/3,000)



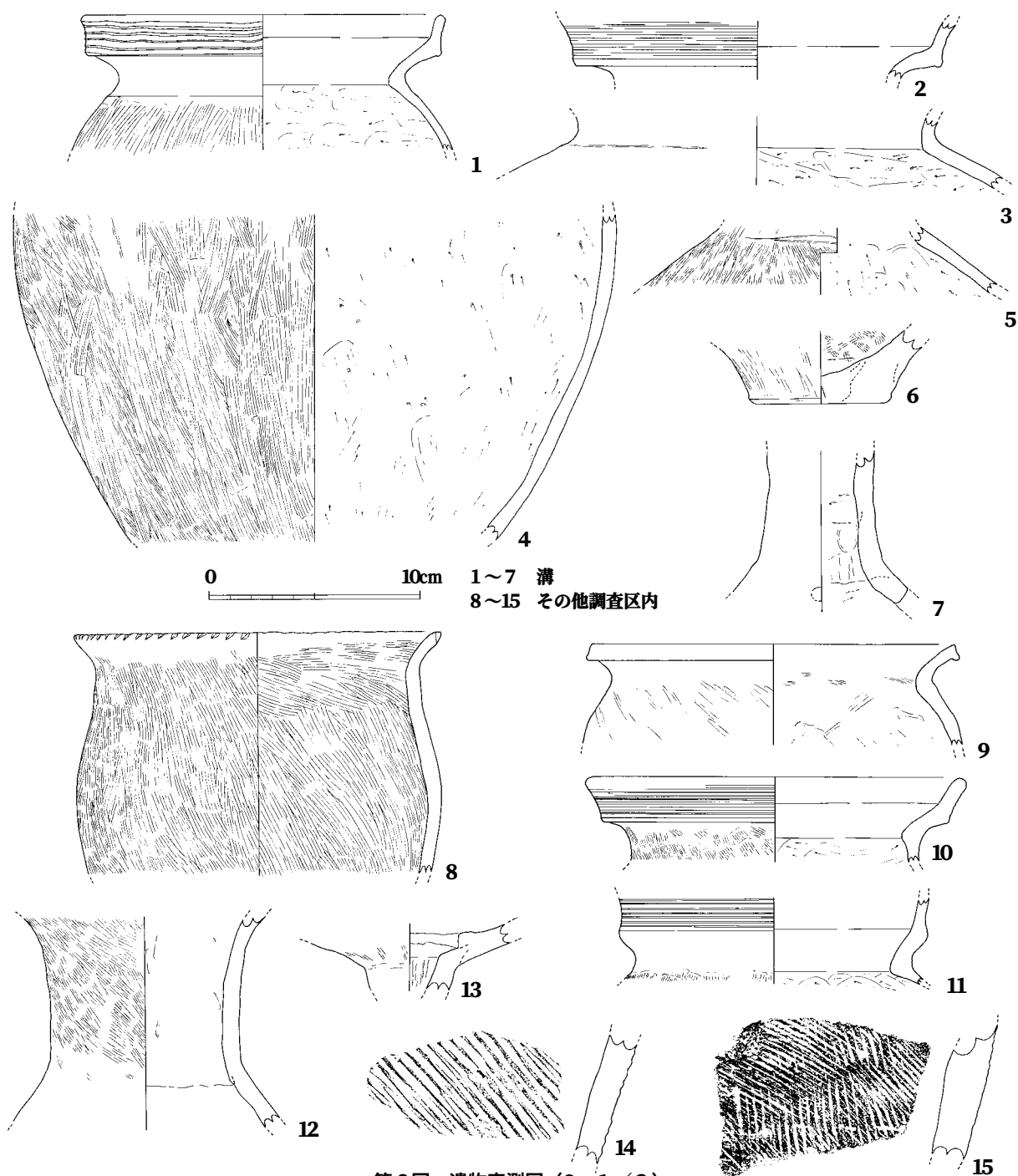
第3図 調査区実測図 (S=1/150)



第4図 土層断面図 (S=1/60)



第5図 遺構実測図 (S=1/30)



第6図 遺物実測図 (S=1/3)

遺物観察表

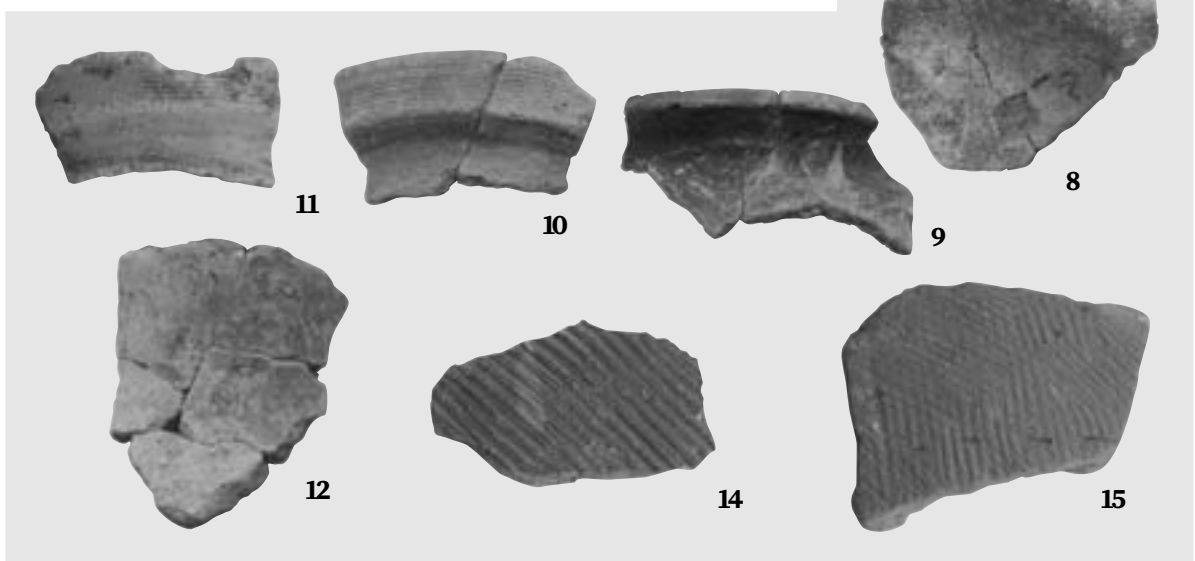
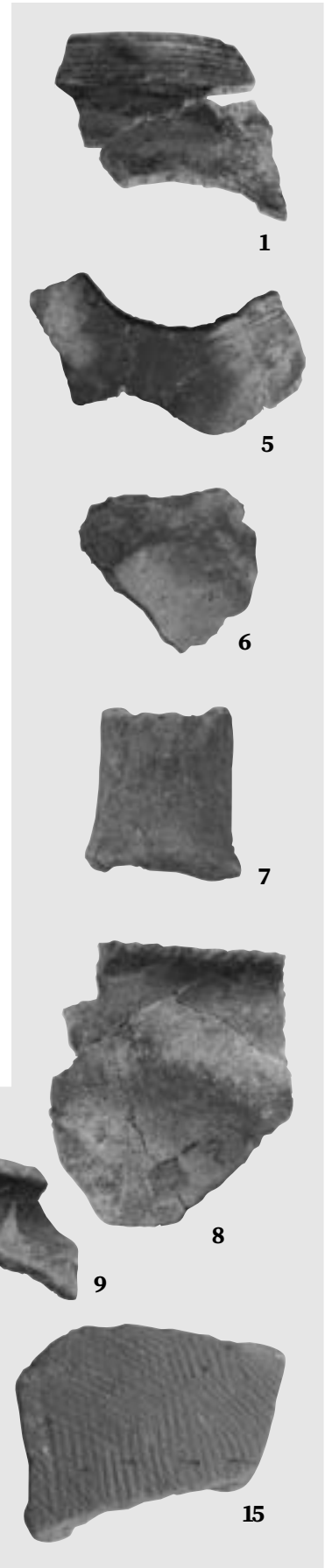
番号	仮番	種類	器種	外面調整	内面調整	色調	胎土	焼成
1	8	弥生土器	甕	擬凹線、ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ケズリ	黄褐	密、石英・長石の粗砂多、雲母	良好
2	12	弥生土器	甕	擬凹線、ヨコナデ	摩耗	浅黄橙	密、石英・長石の粗砂多、赤色粒	やや軟
3	11	弥生土器	甕	摩耗	ケズリ	浅黄橙	密、石英・長石の粗砂多	やや軟
4	14	弥生土器	甕	ハケ	ケズリ	橙褐	やや粗、石英・長石・チャートの粗砂多	良好
5	13	弥生土器	壺	ハケ	ケズリ	浅黄	密、石英・長石の小石・粗砂多	やや軟
6	10	弥生土器	壺	ミガキ	ハケ	灰黄褐	密、石英・長石の細砂・粗砂多	良好
7	9	弥生土器	高杯	摩耗	ケズリ	赤橙	密、石英・長石の細砂、赤色粒	やや軟
8	4	弥生土器	甕	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	橙	やや密、石英・長石の粗砂多、赤色粒	良好
9	1	弥生土器	甕	ヨコナデ、ハケ?	ヨコナデ、ケズリ	灰黄褐	密、石英・長石の粗砂多、赤色粒	良好
10	3	弥生土器	甕	擬凹線、ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ケズリ	浅黄橙	やや粗、石英・長石の粗砂多、赤色粒、雲母	良好
11	2	弥生土器	甕	擬凹線、ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ケズリ	明橙	密、石英・長石の細砂、赤色粒、雲母	良好
12	6	弥生土器	壺	ハケ	ハケ?	灰黄褐	密、石英・長石の粗砂・細砂、雲母	良好
13	5	弥生土器	高杯	摩耗	摩耗	淡橙	密、石英・長石の粗砂多、赤色粒	良好
14	7	珠洲焼	甕	タタキ	ナデ、当て具痕	濃灰	密、石英・長石の小石・細砂	良好
15	15	珠洲焼	甕	タタキ	ナデ、当て具痕	濃灰	密、長石の微砂	良好・堅緻



調査区全景（西から）



溝全景（南から）

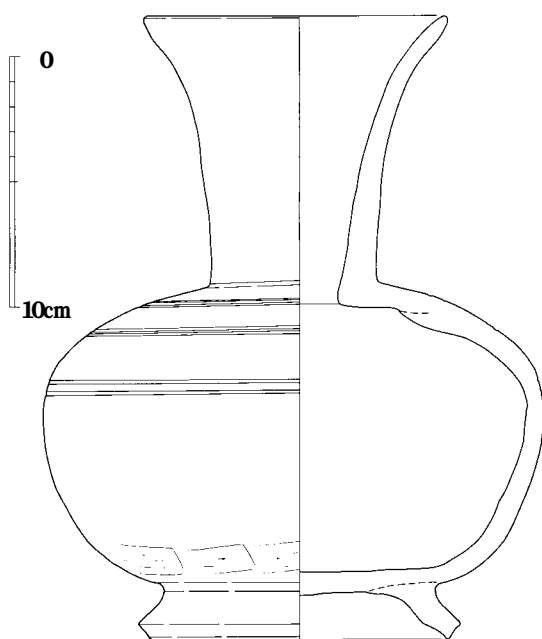


面は成形時のシボリ痕が見られる。装飾は、胴部外面の上半にロクロによる沈線帯が3段設けられている。

資料の時期であるが、長頸瓶の中では肩部が屈曲しない古い形態であり、類品は山崎横穴群（第1図30052）1号墓⁴や羽咋市柳田タンワリ1号窯⁵に見られる。ただし、装飾や調整、形態からやや新しい様相も見られるので、7世紀後半～末ごろと推定したい。生産地は含有される砂礫種が石英・長石であることと、付近の須恵器窯分布から、近接する押水・高松窯跡群の可能性が高い⁶。周辺では西300m先に位置する北川尻オサノ山遺跡（同30008）⁷からほぼ同時期の遺物が出土しており、関係する可能性がある。また、御館遺跡と御館館跡でも、古墳時代・古代の須恵器が出土しており、御館館跡のものはほぼ同時期である⁸。周辺遺跡の消長とも連動しているようであり、興味深い資料である。

注

- 1 石川県立埋蔵文化財センター『谷内・杉谷遺跡群』1995年 519頁
- 2 石川県羽咋郡押水町教育委員会『御館館跡』2002年 134頁第84図362・363
- 3 吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁〔古代編〕』1991年 六興出版 405・417～421頁
- 4 石川県羽咋郡押水町史編纂委員会『押水町史』1974年 107頁
- 5 石川県立埋蔵文化財センター『柳田タンワリ1号窯』1982年 32頁第17図212・214・217
- 6 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年 189～191・222頁
- 7 村井一郎「羽咋郡押水町北川尻オサノ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第10号 1966年 石川考古学研究会 94頁第3図
- 8 石川県羽咋郡押水町教育委員会『御館遺跡』1998年 12頁第7図、注2文献146頁第92図



付図 北川尻地内出土の須恵器（S = 1 / 3）

石川県埋蔵文化財情報
第11号

発行日 2004(平成16)年3月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地 1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター